

俺と私の日記帳

竹俣 兼光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故かようじよの中に偏った知識の多い男の精神が入り込んだ。

混ざり合うこともなく、反発し合うこともなく。

ただ、友として。愛する家族として接するハートフルストーリー

これはF a t eだ。そう F a t e運命なのだ。

彼女は大きくなれば英雄となる。それ相応の苦難と絶望と死がある。

これはそんな彼…いや、彼女の日記。

目次

幸せだった日々

俺とわたしの出会った日 | 1

強くなるための日 | 14

お願い（脅迫）した日 | 26

戦った日 | 36

Mon premier ami

47

敬老の日 | 59

親友に大笑いされた日 | 70

初めまして（サヨウナラ）の日

77

恋愛した日 | 89

有名人と出会った日 | 101

心の底から告白した日 | 107

結婚式より少し前の日 | 115

幸せだった日 | 121

不幸の始まった日 | 132

お別れの日 | 142

B・n・diction | 151

俺の覚悟をした日 | 168

俺になった日 | 177

初仕事した日 | 186

気に入られた日 | 198

U n e q u e s t i o n ① | 207

運命を信じた日 | 216

死んだ日	332
320	
HENTAIに会いに行った日	313
またまた再会した日	304
再会した日	293
無茶振りされた日	281
復讐を遂げた日	273
秘密の日	263
休みの日	253
”英雄”になった日	237
奪い取る日	224
音楽の日	

幸せだった日々

俺とわたしの出会った日

やあ！はじめまして。

俺は…まあ名前はいい。

さて、早速だが皆に質問だ。

ヨーロッパとかってカツコよく思ったりした事ないかい？

まあ、人それぞれだろう。

俺は憧れた。親に頼み込んでレイピアやアーチェリーなんかを習わせて貰う位には。

やるからにはと、大会も何度か出場した。優勝こそできなかったものの、それなりに良い成績を残せたと思う。

大人になってからは銃がカツコいいと思い、クレー射撃なんかもやった。

うん？自分語りが長いつて？

…すまん。少し現実逃避したかったんだ。

こんな風に記憶はしっかりしてる。成人男性だったと記憶してる。

正面には困惑した顔の少女。可愛らしいヨーロッパ風のドレスを着ている。もう少し離れて見ると正面にあるのは鏡だと分かる。

俺……少女だったっけ……？

いやいやいや、成人男性だとしてっかり記憶している。おかしい。

「あなただれ？」

〈うん？俺しやべった？〉

「ずつとしやべってるよ」

〈今喋ったのは俺じゃなくて君？〉

「うん。わたしだよ」

〈そっかあ。俺は多分君のナカに居るから、周りには声は聞こえないはずなんだ。〉

「？うん。」

〈そうすると君は一人で話してる女の子になっちゃう〉

「うん」

〈周りから見ると気持ち悪いんだ。〉

” やだ ”

” やだやだやだ ”

「ぎらわれ”だぐないよ”お」

〈おちつ、落ち着いて！泣かせたいわけじゃないんだよ
「づう」

〈言いたいことを頭の中で考えてみて？〉

”ここう?”

〈それで大丈夫。〉

”ありがとう。おにいさん”

〈どういたしまして〉

”わたしはメルセデスっていうの。おにいさんは?”

〈俺？俺は…そうだなあ俺は俺だけど、俺は君なんだ。

記憶は男で大人でも君なんだ。

だから俺はメルセデスだよ。〉

”?わかんない!”

〈そっか。

じゃあ君が俺に名前を頂戴?〉

”うーじやあわたしのこときみじゃなくてメルセデスって呼んで”

〈うーんメルセデスだと長いなあ…〉

”お父さんとか、お母さんとか、フェルナンおにいさんとかはわたしのことメリーっ

て呼ぶよ”

〈じゃあメリー、俺に名前をつけておくれ〉

” わかった!

えーつと、おにいさんは、わたしで、でもちがくて:

わたしはメルセデスで、おにいさんもメルセデスだから:

おにいさんは、メル!

メルおにいさん!”

〈メル……メルだね。ありがとうメリー。〉

” きにいつてくれた?”

〈ああ、とつても!〉

あとメリー、《メルおにいさん》は長いだろう?メルでいいよ。〉

” でも、お母さんが『年上は敬いなさい。それが淑女です!』つて”

〈そっかあ。

俺は君での友達で居たいんだ。

君は友達に敬語なのかい?〉

” …ともだち?ご本でよんだよ!なかよしで、いっしよにあそんで、いっしよにいた
らたのしいんだつて!”

〈そうだね。メリーは俺と話しててつままない？〉

「ううん！すつごくたのしい！」

〈じゃあ友達になつてくれるかい？〉

「うん！ともだちなんてはじめてできた！」

よろしくね！メル！」

〈よろしくねメリー。〉

でも他にお友達居ないのかい？〉

「おべんきようばかりで、お外はおにわにしかでたことないよ」

〈そっか…〉

コンコン

〈びっくりした…〉

「はい、なんでしよう？」

〈待つてメリー、さつき泣いたせいで目が赤くなつてたりしない？〉

「だいじょうぶだよメル」

「メリー、愛しのメリー。勉強は終わったかい？」

〈えつと…こいつは…？〉

”フェルナンおにいさん”

〈フェルナン?〉

ふーん?なんか…こう…視線が気持ち悪い。五歳児にむけるモノじゃない。〈
”そうなの?”

〈こういう奴は大きくなったらなんかやらかすから気をつけておきなよ。〉

”はい”

「メリー?」

不審に思ったフェルナンが近づいてくる。

「すみません。すこしボーツとしていました。」

そうやって一歩後ずさる。

「どうして逃げるんだい?」

そうやってどんどんと近づいてくる。

「なんですか。こないでください。」

壁にぶつかり、これ以上後ろには進めない。

「どうしてそんなこと言うんだい?」

近づいてきて手首を掴まれる。そしてどんどん顔が近づく。

〈メリー、交代だよ。〉

”え?”

メリーとメルが入れ替わる。

「触るな」

そう言つてメルセデスは男なら誰でも付いている弱点に蹴りを入れる。

「くあ w s e d r f t g y f u j i c o i p」

言葉にならない叫びを発しながら崩れ落ちる。

「バアカ」

そう言つてメルセデスは部屋から駆け出した。

メルセデスは自分の部屋から駆け出し、近くを歩いていた女中に抱きつく。

「助けて下さい!」

必死な顔でそう叫ぶ。

「お嬢様、どうされたのですか?」

女中に聞かれた途端にポロポロと大きな瞳から雫が落ちる。

「フェルナン、おにいさん、が…」

しやくりをあげながらも伝えようとする。

「フェルナン様がどうかされたのですか!？」

「違うの、急に近づいてきて、壁に押し付けられて……うえええん!」

メルセデスは大声で泣きだす。

書齋に居る父や、部屋に居る母にも聞こえるほどの大声で。

「何事だ!よもや貴様が娘を泣かせたのか!」

走って駆けつけた父親は泣いているメルセデスをあやそうとしている女中に怒鳴る。

「ちがつ!」

「違うの!フェルナン、おにいさんが……ふええええん!」

また同じことを説明しようとしたメルセデスは恐怖がぶり返したのかまたも大泣きする。

「…お嬢様はフェルナン様に襲われたようでございます。」

父親は驚いた顔をし、メルセデスに確認する。

そしてそれが真実だと知った時、フェルナンがメルセデスの部屋の扉を開けて出てくる。

「メルセデス!それにおじ様!どうなされたのですか?」

さも何もなかったかのようにフェルナンは振る舞う。

しかし、あまり泣くことのなかったメルセデスがここまで泣いている。それならば父親としてすることは1つ。

「フェルナン君。金輪際私達の屋敷には近づかないでくれたまえ。」

そう言つてメルセデスを抱き上げて背を向ける。

フェルナンは女中や執事にやんわりと追い返された。

疲れた。本当に疲れた。

大きくなつてから来るかと思つたが、最近のガキは19世紀ませているようだ。

そうだ。ここはヨーロッパ風ではなくヨーロッパだつた。19世紀の。

まあなつたことはなつたことで置いといて、

とりあえずは最直近の危険は取り除いた。

〈大丈夫？怖くなかつた？〉

「こわかつた……けどメルがいてくれたし、たすけてくれたからだいじょうぶ。」

〈そりやもちろん。俺はメリーの友達だからね。〉

それでも、箱入り娘のメリーにはとつても怖かつただろう。

外に出ないから肌は白いしヒョロヒョロだ。
今度どうにかしよう。

あと、『お父さん』がメリーに欲しいものはないかと聞いて、日記を書くための本が欲しいと言っていた。

ああ、メリー！メリー！愛しのきみ！

僕のメリー！

食べてしまいたいくらいだ！

少年は意気揚々と廊下を歩く。スキップと言っていていいかもしれない。

そして少年は扉を叩く。

そしてすかさず

「はい、なんででしょう。」

鈴を転がすような声が聞こえる。

嗚呼美しい！小鳥の囀りのようだ！

少年は扉を開く。

部屋の中はとても豪華だった。

大きなシャンデリアがぶら下がり、上質な赤絨毯が敷き詰められている。

大きな本棚にはこれまた大きな分厚い本がぎっしりと詰められている。

そんな中、鏡の前に立つ美しい少女が目を惹く。

真雪のように白い肌。赤くぷっくりとした唇。

そして特筆すべきはその瞳と髪だろう。陽の光が当たれば瞳は藍や翠に輝き、髪は金や赤、桃色に輝く。さながらミステリックトパーズの様だった。

「メリー、愛しのメリー。勉強は終わったかい？」

そう声をかけるが、返事がない。

無視しているのだろうか？

まさか！あの心優しい天使が！この僕を無視するなんて、嫌うなんてあり得ない！

「メリー？」

メリー、メリー、メリー！君は僕を嫌ってなんかいないだろう!?

「すみません。すこしボーツとしました。」

ああ、なんだただの考え事かい？いや、そうは言っているがきつと僕に見惚れてときめいていたんだらう？

一歩ずつ近づいて行く。

そして少女は後ずさる。

「どうして逃げるんだい？」

知ってるよ。君は恥ずかしがり屋さんだからね。

大好きな僕が近づいてきて恥ずかしいんだらう？照れてしまったんだらう？

「なんですか。こないでください。」

ふふふ。強がつてる君もとっても可愛い。

さあ、恥ずかしがらずに僕に抱きついておくれ。

「どうしてそんなこと言うんだい？」

彼女は壁にぶつかり、もう下がれない。

彼女の細い手首を握る。

元々は5つ離れているため、メリーは逃げ出せない。

照れ屋な彼女にキスをする為、顔を近づける。

しかし、

「触るな」

そう言つてメルセデスは男なら誰でも付いている弱点に蹴りを入れる。

「くあwse d r f t g y ふじーp」

言葉にならない叫びを発しながら僕は崩れ落ちる。

「バアカ」

そう言つてメルセデスは部屋から出て行つてしまった。

…怒つた顔もとつても可愛いよメリー。

どんな手を使つても手に入れたいくらいに。

強くなるための日

●月▲日

くもり

きのうはすごくいやなことがあった。

そのせいでちよつぱりおとこのひとがこわい。

なんにもしてこないとおもうけど、でもなんかいや。

でも、メルや、お父さんはだいじょうぶだった。

きようはメルが「あんな事になった時に対処できるように体を鍛えない？」ときいてきた。あさごはんのまえだったからお父さんにおねがいしてみた。

きようのおひるごはんにお父さんはおくれてきたけど、ごはんがおわったくらいに先生ができた。

つらかったけど、メルがやさしくアドバイスしてくれたからうまくできた。

メルがやりたそうにしてたからかわってあげたらすごくつよかった。

ぬかせるようにがんばる。

さて、フェルナンの件から早数日：

なんて事はなく、次の日。

メリーはどうやら男嫌いになり掛かっている様だ。

うん？俺？なんともないよ。

可愛らしい美少年（変態）に迫られただけじゃ動じないぜ！

ドM、おっさん、天使：うっ頭が！

まあどうでもいい。

とりあえず、メリーのトラウマをどうにかしないと。

うーむ：

男が自分より弱いとなればいいか？

手っ取り早く武器を持たせるのと、いらなくらい強くしてみるの：どちらにしろ鍛えないとダメか。

〈おはよう、メリー〉

” おはよう、メル”

〈ご機嫌だね〉

” うん。メルがいる事が夢じゃなかったから。”

「そつか。ところでメリー、君は昨日のことは大丈夫かい？」

「まだちよつぱりこわいかも。」

「それなら、あんな事になつた時に対処できるように体を鍛えない？」

「なにをするの？」

「フエンシングとかみたい武器を持つ奴か、バリツとかみたいな格闘技のどつちかじゃないかな。」

「メリーのしたい方でいいと思うよ。」

「まえにメルがいつてたフエンシングがしてみたい！」

「でも、それだとレイピアがないとちからにならないよね……」

「へいいや？少し筋肉をつけるだけでも意味はあるよ。」

「けど、心配ならいつそのこと両方やってもいいんじゃないかな。」

「じゃあお父さんにはなしてみるね。」

「寝巻きからドレスに着替へつ、そんな事を話す。」

「普通、ドレスは使用人なんか手伝つてもらいながら着る物だ。」

「しかし、使用人はいない。」

「何故か？」

それは、日が昇り始めたばかりの外を見ればわかる。

メリーは5歳だというのに起きたのは日の出と同時だった。今が夏であることを考慮すると睡眠時間が圧倒的に足りない。

倒れないだろうか。

ハラハラとする此方のことなど知らずにテキパキと着替えていくメリー。

淡い黄色のドレス。肌が透けるほど薄い：わけはなく、透けない程度の厚さのモスリンできている。

胸元がガバリと開き、ハイウエストの部分を絹でできた太い橙のリボンで締めている。

つまるところシユミーズドレスなんだが、この時代でも子供には着せないだろう：普通。

少し高めのヒールを履き、くるりと鏡の前で一回転する。

後ろにギャザーがあるため回るとふわりと膨らむ。足首まで隠れる長さなので転ばないかも心配になる。

「にあつてる…かな？」

へとつても可愛いよ。〳

「よくお似合いでございます。」

扉の前にはメイドさんが一人。

愛らしいものを見る目で見つめてくる。

「もう…ノックくらいしてください！」

メリーは頬を膨らませて怒っている様だった。…可愛い

「申し訳ございません。ノックは一応しましたが、昨日のことがあつたのであまり強くはしなかつたのです。」

確かにきのうはフェルナンがノックしてから入つてきた。

けどその時近くにいたのだろうか？

…いやまあフェルナンもそれなりにマナーは叩き込まれているだろう。ならば自然か

「そうだったの…ありがとうございます。」

「いいえ、仕事ですから。」

そう言つてメイドさんは此方に近づき、細かい身だしなみをチェックしてくれる。

「大丈夫そうですね。では朝食の席へ向かきましょう。」

食卓につき、お母さんとお父さんに挨拶をする。

そして、食事の前に「お父様、おねがいがあるのですが…」と切り出した。

「んん？お父様？あれ？この子結構猫被り？」

「わたしは、つよくなりたいたいのです。どうかきよかをいただけませんか？」
じつと此方を見つめた後、

「食事は書齋で摂る。後で運んで来い。」

とだけ言ってもどつていった。

” お父さん…ダメっていうかな…”

「さあねえ。俺は分かんないからなあお父様の事は。」

” ちよつと?”

「冗談だよ。まあ俺たちはお父さんを信じるしかないしね。」

” うん…”

いつもどうりだという家庭教師との勉強を行った。俺が増えた事による並列思考をふんだんに使っているため、進みが早く、どんどんと進んでいく。

「お嬢様は素晴らしいくらいに才能があります。」

ですが、あなたは肉体と精神がかみ合っていない様に感じますね。」

無駄にイケメンで黒髪の胡散臭い笑いが特徴的な家庭教師だった。

昼になり、使用人に食事だと呼ばれる。

今度は執事だったため、メリーは少し怯えている様に見えた。

食卓についたが、まだお父さんがいない。

「お母様、お父様は？」

「さあ？分らないわ。きつとお仕事が忙しいのよ。」

メリーが学んでいる教科からも察することができると、おそらく商人なのだろう。経済学や、心理学、果ては航海術までであった。

「すまない。遅れた。」

そうして、食事が始まった。

あまりお父さんは話さない人の様で、お母さんとメリーで話している。

一足先に食べ終えたお父さんは

「後で書齋へおいで、メリー。」

とだけ残して部屋を出て行った。

〈何だろうね〉

”朝のことかな?”

〈なら急いだ方がいいかな〉

”でもいそぐとお母さんに『はしたない!』つておこられちゃうよ”

〈本当にいいお母さんだね〉

”わたしのじまんよ”

食べ終えた俺たちは書齋にきた。

コンコン

「しつれいします。」

少しして、

「入りなさい」

というかお父さんの声が聞こえた。

そつとドアを開けると、そこには金髪のイケオジが立ってた。

お父さんみたいな寡黙なイケオジとは違うタイプだ。

「おはつおめにかかります。メルセデスともうします。」

丁寧に挨拶をする。

「これはこれはご丁寧に。僕はガブリエル。ガブリエル・グランド。」

なんか…軽いというか、チャライというか…

「安心しなさい。これは私の古い友人だ。心配する事はない」

「はい…」

「僕のことそんなに信じられない!?!」

メリーの周りにいないタイプの人だなあ。

やいのやいの言ってるガブリエルさんと適当にあしらってるお父さんを見ながら、な
んで呼ばれたんだろ…なんてメリーと話してた。

そんなくらい放置されてるんだもん…

「…ということ、メリーにはこいつが教える。…手は出すなよ？」

「ちよつとばかしその殺意を抑えてほしいなーなんて」

お父さんの話を要約するところだ。

- ・ガブリエルは現在、フランス陸軍の中将をしている。
- ・フェンシング程度なら私も出来るが、こいつの方が強い。
- ・私の知り合いのため、手を出す心配が無い。

という事で、ガブリエルさ…先生に教えてもらおう事になった。

メリーも平気そうだ

「よろしくおねがいしますー！」

元気に頭を下げたメリーは、急いで部屋の外に出る。

「ではさっそくきがえてまいります！」

ドアの閉まる直前に、

「僕はロビーにいるからね」

という声が聞こえた。

部屋に戻り、動きやすいパンツスタイルに着替える。

”たいへんだわメル！”

〈なんだい？〉

”先生はどこにいるのかしら！”

〈∴ロビーにいるそうだよ〉

”ありがとう！”

部屋を飛び出して、ロビーに向かう。

ロビーでは、準備が終わったガブリエル先生がいる。

「来たね、メリーちゃん」

「よろしくおねがいます、先生」

キョトンとした後になっこりと笑う。

「ああ。ではさっそく、剣を選んでおくれ。」

そこに並ぶのは、フルーレ、エペ、サーブルの三種の剣。

メリーは戸惑いなくサーブルを掴んだ。

サーブルは一番小さく、軽いためメリーには丁度かもしれない。

「よし、じゃあ軽く打ち合ってみようか！」

なんとなくは思ってたけどこいつ…脳筋だ

メリーをフルボッコにしたのは許さん

お願い（脅迫）した日

先生が出来てからかれこれ1年経った。

メリーも6歳になったからそろそろ家の外に出たいらしい。

これまでにはひたすらに筋トレして、いつもと変わらず年中無休で胡散臭い家庭教師（ナイさんと言うらしい）と勉強していた。1ヶ月くらいはずつとふらふらしてたメリーも、今では慣れてびんびんしている。

そんな事よりも大切な事がある。メリーが外に興味を持ったのだ。

元々外に出たいとは言っていたが、主な原因はガブリエル先生だ。先生は、戦争から帰るたびに今回はこんな戦いだった、そしてこんな綺麗な所があったんだと教えてくれる。毎回、きつと君に似合うよとか、君が気に入ると思つて…とか言つてお土産をくれる事も あるせいかもしれない。

とりあえず、メリーが外に出たいなら俺は即座に行動に移す。

ほらそこ、親バカとか兄バカというんじやありません！やめてくれその言葉ロリコンは俺によ

く効く…

まあ、行動しますけど？

と、言うことでやってきました！書斎です！

〈それでは突撃！隣のお父様！〉

”わーわーどんどんばふばふ”

〈目指せ外出！〉

”私をそとにだせー”

「お父様、失礼します。」

「入りなさい」

そつと扉を開けるとそこには…

死人のような顔をしたお父様が…！

「お、お父様!? 顔色が悪いです！お休み下さい！」

ただでさえ悪い目つきがさらに悪化して、目線で人が殺せそうな位だ。やべえ。

「用件を早く言いなさい」

「そんなことどうでも良いです！休まないとお父様が、倒れてしまいますよ！」

「まだ仕事がある。」

いやいやいや、まだ仕事があるって…休んでよお！目つき怖いし、元々白い肌がもう

真つ白すぎて気持ち悪いよお！

〈やべえ…何がとは言わないけどやべえ〉

「先生のこと呼んだらおとなしくなるかな?」

〈お母さんの方が良いんじゃないの?〉

「お母さんは『さいしゅうしゅだん』だよ。」

〈じゃあお母さんをダシに脅したら良いんじゃない?〉

「きくかな?」

「お母様に言いつけますよ!」

「づっ…しかし…」

多少狼狽えただけだった。ほう?ならばこうじゃ!

ぱたぱたと扉の方へ移動してみる。

「…待ってくれ。彼女を呼ぶのはやめて欲しい。」

ねえ待って??なんで更に顔色悪くなってんの??これ以上ないくらい真っ白だったのに更に白く…というかももう今にも灰になって崩れていきそうな状態だよ?

〈お母様効果やば…〉

「前に一回お父さんがむりしてた時に、お母さんがへやに行ってお父さんのことなぐりとばしてたから。」

〈お母様つおい…〉

「でしたら是非休んで下さい」

「……………ならばメリーの用件を済ませてから休もう」

「ただだけ悩んでんだよ…社畜かよ…メリーから聞いたぞ？お父様社長なんだろ？
トップが社畜じゃダメだろ…」

「では手短に。外へ行きたいです。」

「却下だ」

「即答だな！なんだおめえ親バカか！過保護か！嫌われんぞ！」

「何故ですか？」

「外に出たら危ない事が多いだろう？メリーに何かあつたら俺も彼女も心配する。だからダメだ。」

「何歳になつたら外に出ても良いですか？」

「…2…0……………だ…」

「家出しますよ？意地でも逃げ出して国外に出ますからね？」

「……………」

「黙りこくってしまった。なんか寝れてるようにも見え始めた。というかこの顔…見覚えがあるぞ？確か…そう、前世で父さんが溺愛してた妹に「お父さん臭い！」って言われてたときと同じ…絶望してる顔だ。」

〈黙っちゃったね〉

「どうしよう…早くお父さんに休んでもらいたいの…」

こちらは無表情を貫いたまま2人で脳味噌をフル回転させる。

その時

「話はぜんぶ聞いてたよー!」

バーンと扉をすごい勢いで押し開いてきたのはガブリエル先生だ。

「帰れ」

「こんにちはガブリエル先生」

「こんにちはメリーちゃん。良かったーメリーちゃんがこいつに似なくて」

こんな可愛い子に帰れなんて言われたら僕泣いちゃう!

なんて言いながらもお父さんにハグしに行く先生はホモですか? 幼馴染だから? さ

いですか。

「とりあえず! 僕からの提案なんだけどね、僕のところ他に弟子がいっぱい居るんだけどね? 大体メリーちゃんよりもちよつと上の実力の子が教え子の中で一番強い子なんだけど、その子と戦ってみて勝てれば外出。負ければ20までお預け! どう?」

〈どうする?〉

「ちよつとでもチャンスがあるならやる!」

〈了解〉

「…やります！」

「メリーちゃんがこう言ってるんだよ？まだ確定はしてないけど、可愛い娘のお願いも
えてあげれば？」

「…」

さつきから一言も喋らないなあ

そんな時、お父さんが目を離れた隙に先生がスススと近づいてきて

「ゴニヨゴニヨゴニヨお願いきいてくれないや嫌いだなるよゴニヨゴニヨゴニヨギアスロールって言ってみて」

おまつそれは！娘が大好きな父親にとって契約書類となり得る言葉だぞ!?!しかし…
使えないのか…?」

ええい！背に腹は変えられん！

「…お父様、お願いを叶えくれないのなら私はあなたの事を…大、大、大つ嫌いになりま
すよ」

がたりと椅子を蹴飛ばしてお父さんはこちらに近づいてくる。

真つ正面に立つと逆光で顔が見えなくなる。

こちらの身長は他の子よりも大きいであろう130cmくらい。6歳にしては大き
い方だ。対するお父さんは190cmくらい。でかい。

「…わかった。許可しよう…」

▼お父さんは 何かが 欲しそうに こちらを見ている

〈どうする?〉

「ハグしたら良いんじゃないかな?」

〈本当に?〉

” たぶん ”

よおしメリー、信じるよ?

たぶんって言ったからね!なんて頭に響く声は無視してお父さんに抱きつく。ちよ
うどお腹辺りに頭があるのでグリグリと擦り付ける。

「お父様、大好きです!」

普段全く以って仕事をしない表情筋を引き上げて笑顔を作る。勿論心の底から嬉し
いと思っているのはメリーも俺も同じ事。

つまりは美少女の心の底からの嬉しい気持ちを表した輝く笑顔だ。

滅多に笑わないメリーの笑顔に驚いたようでお父さんは目を見開く。瞳に映るメ
リーはそれはそれは綺麗な笑顔をしている。ちよつと待て先生、なんで顔赤くしてん
の?ロリコン注意報?そつちに意識が逸れた途端に視界が急に高くなる。

「わっ!」

お父さんに抱きかかえられているようだ。

お腹のところにお父さんの頭があつて、さつきと逆転したなあーなんて思いながらふわふわする癖つ毛をそつと撫でる。

少しだけ撫でてからふと、視線をあげると先生の真後ろにお母さんがいる。それよりもお母さ、お母様の背後にお見えになつていらつしやるドラゴンはお母様のペットにあらせられますのでしようか？

”お母さんがおこつてる…”

〈どう対処すれば良いのかな！〉

”前にね、ナイ先生が教えてくれたんだけどね、東の方の国には「さわらぬかみにたたりなし」って言葉があるんだって”

〈どうしようもないのかーそうなのかー〉

先生が俺の顔色がおかしい事に気がついたみたいで背後を振り返ろうとした途端、崩れ落ちた。

あ…ありのまま

今 起こつた事を話すぜ！

『俺がみている中でお母様の方に先生が振り返つた瞬間崩れ落ちた』

な：何を言っているのかわからねーと思うが

おれも何を受けたのかわからなかった：

頭がどうにかなりそうだった：

催眠術とか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ：

いやな、たぶんお母様が先生の顎に掌底を叩き込んだだけなんだろうけどね？

見えたのかって？そんな訳ないじゃん。ただ先生の左の頬の下の方が赤くなってるからだよ。

ドサリと音がしたせいでお父さんが気づいてしまった様だ。誰がいるのか気づいてしまったお父さんはS A N チェック。

抱きついて回復した顔色がどんどん白くなってるから失敗かな。

「あなた？」

「シルヴィ、待ってくれ！話せば分かる！」

お父さんは首を横に振りながらジリジリと下がっていく。俺のことをしつかりと抱きしめながら。

お父さん、巻き込み、いくない。

「メリー、おいで？」

おかしいな…疑問符が付いているような声色なのに命令されてる…そして勿論逆ら
いませんとも。

先生との修行でつけた瞬発力と筋力をフル活用しながらスルリと抜け出す。

あばよとつつあん！生きたまま会えると良いなあ！

タタタタとお母様の隣を走り抜け、後ろに倒れてる先生の近くに行く。

とりあえず小声で話しかけてみる。

「先生？先生！」

返事がない ただの屍のようだ▼

惜しい先生をなくした。

とりあえず白目むいたイケメンとか目に悪いのでそつと目を閉じさせる。

見ろよ、こいつ…寝てるみたいだろ？気絶させられたんだぜ？

とりあえず神に祈つとこ。

〈アーメン〉

“アーメン”

戦つた日

さあ、今日がああの約束の日！メリーは勝てるのでしようか！？

戦うのはメリーだけだと約束してるので、手出しはしません。足も頭も出さないよ？
知恵は貸すかもしれないけど。

「お嬢様、頑張ってくださいね。」

「お嬢、金持ちのボンボンなんてボコボコにしてやんなよー！」

「お嬢様、どうかお怪我をなさらないよう…」

「メリー様ー！結k「ゴミは片付けましょうか」

ロビーに向かうまでに出会った使用人さん達が応援してくれる。

そう、あの事件の後復活した先生が大声で知らせまくったからみんな知っているのである。

「はい、がんばってくださいませ。」

メリーが少し緊張した面持ちでキュツと手を胸の前で握る

「がわい い い」！！？！！？！！？

何が可愛いっていつもの無表情が！なんと！眉がハの字になってるし、口が！いつも

真一文字の口が！こう、への字になってる！しかもそれだけじゃなくて、応援されて嬉しかったからほんのり顔がピンクに！

え？このテンションやめろって？わかりますん

さてさて！

着きました決戦の地！ロビーへ！

まだ先生達は来てないみたい

〈大丈夫かい？メリー〉

”……………”

メリーは反応すらせずにひたすら素振りをしている。

「……り……メリー……メリー！」

振り向き様に声をかけた《モノ》に足払いをかけ、当て身を仕掛ける。

《モノ》は体格差があつたが、不意打ちに反応出来ずに倒れ込む。そしてすぐに上へのし掛かり、急所である首にサーブルを突き付ける。

「…メリーちゃ…メリーさん…急に声をかけたのは謝るから退いて？」

君の背後の人達の殺気がやばい…あとメリーさんからの殺気もやばい。」

モノ、もといガブリエル先生がメリーを抱きしめる。

おい、良いのか中将。お前の後ろの子がお前のこと軽蔑するような目線になってるぞ
お巡りさん！こつちでーす！

それよりも前にお父さんがナイフ（ガチ）を突き付けてたけども。

「ガブリエル…？」

「ごめんごめん…ごめんなさい、謝るからそれどかして欲しいなあ…」

なんか2人が仲良く喧嘩してるけどまあいいよね。お母様出てないし。

〈あの子に話しかけてみたら？〉

” そうする ”

「こんにちは」

「っ、ああ、こんにちはレディ。」

「おっ？おっ？初心？初心なの？」

「はじめまして。私はメルセデスっていうの。あなたは？」

「これは失礼しました。小さなレディ。私はトマ。トマⅡロベール・ブジョーです」

トマ、トマ、よし覚えた。今日からお前トマトな！

「そう。トマ、あなたが私の相手なの？」

「わかりません。ただ私はとても強い方と手合わせしてもらおうと言われました。」

トマトに何にも教えて無いのか…

あとトマト手前こんな小さな子が相手なはず無い…とかいや、しかし…先生を一瞬で組み伏せていた…とかブツブツうるさいな！根暗か！

「私がおしえてもらったのは相手が私よりも10歳くらい年上の男の人っていうことだけよ。」

「…そうですか。」

「リアムー！若者2人がキャツキャウフフしてるー！」

「あ？」

それなりに和やかに話をしていたのに何処ぞのロリコンホモ野郎のせいではち壊された：よろしいならば戦争だ！クリーク！クリーク！クリーク！クリーク！

〈メリー、〉

” うん ”

「すうっお父様！この前ガブリエル先生が私にむぐっ！」

「メリーちゃん本当にやめてね〜？僕がリアムとシルヴィに殺されちゃうから」
「だつたらあんなことしなければ良かったのにヴァカめ！」

そして背後には2つの影が：

フルボッコだドン！

とりあえず色々落ち着いたところで試合の説明が始まった。

「一つ、骨を折つたりなどの大怪我をさせないこと、

二つ、相手を気絶又は相手に参つたと言わせること、

三つ、手を抜かないこと。

この三つを守ってくれ。一つでも破ればそこで負けだ。」

いいな?と確認してくる先生にメリーは大きく頷く。

「トマは約束どおりにメリーちゃんに勝てば軍の方に口利きしてやる。メリーちゃんはトマに勝てば外出許可がおりる。」

あともう一つ、これは試合だが別に殴る、蹴るなどの事を禁止しているわけでは無い。」

「なっ!先生!フェンシングの試合では無いのですか!?!」

先生は大きくため息をつく。

「トマ、お前は軍人になりたいのだろうか?ならばよく考えてみろ。自分を殺しに来ている敵軍がフェンシングのルールに従ってくれるとでも?そんな甘っちょろい考えしてゐるなら軍に行くなんて嘘でも言ってみてんじゃねえ!」

おお?珍しく先生がイケメンしてる…

「…すみませんでした。」

「それに!」

「?」

「メリーちゃんとお前じゃただの試合にしたらメリーちゃんの圧勝に終わるからね!」

イケメンなんて居なかった。いいね?

「さあ！位置について！」

10 mくらい離れて向かい合うように立つ。

「構え！」

トマは左腕をあげて半身になり、胸の高さ辺りでエペを水平に構える。

エペは一番大きくて重い。最高で750 gほどの重さだ。構えも普通のフェンシングの構えをしている。

それに対してメリーは半身にはなるがフェンシングの構えではなく正眼の構え…剣道と同じような構えをしている。左手は腰に添えて、右手で相手の目に切っ先を向けている。

「始め！」

その掛け声で動き出したのは向こうの方だった。

エペのため、なぎ払いには向かず、突くことしか出来ない。しかし足に向かってなぎ払いをしてきたのはいい判断だと思う。

けど、メリーがそんな簡単に倒れるはずなんてない。

エペを持つている側を走り抜けて後ろ側へ回る。

そしてメリーは体制を崩すのがいいと踏んだのか膝裏に蹴りを入れる。

ぐらりと体が傾くけれど、すぐさま左手をついて蹴りに移行する。そこは流石軍人志望だ。

メリーはサーブルを蹴られるが、ガードが付いているから弾き飛ばされる事は無かった。

” どうしたらいい?”

〈難しいね〉

楽なのは相手の顎に衝撃を与える事なんだけれど…

相手は恐らく170cm。こちらは130cm。普通に届かないのだ。

下手に組み敷いても体重が軽すぎてすぐに脱出されるだろう。

〈そこそバリツとか?〉

” どうやるの?”

とりあえず、腕挫十字固でも決めればいいと思う。いくら小柄でも脇の下と首に足が掛からない訳じゃないし。

〈えつとね〉

ひと通り説明するとわかった、やってみる。とだけ言つてそのまま戦い続けてる。か

れこれ20分くらいたった。打ち合いと蹴り合いしかしていない。

メリーは瞬発力があるからできると思ってたんだけど…

トマがまた突きを、今度は顔を狙って来た。

エペは約1mほどの長さがある。顔を素早くずらし、サーブルを投げ捨てる。

そして伸ばしきった腕を掴んでそのまま飛びつく。

脇の下と首の下に足をかけ、手首を抱え込んで捻りあげる。

メリーはそのままかけた足で首を締め出した。

「はやく負けをみとめて。」

トマは苦しそうにもがくが、力が入らないらしい。

「ま…いつ…た」

「そこまで！」

メリーはちゃんと勝てたらしい。

でもトマには悪いことをしたと思う。

ぐったりしてるトマから離れ、息がしやすくなる体制に変えてあげる。

そして放り投げたサーブルを拾って、蹴られたりしてたから曲がってないかをチェックする。

クする。

大丈夫そうだ。

「ありがとうございます。」

私のめのまえで頭を下けているのはさつき試合で私が…えつと…ウデヒシギジュウジカタメ?という技をかけたトマだ。

メルがボソツとトマトとつぶやいたのはゆるさない。ふき出すかと思った。

「こちらこそ、ありがとうございます。もう苦しくない?」

「ええ、大丈夫です。私は頑丈ですから。」

トマはもう帰ってしまうので少しさみしく感じる。

「またこんど、手合わせしましょう?」

「レデイのお誘いですから喜んで。」

にっこりと笑ったトマはとつてもカッコよく見えた。

そして私の手をとって、手のこうにキスをしてきた。

びつくりしたけど、わるい気はしなかったからお父さんにするようにはほかにキスをした。

「やくそく。やぶつたらすすごくおこるよ、私。」

歩き出したトマの背中に言う。

「それは怖いのでしつかりと守らせて貰いますね。」

首だけ振り返って言う。

「またね！」

「ええ、また。」

Mon premier ami

「先生はいつお父様におあいになったのですか？」

親友の娘兼可愛い教え子のメリーちゃんが言う。

メリーちゃんめちやくちや可愛い。どんぐらい可愛いかというところノーマルな人がイケナイ扉を開けるくらい。僕は半分くらい開けた。

「おっ？メリーちゃんてば僕の事知りたくなっちゃったのお？えっち♡」

「聞きたいと思いましたがいまので9割くらい聞きたくなくなりました」

んく毒舌う！なんていいながらメリーちゃんを抱き上げる。こうしてみると本当にあの2人にそっくりだなあ：

大きな青い目とサラサラとした髪質はシルヴィ譲り。光が当たるとキラキラと様々な色に輝く髪と仏頂面はリアム譲りだ。

メリーちゃんを抱っこして壁に寄りかかるように座る。必然的にメリーちゃんが三角座りの体制になる、けど大丈夫！さつきまで鍛錬してたからパンツスタイルだよ！汗臭いかもしれないけどごめんね！僕ちゃんと汗拭いて香水かけといたよ！

「んーとねーまず、僕とリアムはく…僕がこつちに來てからすぐだったから6歳くらい
の時から付き合いかな」

「つまりかれこれにじゅむぐ」

「歳が分かっちゃうことやめよ？僕もいい加減身を固めなきゃいけないことを自覚し
ちやうから。」

ベベべつにモテないとちやうわ！むしろモテモテだよ！ただ…彼女よりもリアムと
かメリーちゃんを優先して振られるだけなんでもん…

「ぶはっ！じゃあどうでもいいので早くなれそめを教えてください。」

「酷いこと言うなあ…まあいいや」

「ほわんほわんガブガブく」

「噛まれそう…」

「Sale fille de pute!」
薄汚い娘の息子

「Je voudrais pouvoir mourir!」
死にたい

そう言つて周りの人子供達は石を投げてくる。

毎日毎日飽きもせずよくやるなあつて思つてたよ。

僕はハーフだった。

フランスとイタリあの。

当時はまだアメリカやインドとの戦争で負けたばかりだったフランス人はピリピリしていたんだ。

そこにハーフ外国人の僕がいればどうなるかは明白だろう。

当然当たり散らされる。家に帰るたびに悲しそうな顔をする母を見るのが嫌なので石を投げるのはやめて欲しかった。

「死んじまえ!このクソ野郎!」

「クソはお前らだろ」

そんな時だった。リアムが現れたのは。

彼は後ろから背中を蹴飛ばした。

逆光であまり顔は見えなかったけど、ふわふわした綺麗な髪だなあ……天使様かなあなんて思ってた。

「うわあ！やべえ！仮面野郎がきた！逃げろ！ボコボコにされるぞ！」

石を投げてたやつはワアワア騒いで逃げていった。

「大丈夫か？」

「うん。」

間近で見るととても綺麗な顔立ちをしている。

とっても綺麗で思わず

「天使様……」

って言っちゃった。

「は？」

何言ってるんだこいつって顔されたけどね！

「俺はリアム。お前は？」

「へ？」

「名前だよ名前！」

「あつと……えつと……ガブリエル……です、」

同じ年くらいの子供に名前を聞かれるなんて初めての事だったから何事かと思った。

「いつもああなのか？」

「うん。」

「ふーん、あとで言い聞かせておこう。」

「え？何？」

「なんでもない。お前家どこらへんだ？」

「ここから10分くらい歩いたところ。」

「じゃあ一緒に帰るか。」

僕はもうリアムがなんて言ったか分かんなかったね。

「へ？」

「明日からお前と一緒に居てやる。」

「は？」

「帰るぞ」

僕の手を掴んでリアムはズンズン進んでくからぼかんとしてたよ。

「リアム……くん。えつと……僕と友達になってくれる……？」

「リアムでいい。よろしく頼む。」

その時はとっても綺麗な夕日だったんだ。僕らが真っ赤になるくらいだね。

その日以降から毎日リアムが僕の家に来て一緒に遊んだ。

リアムの家はとつても裕福で、リアムはとつても頭が良くて、リアムの両親はとつても優しかった。

貴族の子供なのに平民の友達を作っても、いい友達になつてくれとかあの子をよろしくねとか。リアムの家に連れてかれた時は場違いすぎて気絶するかと思つたよ。

10を超えてからはリアムの家に行つてリアムに勉強を教えてもらつたり、フェンシングを教えてもらつた。

外国人の父さんをリアムのとこの会社で雇つてくれた時はほんとに助かつたよ。

あとは…そうだな…

ああ、そうだ15歳くらいの時かな。

僕はずつとリアムが大好きだつたんだ。

だから意外と真面目に告白した事があるんだよ。

男同士はおかしいって？うん、まあそうだけどね。あれだよ若気の至り。

9本のバラの花束を持って、うちに来たリアムに、

「大好きだよ、リアム」

つて言つて渡したんだよ。

そしたらさき、リアムつてはどう返したと思う？

え？キモいつて言いそう？言われてたら僕大泣きだわ。

正解はね、

僕の贈つた花束から4本のバラをとつて、

「愛の告白はごめんだな」

つて残りの5本のバラを渡して来たんだよ。

かつこ良すぎない？

ねえ、俺の親友かつこ良すぎじゃない!?

…はい…ごめんなさい。静かになります…だからシルヴィにバラさないで…

あと? うーんあとは…そうだなあ…

僕が軍人になつた理由とか?

まあ、アレなんだけどね。

ただリアムの事を守りたかつたのがあるし、リアムがいるこの国を守りたかつたんだよ。

だって僕の愛してる大事な親友がいるんだもん。あとは母さんと父さんがいるからかな。

親は二の次なのかって？うん。リアムの方が大事。

リアム>>>【超えられない壁】>>両親>>>>>>その他
だったからね。

石投げてたやつ？さあ？軍人になってたら死んでるんじゃない？

笑顔が黒い？

何を言ってるのさ。いつもと変わらないピユアっピユアなガブリエルお兄さんだろ

う？

お父様と同じ年だろって…そうだけど…父親と同じ年はお兄さんじゃない？

ごもつともです。

というかまあ軍人になったメインの理由はそれじゃないんだよね。

何かって？

立場が上の方になると社交パーティーに参加出来るんだよ。

結局はリアムに会うためなんだよね！

やー大変だった。

早く昇格する為にひたすら敵の大將ばかり首獲ってたの。

もー血塗れだし鬼だ悪魔だ言われるし。

良いことはリアムが昇進祝いに一緒に酒飲んでくれる事だけだよ。

他あ？うーんうーん？何があるかな…

逆にメリーちゃんは何が聞きたい？

…え？喧嘩？喧嘩かあ…うん、したよ。

えつとね、いつ頃だっけ…？まだ10代だった時なんだけど…

僕が軍人になって間もなく、フランス革命戦争が起きた。

僕はもちろん軍人だから戦ったんだけど、腹に鉛玉打ち込まれちゃってね。

そしたらさ、リアムってば

「お前が死にかけるなら軍から抜ける。」

なんて言うんだよ？どれだけ温厚な僕だっつてプツツンしちゃうでしょ？

「なんで親友のはずのお前が俺のことを否定するんだよ！」

ってキレて怒鳴っちゃって…

「否定なんてしてない！」

「してるだろ！だからお前は…！」

「うるさい黙れ！お前なんか親友じゃない！大嫌いだ！」

「ああそうかよ！僕だっつておまえみたいのと別れられて清々するわ！」

最初は僕の事心配してくれてただけどき、撃たれて、すぐに戦えなくなっちゃったからさ……ちよつと気が立ってただよ……

でもでも、リアムが言葉足らずなものいけないよね！ね！

それで僕とリアムとで殴り合いの大げんか。転がりながらもひたすら殴って。

もうボロボロで立ち上がれなくなつてから、2人とも大泣きしながら、

「ごめん……ごめんね……本当は僕……リアムの事大好きだから」 あゝ！嫌いにならないでえ”!!”」

「すまん……言葉が足りてなかった……すまない。俺とお前は親友だから……。大切なんだ……傷付いて欲しくない……」

そんなこんなで仲直り

《両思いのバカップルだ》

ばっ!?

いやいやいや、嬉しいけどね!?

流石にそこまでじゃ……ない……よね?

無言で首を横に振らないでよ!

ええ?だからかな……なんかリアムとシルヴィの結婚が決まつてから、

「てつきりガブリエルとかと思つてた」

とか周りから言われてたの。

うん？シルヴィイとのこと？

……………うん、そう、だね、

…シルヴィイと出会ったのは22、3位の時なんだけど、急にリアムが
「彼女が出来た。」

とだけ手紙を送ってきたんだよ。

それで、居てもたつてもいられずに素早く休みを入れて、リアムに会いに行く旨を伝えて、凸しに行ったんだ。

第一印象は清楚な深窓のお嬢様って感じだった。

「僕は認めない！そんなんじゃないやリアムも子供も守れないだろ！」

今思えば訳わかんないキレ方だね。なんで母親が旦那もまもるんだよ。

「馬鹿かお前は」

「馬鹿で良いよ！せめて俺のことを倒せるくらいじゃないとダメ！」

そんな女むといないだろって感じだったリアムが、言葉に出す前に、僕の鳩尾に綺麗な体重ののつた重いストレートが突き刺さった。

「うぐっ！」

そのまま倒れた僕にシルヴィイは

「これで認めてもらえますね？」

つてにつこりしてた。

怖かった。

そろそろこれくらいにしておこうか。

もうすぐお茶の時間だろう？

お話はこれでおしまい。

また今度ね。

敬老の日

あつるつこゝあつるつこゝ♪
わたつしはげんき♪

オツス俺メル!

幼女（inお兄さん）だ!

現在男装して俺が散歩してるYO!

…俺誰に挨拶してんだろ…?

まあ良いや

どうせどつかに胡散臭い観測者とか居るんだろうし

ちなみに俺たちが住んでる所はフランスのちっちゃい村だったわ。

まあ周りの家の5〜6倍くらいの大きさの屋敷にその屋敷がもう2、3個立ちそうなくらい広い庭がある。

村の3割くらいうちの敷地なんだけど…? うん? 敷地自体は村全部? マジかあ…

小さな子供が一人で歩いてきた。綺麗な顔立ちをして、綺麗な服を着た少年だった。ああそれは美しい草原だろうか。それとも艶やかな薔薇が咲き誇る庭園だろうか。白い壁の清廉な街並みだろうか。

そこを歩くならば天使が舞い降りた様な神々しさを感じるだろう。しかしながら彼が歩いて居るのは薄暗く黴臭さが鼻を突く汚らしい裏路地だった。

微笑みをたたえた口元とは対照的に目元は温度を感じられない。それは精巧な人形だと言われても納得するだろう。しかし彼をよく知る者は口を揃えてこう言うだろう。「慈愛を持った優しい瞳だ」と。

そこには彼のことをほとんど知らないボロ布をまとった人々がいるだけだった。下卑た笑いを浮かべた者たちはゆっくりとその少年に近づいてゆく。

えまーじえんしー！えまーじえんしー！

背後から変態3人が近づいています！武力行使して良いですか!?!良いですよね！

「坊や？坊やは一人かい？ならおじさんたちと遊ぼうか」

振り返りざまに golden な baller に蹴りを叩き込もうと心に決めた時、優しそ

うな声が聞こえた。

「あらあら、こんなところに居たのね。お婆ちゃんもう待ちくたびれちゃったわ」
声のした方に視線を向けると其処には優しそうな顔をした老婆がいた。

ふむ：これには乗った方がラクだな。

「すみませんお祖母様！早くお祖母様に会いたくて近道しようとしていたんです！」
笑顔のまま老婆のいる変態とは反対方向へ走り出そうとした

そう、過去形だ。したはした。けど変態が俺の腕をきったねえ手で掴みやがった様
なので進めなかった。

「よお、オバアチャン？坊やは俺らと遊んでくれるみたいなんでね
帰ってくれねえか？」

ニヤニヤしてる変態：こいつ超くつせえ！うん●と吐瀉物とへドロ混ぜたものを腐
らせた臭いがする！

我慢がならないのでゴコる！

体を捻りながら飛び、男のこめかみに膝を叩き込む。掴んでいた腕に子供1人分の体
重がかかってバランスを崩したため、簡単に決まって男は崩れ落ちた。

さあ残りは2人！と思って振り返ると先ほどの老婆によって鎮圧されていた。いく

ら離れていたのが10m程だったとはいえ、膝を叩き込む数秒で倒せるものなのか……？
それは置いて、とりあえずお礼を言わねば！

「助けていただき有難う御座いました。マダム」

「おや、でも助けは必要なさそうだったが？」

さつきと口調が違う……

「それでも助けていただいたことは事実ですから。」

ニコニコと笑うマダムの手にはレイピアが握られている。

この人常にこれ凶器持ってるのか……？

「そういえば、貴女のお名前は……？」

「ああ、すまないな。私の名は……そうだな……リア・ド・ボーモンだ。」

リア……どこかで……？いや、ボーモンの方を考えると……ボーモン……

「君の名前は？私だけが名乗るのは公平じゃない」

「……ああ、すみませんマダム・ボーモン。俺の名前はメルです。訳あって姓は名乗れませ
ん。」

ボーモン？ああ！思い出した！リア・ド・ボーモン！ロシアへ行った女スパイ！

「貴女も本名ではないのでこれなら公平でしょう？」

ねえ？
Chevalier
騎士 士殿？と続けられ、

「なかなか賢い子の様だな。将来が楽しみだ」

老婆と少年は含みのある笑みを浮かべて見つめ合う。

「俺はもう行きますね。時間は有限ですから。」

「ああ。ただでさえ君は器量が良いんだからよく気をつけて」

そう言つて2人は別れた。

「…じさんたちと遊ぼうか」

路地裏から下卑た笑いが聞こえる。それはこのご時世には似つかわしくない…なんてことはない。ごくありふれた光景だ。

路地裏は家のない人々が転がり、飢え死んだ人々が倒れている。そしてそこから見目の良い女子供を連れて行き、金持金持ちの富豪富豪に売る。

ただその時は気まぐれだった。

「あらあら、こんなところに居たのね。お婆ちゃんもう待ちくたびれちゃったわ」

いつもの私には似つかわしくないほどの“優しいお婆ちゃん”を演じる。生きていたのならあの人はニコニコしながら「貴女はそちらの方がよく似合うわ!」と言ってくれただろうか

少年はこちらに気づくとすぐに

「すみませんお祖母様!早くお祖母様に会いたくて近道しようとしていたんです!」

と、こちらに来ようとしたが男に腕を掴まれた様だった

「よお、オバアチャン?坊やは俺らと遊んでくれるみたいなんでね

帰ってくれねえか?」

約10mほどしか離れていないとはいえ、強烈な悪臭が鼻を突く。

我慢がならなかったのか、少年は男に攻撃を仕掛けた。

体を捻りながら飛び、男のこめかみに膝を叩き込む。掴んでいた腕に子供1人分の体重がかかってバランスを崩したため、簡単に決まって男は崩れ落ちた。

なかなか良い体捌きだ。男2人を気絶させつつ観察する。

的確に脳を揺らして無力化したのは高得点だな。

振り返った少年が驚いた顔をしているのはなかなかに見ものだった。

助けた少年はとても礼儀正しかった。

「助けていただき有難う御座いました。マダム」

「おや、でも助けは必要なさそうだったか？」

マダム…未だに慣れないその呼び方にむず痒くなる。

「それでも助けていただいたことは事実ですから。」

ふんわりと微笑む少年はとても男を昏倒させられそうにはなかった。

「そういえば、貴女のお名前は…？」

名前は…あちらの名では少し有名かもしれないからな…

「ああ、すまないな。私の名は…そうだな…リア・ド・ボーモンだ。」

こちらは知る人ぞ知る名だろう。ましてこんな小さな子供が知っているはずがない。

しかし、心当たりがあるのか少年は考え始めた。

「君の名前は？私だけが名乗るのは公平じゃない」

意地悪をするつもりで声をかけた。

「…ああ、すみませんマダム・ボーモン。俺の名前はメルです。訳あつて姓は名乗れませ

ん。」

こんな小さな子供が？ 訳あって名乗れないなど…

「貴女も本名ではないのでこれなら公平でしよう？」

ねえ？ 騎士殿？

先ほどの考えが吹き飛ばされる一言だった。

よくぞ気がついた！ 技術があり、知識があり、実力がある。とても優秀で、若ければ困っていたかもしれない

「なかなか賢い子の様だな。将来が楽しみだ」

不思議な色をした金髪に深い海の様な瞳。強い光を灯した瞳は「してやったり」と悪戯っぽく細められていた。

先程はマダムとの戯れがあつたが、今日の目的は違う。

今日の目的は友達を作ること。

しかし、男装するため必然的に友達を作るのは俺になる訳だ。

うん？どうして男装するかって？君イ！ちよつと一話を見直してきなさい
それでもわからないニブチンはちよつと変態に襲われればいいと思う。

そう！フェルナンと言う名の障害変態が居るんだよ！

メリーが歩いていたら近づいて来るだろう？近くだけならまだしもお触りしてくるからギルティだ。

だから俺が男装してる状態で歩く必要がある。

みんなもよく考えてみる？好きな子とそっくりな男の子がいて、話しかけたら声が少し違うし話し方も一人称も違う。行動も違う。それを同一人物だと思うか？思わないだろ？

だから俺が男装してんの！

そんなことを誰かに熱弁してると、男の子が一人、歩いてきた。

黒い髪に黒い瞳。癖のある髪は肩にかかるくらいの長さで、小麦色に焼けた肌がとても健康的な少年だった。

「ねえ君、今暇かい？」

なんて声をかけたら良いか分からなかったからなんかナンパしてるみたい…

「コミュ障？うるせえお前らもだろ！」

「えつと…俺？」

ちよつとびつくりした顔で自分のことを指差して聞く。

「残念ながら君しかいないんだよね」

「あはは…うん、まあ暇だよ」

苦笑いしながらも暇だと答える少年

「じゃあ俺と遊ばない？」

そう聞くと眼をキラキラさせて、

「本当に？良いの？」

「勿論。だってこつちから声をかけたんだから」

嬉しそうな顔をする美少年はとても目の保養になるなあ…微笑ましいなあ…なんて

考えていたけれど、

「そうだ！名前！俺はエドモン！エドモン・ダンテスだよ！」

この一言で気がついた。もしかしてだけど、これって『モンテクリスト伯』の中なの…？

君は？と無邪気な笑顔聞かれたから

「メルっていうんだ、よろしくね」

とだけ返した記憶とまた遊ぼうと約束した記憶がぼんやりと残っている。

ねえ、メルセデスってあのメルセデス？

親友に大笑いされた日

エドモンとの出会いからかれこれ数年。現在10歳のメルセデスちゃんでございます。

この数年間ずっと悩み続けてきた。友達のエドモン・ダンテス、従兄はフェルナン、そして自分はメルセデス。

アレクサンドル・デュマ作の『モンテ・クリスト伯』の主人公はエドモン、ライバルにフェルナン、恋人のメルセデス。多くの事が合致している。

前世では読んだことはないけれど、アニメや漫画にもなっていたから大まかな事は知っている。

主人公エドモンは18、9歳で船の船長に抜擢され、可愛い恋人メルセデスと結婚が決まり、幸せの絶頂だった。けれどメルセデスに恋する恋人の従兄フェルナン、船長になる事を妬む会計士のダングラール、守銭奴な隣人カドルツスに嵌められて、結婚式の途中で逮捕され、牢獄シャトールイフに入れられる。そこで色々あつてフアリア神父に宝の隠し場所教えてもらつて脱獄し、色々やつて美人な元王女の奴隷のエデと出会つて色んな人味方に付けてモンテ・クリスト伯と名乗り復讐していく…つて話だった筈。

だけど、エドモンとメルセデスは貧乏って設定だったのに、俺らは金持ちの家に生まれた。エドモンの方は貧乏だったけど。

つまり、この世界はパラレルワールドな訳だと俺は思った。だから、とりあえず俺はメリーの幸せを願う事にする。原作だとメルセデスはフェルナンと結婚する事になっていたから、それだけは阻止する。というかまず第一にメリーからフェルナンに対する好感度がマイナスになってるからあり得ないはずだ。うん。

うだうだ考えててもどうしようもないからとりあえずエドモンの家に遊びにいこうと思う。イヤツフウー!!

「なあなあ、エドモンって好きな子いないの？」

「ブフツッ！」

「きつたね！林檎噴き出すなよ…」

「ゲホツ…お前のせいだろ！コフツ…」

おやつに新鮮な林檎を持参してエドモンとお喋りちゆう。

親父さんにも、体が弱いらしいのでいくつか持つてきた。お袋さんは生まれた時に亡くなつたらしい。医療が発達してないから意外とある事だった。

「で？いるの？好きな子」

今の俺の顔はめっちゃニヤニヤしてると思う。あ、最近気づいた事だけど、メリーは無表情なのに俺に変わると表情豊かになるみたい。

「…教えない」

「ホオー？いるんだあ？教えてー！」

座りながらエドモンに体当たりする。おしえろー！

教えて！嫌だ！教えて！やだ！教えて！この繰り返しでなかなか聞き出せない。

「じゃあ、女の子の好みは？」

「……」

おお？悩んだり、急に顔を赤らめたり…青春ですなあ！

エドモンの手で遊びながら待つ。おっ？俺より手がちっさい！

にぎにぎしたり、引つ張つたり、指を絡めたり…

「ねえ、メル…流石に気になるんだけど…」

「だって待つのが暇……」

俺は寂しいと死んじゃうんですぅ〜！ちなみに野生のウサギは1匹で暮らしてるのが殆どらしいよ

「じゃあメルのお好みの男の子は？」

「おうてメエいい加減俺のこと女扱いするとめるぞ？」

「君のめるは俺の意識が飛ぶからやめてほしいかな」

体はメリーだから女の子だけど、俺は男だし女の子が好きだ。

エドモンの認識としては女顔を気にする男の子になつてる。

「ほら拗ねるな拗ねるな。で？メルのお好みの女の子は？」

「うう……まあ芯の強い人かな……というか俺を女扱いするならせめて力比べに勝てるようになってからにしろよ」

「それは無理だな。俺は忘れないぞ？メルが木を叩き折ったの。」

「あれは悪い夢だったんだよ……」

オレ、ナニモ、シラナイ

「で！エドモンの好みは!？」

「ああ、俺は……」

サクツ……サクツ……

誰かが草を踏みしめてこちらに来る。こちとら美少年2人だから何回も人攫いに出会った事があるため、周りを警戒する。

大人にしては少し足音が軽そうだった。女性か少年と行ったところか。木の陰からのぞいてみると、見覚えのある亜麻色の髪が…

おおん…マジか…危惧していたことが起きてしまった…あつ…目が。

「つーメリー？メリー！愛しのメリー！やつと会えたね！僕のメリー！」

ズンズンと歩み寄って来る。そして、一緒にいたエドモンにも気がついた。

「メリー、誰だい？そいつは…君と僕の邪魔をする…」

そして俺を抱きしめる。

こいつは絶対殴りたい。

「大丈夫だよメリー、僕が守ってあげるよ可愛いメリー。僕の奥さん」

ブチッ

訂正しよう。こいつは半殺しにするべきだ。

あとエドモンテメエプルプルしてんの見えてんだよ？笑ってんの気づいてんぞ？

「おい、俺は男に抱きしめられる趣味はないぞ」

意外と低い声が出た。

「…メリー？」

「第一メリーって誰だよ！俺はメルだよ！」

そう言つて突き飛ばすフリして鳩尾を殴る。

「メリー、そんな言葉遣いしてたらおば様に叱られてしまうよ」

「第二に、テメエは誰だよ！知らねえ奴なのに急に馴れ馴れしくしやがつて！」

体制を整えようとするフェルナンを蹴飛ばす

「メリーはこんな事しない！メリーは僕のことを愛してるんだ！貴様は誰だ！メリーのふりをして！」

「してねえよ！さっきから俺はメリーじゃなくてメルだつて言つてんだろ！あとエドモンお前いい加減殴るぞ！笑い転げてんじやねえよ！」

フェルナンの手を踏みつける。

「ごめwwwんwwwだつて我慢できないwww」

イラついたようにフェルナンの顎を蹴つてフィニッシュ。

相手は気絶する。

それで、過呼吸起こしかけてるエドモンの襟を掴んで帰る。

これだから俺の親友は。

面白くて手放せないね！

初めまして（サヨウナラ）の日

息を切らして走る黒髪の少年のその顔は喜色に染まっている。

向かうのは森の中、大事な友の待つ月桂樹の下へ

木の下で野ウサギと戯れる少年は見目麗しく、まるで童話の様だった。

きらきらと輝く不思議な髪に海を閉じ込めた様な青い瞳、白磁の肌。触れれば壊れてしまいうような程に繊細だ。

「どうしたの?」

その微笑みは世間の闇なんて知らない天使の様で、とても美しい。黒髪の少年の頬が赤いのは急いで来たからだけではないだろう。

「聞いてくれ!俺、商船の乗組員になったんだ!モレルさんって人の船なんだけど、「エドモン」っ」

「おいでよ、取り敢えず座りな。」

クスクス笑いながら自分の隣を叩く。

ストーンと座ると、

「それで？カッコいいクルーのエドモンくんはどうしたんだい？」

ふふん！と自慢げに

「あのモンテゴ商会に商品を卸してる船に乗るんだ！」

モンテゴ商会とは、フランスでは知らない人はいないほどの大きな会社だ。主に香辛料と、布製品を扱っている。

「凄いじゃ無いか！」

でも…と少年、メルは続ける。

「そしたらエドモンとあんまり会えなくなっちゃうね。」

エドモンはハツとした顔になり、考え込んでしまった。

はい、どうもメルです。

うちは結構大きな会社だって知ってたけど、まさかうちの会社に就職（厳密には違うけど）するとは…

会うのは控えないとだな。

エドモンがパッと頭を上げると、

「そうだ！メルも来ればいいじゃ無いか！」

おおん…：そうきちやう？

「俺もそうしたいのは山々だけどね、母さんが許さないし…」

めつちやシヨボンとしてるな…

「じゃあ俺、お土産持って会いに行くから！」

「楽しみにしてるね」

取り敢えず話はそこで切り上げて、森の中で2人で遊ぶ。

早く俺は消えなくちや…

「じゃあね、メル！また明日！」

「またね、エドモン！」

手を振って帰路につく。

家に着いてからすぐに部屋に行く。

服を着替えて一枚の便箋を出す。

そこにさらりと一文を書く。

【親にバレたからもう会えない】

そして机の引き出しから小さな小さな箱を出す。

古びた木の箱を開ける。

綿をシルクのハンカチで包み、箱の中に入れる。

自分の首にかかったサファイアのネックレスを外し、最近教えてもらった呪いまじないとやらを施す。

彼に不幸が訪れませんかように。

壊れにくくなるという、ナイ先生直伝の呪いも施す。

「ハレビヨウ」

箱にネックレスと手紙（メモと言った方が正しいかもしれない）を入れて蓋を閉じる。

その後はいつも通りに食事をして、湯浴みを済ませ、おやすみのキスをする。

いつも通りに稽古して、勉強をする。

「お嬢様、昨夜魔術を使いましたね？何かありましたか？」

：：そうですか。まあ別に怒りませんよ、面白そうですし。」
何故かナイ先生にはバレたけど。

小箱をポケットにしまい込み、月桂樹の元へ走る。

昔は1時間くらいかけてたけれど、今じゃ30分もかけずに着く。
息切れ1つせずに着いたそこにはまだ彼は来ていない。

10分ほど待てばふんわりとした黒髪が木の間から見えてくる。

「お待たせ！さあ、いっぱい遊ぼう！」

15なのにまだ彼は純粹無垢で、とつても眩しい。

将来で復讐鬼なんて呼ばれるとは夢にも思っていないだろう。

日が傾き始めると

じゃあそろそろ帰ろうか、

という話になる。

「待って、エドモン。プレゼントがあるんだ。」

「プレゼント？なんだい？」

きよとんとする顔が面白くて、でも俺として会うのは今日が最後で、凄く複雑だった。

「はい、これあげる…大事にしてね」

「わあ！ありがとう！開けてもいい？」

「ここで開けられると凄く困る。どうしようか…」

「うーん…ダメ」

家で開けて！

と言えば素直なエドモンは、

「わかった、楽しみにしておくよ」

とニコリと笑って手を振る。

「また明日！」

「…うん、じゃあね！」

手を振って走り出す。

ああ、バレてないだろうか。

全速力で走っているから、だから心臓が締め付けられるように痛いのだ。
視界がぼやけるのも目が乾いたただけだ。

息が上手く出来ないのも。

全部全部、走っているせいだ。

「さよなら、大親友」

俺の親友はとても可愛い。

ただし男だ。

変質者に女の子と間違われて襲われる。

ただし男だ。

俺の初恋の人物である。

ただし男だ。

出会いは10年ほど前、貧乏な俺は少しでも父さんを助けようと思い港で手伝いをしていた。

獲った魚の仕分けなんかを手伝い、ほんのすこしの駄賃をもらっていた。

その帰りに、

「ねえ君、今暇かい?」

綺麗なソプラノボイスが聞こえた。

「えつと…俺?」

きつと間拔けな顔をしていたと思う。

「残念ながら君しかいないんだよね」

「あはは…うん、まあ暇だよ」

帰っても誰もいない家に戻ってすることなど無かった。

「じゃあ俺と遊ばない?」

その時の俺はとても嬉しくて、彼にグイグイ近づいていった。

「本当に？良いの？」

「勿論。だってこっちから声をかけたんだから」

フフ、と控えめに笑った彼は純粹に綺麗だった。

「そうだ！名前！俺はエドモン！エドモン・ダンテスだよ！」

勢いに驚いたのか、少し沈黙して、

「…俺は、メルだよ。よろしくね！」

そして疲れるまで遊んで、また明日！って別れたら、本当に次の日も来てくれて、

「また明日」

は会うための呪文だった。

メルは絶対に約束を破らない。

必ずどちらもまた明日と言って帰っていた。

1日もかかしたことがない。

なのに…今日は無かった

「また明日！」

「…うん、じゃあね！」

ただ、忘れただけかもしれない。
きつとそうだ。

そうに決まってる。

自分に言い聞かせた。

貰った小箱を握りしめて走る。

家の中に入って、

「父さん、ただいま。」

「おかえり、エドモン。…おや？どうかしたかい？」

箱をそつと開ける。一枚の紙が入っている。

そこには、

【親にバレたからもう会えない。】

という一言だけ。

「…うそだ…」

後から後から涙が出て止まらない。

ずつと、ほぼ毎日欠かさず会っていた。

大事な親友だった。

なのに…なのに…どうして？

こんなに急に…

「エドモン…？」

父さんが近づき、紙を覗き込んで

「…メル君からかい？」

こくりと頷くと、

「バレたら会えなくなるような立場だったのに、よく毎日会いに来てくれたね。優しい彼に会えなくなるのは悲しいけれど、エドモン、君の人生は長い。いつかまた会えるはずさ。」

父さんの大きな手が俺の頭をゆっくりと撫でる。

「それに、こんなプレゼントを貰ったんだから頑張らなくてはね。」

プレゼント…？まだ小箱の中に入っていたのか…

「…え…？」

小箱の中に入っていたのは蒼い宝石のネックレスだった。

貧乏な俺は宝石の不思議な輝きに見入ってしまった。

ああ、メルの瞳とそっくりだ…

「これはサファイアだね。サファイアには危害から守ってくれる力があるそうだよ。」

大事にね。

そう言つて笑う父さんは、俺が船に乗ることを心配していたと思えないほど清々しい顔をしていた。

そして数ヶ月後に俺は

2回目の恋をした。

恋愛した日

ザザン…ザザン…

ゆったりとした波の音が心地よい。

波に合わせて揺れる甲板で忙しく動き回る男達。

「おい新入り！帆を畳め！」

「はいー！」

港が近づいてきた。

このまま波に乗っていけば着くだろう。

「やつと帰って来れた…」

「そつと降ろせよ！そいつの中身は硝子だからなあ！」

「その箱はこつちでさあ！」

「おら！チャキチャキ動け！」

船から積荷を下ろしていく。

「すみません、これは…?」

「ああ?中はなんだった?」

中身は…

「たばk「船室の方に隠しとけ!」…はあ、」

「納得してねえ顔してんなあ…新入り、お前さんにも教えといてやる。」

「?」

「俺たちは少しだけ悪い事をしてるのさ。煙草や茶なんかを関税の目から隠してるんだ」

関税から隠してる?

…それはつまり…

「密輸入ですか…」

新入りの少年…エドモンは少し顔色が悪くなる。

「安心しろ、これは密輸入じゃなくただ国外から持ってきただけさ」

「それを密輸入と言うのでは?」

「そうとも言うな!けどこれはモレルさんだつて知ってるぞ」

「そうですか」

もう何も言うまい。

これは皆がやっている。

俺だつて貧乏だから文句は何もない。

木箱を船室の方に隠してから荷物運びに戻る。

やつと積荷を運び終わり、昼飯を胃につめこんでいるとまわりが騒がしくなる。

「…何かあつたんですか？」

「大ありだ！モンテゴ商会の御息女が視察にいらつしやつた！」

モンテゴ商会の御息女……モンテゴ商会の!?

ガタリと立ち上がる若い面々。モンテゴ商会の御息女は若い。

顔は知られていないが、どんな見た目でも構わないと逆玉の輿を狙う男も多い。

まあ俺はただただ驚いただけだが、他は皆手摺から身を乗り出している。

俺も見てみるか。さあ、どんなに肥え太った女かな……最近は周りの人達に毒されてる

気がする。

女性にそんな失礼な事言っちゃダメだろ！と会えなくなつた親友は叱るだろうか。

少しセンチメンタルになりながら自分も身を乗り出してみる。

「あの人だ」

そう言つて教えて貰つた女性を見ると、ロマンチック・スタイルのドレスを着ていた。ワインレッドのドレスは目を引くものの肝心の顔は白いポークボンネットで見ることができない。

こちらに気がついた女性はモレルさんに何かを言つたようだった。

船が上がつてきたベテランの人が、

「お嬢さんが船員と顔合わせしてみたいとよ！」

一瞬だけ硬直したと思つたら皆、ボートの方へと詰め掛けていった。

「お前さんは行かないのかい？」

「いや、行きますけど…でもあそこに混じるくらいなら最後に行こうかと」

「冷めてるなあ…それとも誰か好きな女ひとでもいるのか？」

ええ？どうなんだ？

そう言つてついでに船長は少しだけメルに似ていた。

「そうですね。まあ好きな人はいましたけど、あの人を超えられるとは思つてないの
で。」

「……ツク……あはははは！」

船長はキョトンとした顔になつたと思えば急に大笑いしました。

「あはは！熱烈じゃねえか！だがなあ……一度お嬢さんとあつたが、ものすげえ別嬪だったぜ」

あと20年若ければあそこの仲間入りしてたな！

…そんなに美人ならどうせ相手がいるだろうに。

しばらくすればボートが空いて、船長やほかの既婚者の船員と一緒に陸に行く。

陸に上がれば、こちらに背を向ける女性。その正面には若い男たち。それでも海の男だから通常よりは身体が大きい。

それなのに普通の男女と変わらない身長差なのは彼女の背が高いのだろう。

「あつ！船長！」

1人の船員が声を上げたためこちらに気づき、振り向いた。

それが酷くゆっくりで長い時間に思えた。白いポークボンネットの下から覗くのは彼に貰ったサファイアと同じ蒼。ドレスとは真逆の白磁の肌。ちらりと見える前髪は薄桃色にも見える金糸の髪。

「メル……？」

「……え？」

メルよりは数段高い声。

けれど…それでも…彼女はメルと同じだ。ああ会いたい。もう一度だけでも…
「メル！」

気がつけば勝手に走り出していた。

そして、すぐに抱きしめて…違和感があった。柔らかい。

真綿のようなその存在感があまりにも大きかった。

「あの？離してただけませんか？」

すぐに手を離して一歩下がる。

そして抱きしめた相手の全身を見た。

身長は自分とあまり変わらないが、ほっそりとした腰と激しく主張する2つの山。

メルに似てはいるものの、改めて見れば別人だ。

そして、彼女が誰か思い出しきつと血の気が引いた。

「貴方は誰ですか？私を知っているようでしたが？」

「エドモン・ダンテスと申します…すみません。もう会うことのできない友人ととても似ていたので…」

「…そうですか。まあ、いいです。私はメルセデス・モンテゴと申します。以後お見知り置きを。」

あまりにもよく似た彼女は酷く冷めた目をしていた。

そのまま後ろにいた船長と話を始めた彼女から視線を逸らすことができない。

∴。俺は人生で二度目の恋に落ちた事を理解した。

ガタガタと揺れる馬車の中には1人の女性∴いや、年齢的には少女と言える。そんな彼女は物憂げな表情で窓の外を見ていた。

「はあ∴」

吐き出す息は色つぼく、成熟した体躯も合わせれば妖艶な美女にしか見えない。
まだ幼い顔立ちが背徳感を刺激する。

〈ああ、このせいで襲われやすいんだ。〉

納得くなんて呑気なことをメルは言う。

” そんなことはどうでもいいから彼に出会ったらどうしたらいいか教えて…”
中身はただの恋する乙女でしかないが。

〈ええ〜? とりあえず他人のふりしておけばいいんじゃないの?〉

” 投げやりすぎるわ”

〈だって俺恋する乙女じゃないし〉

” だってメルは彼に好かれているじゃない!”

〈だって親友だし〉

” そうゆう所よ、メル”

〈? わかんない〉

メルは本当に好意に鈍いわね。

あれを見てればわかるけどどう見たってメルに初恋持つてかれてるじゃない。

〈まあ予想だけど、あんな別れかたしたしメリーに突撃してくるんじゃないかな〉

…言い逃げどころじゃない別れかただったから多分じゃなく突撃してくるわね。絶
対に。

港に到着してからはまず、モレルさんを探さなければ。

建前はモレルさんのところへの視察にですから。

「モレルさん」

「！おやおやこれは、メルセデス嬢。お久しぶりですね」

「ええ、会えて嬉しいわ。けれど、もうお仕事は終わってしまったみたいね。」

「ああ、先程終わったところでして。今は皆船の上で昼食を食べておりますよ」

「あら…そうみたいね。」

ちらりと船を見やれば落ちるのではないかと思うほど身を乗り出す男たち。

「ねえモレルさん。私彼らに会ってみたいわ。」

「彼らにですか？そりやまたなんで…」

少し唇が尖っているのは自覚しているけれど…お父様が悪いのよ！

「だって…ええ、ええ。分かってますわ、お父様やお母様に大事にされている事くらい

！」

「ああ…旦那様ですか…」

「こんな所でしか出会いはないなんて無いのよ。どうせお父様は私が入った方としか結婚させてくれないもの。それなのに男性と出会う場はまだ早い！なんて言うんですか

ら。」

「苦勞してますねえ…まあうちの船員達はみんな屈強な海の男どもですから。なかなかに見目のいい奴もいますしね」

そう言つてモレルさんは近くにいた男の人に彼らを呼びに行くように言つた。

「自分、ピエールつていいいます！一目惚れです！」

「おいテメエ！抜け駆けしてんじゃねえぞ！」

「ちよつと面貸せや！」

「騒がしくてすみません、レディ。ちなみに俺はサミュエルです。」

「先輩！サミュエルさんがどきくきに紛れて告白しようとしてます！」

「わっ！バカやめろ！」

…騒がしいなあ…

この告白ラツシユはかれこれ10分続いてる。

さして興味のない男性達なのでほぼ聞き流しています。

飽きたなあ…

「あつ！船長！」

船長が来たなら挨拶くらいしておかないといけない。

くるりと後ろを振り返ると、

「メル……？」

「……え？」

流石にこの格好をしていて即座にメルの名前を呼ばれるとは思ってもしなかった。

「メル！」

返事をする間も無く走ってきた彼：エドモンに抱きしめられる

ああああああ！顔が真っ赤になりそうだわ！もう、これをされて平気でいられるメルはおかしい！うう、ずっとこのままがいいけれど、平静を保ちながら声をかけなければいけない。

「あの？離していただけませんか？」

すぐに手がはなれていく。

改めて彼をまじまじと見る。

自分より少し高い身長。黒く、ふわふわとした髪。黄金色の瞳。小麦色に焼けた肌。

長い船旅で少し汚れてはいるもののそれが気にならないほどに爽やかな彼に見惚れる。そして、急に彼の顔色が悪くなる。

「貴方は誰ですか？私を知っているようでしたが？」

違和感のないタイミングで話しかける。

「エドモン・ダンテスと申します…すみません。もう会うことのできない友人ととても似ていたのです…」

「…そうですか。まあ、いいです。私はメルセデス・モンテゴと申します。以後お見知り置きを。」

少し気ままずくなってしまったのでそそくさと彼の後ろに立っている船長に話しかけに行く。

話している間もエドモンの視線が背中に刺さるのがよく分かった。

有名人と出会った日

さて、今私が…というよりも俺がいる場所はどこでしょう？
別にメリーの中とかいう頓知じゃないよ？

なんとここは！

フォンテーヌブロー宮殿！

フォンテーヌブロー宮殿ってなんぞや？って人に軽く説明すると、12世紀辺りにルイ6世だかが建ててからちよくちよく増築されてる宮殿で、現在の住人はかのナポレオン・ボナパルト。

ちなみに今日は父さんの代わりに仕事として来ている。
依頼者はナポレオン。

内容は、

息子の服を作りたいから生地を見繕いたい（意識）
だつて。

ちなみに今の西暦は1811年。

ちようど彼の息子が生まれる年だ

なつがーい廊下を数人の部下を引き連れて進んでいく。

「こちらが謁見の間にございます。」

どデカイ扉の前に案内される。

まじかーうちの扉も大概デカイけどこつちもデカイなあ…

うん…現実逃避してただだよ。

だつて…ナポレオンなんて有名人と会えとか…やばいくらい怖いかもしれないじゃ
ん。ルイ・ル・ビアン・ネメとナポレオン・ル・モティって言われるくらいだし…

ええい！ままよ！

意を決して扉を叩く。

「モンテゴ商会の者です。」

「…入ってくれ」

扉が開き、中へ進む。

まずはドレスの裾を摘んでお辞儀をする。

「お初お目にかかります。メルセデス・モンテゴと申します。父の代理として参りました」

「ふむ…顔を上げてくれ。堅っ苦しいのは好きじゃない。」

顔を上げて、ナポレオンを見る。

短い茶髪にパツチリとした青い目。顎鬚を蓄えているのも特徴的だ。端的に言おう。イケメンだ！イケオジだ！爆はト流石にダメだなあと数年で死んじやうし。

「それでは早速、どういった服をお考えですか？」

「息子の寝巻き用の服と礼服、それに動きやすい服が欲しい。」

「でしたらまずは寝巻き用の物から、こちらはいかがでしょうか？フランス産の布地でして、綿でできております。ですからご息様の柔らかな肌に合うと思います。」

「ふむ…ではそれにしよう。他は？」

「こちらの布地で動きやすい服を作るとよろしいかと。こちらはインドから輸入したものでして、細かな刺繍が美しい一品です。他にもこちらの……」

布の性質と産地を伝えていく。案外彼は即決で購入するタイプのようなのだ。まあ即決してくれて構わない。うちの商品の質は世界一イイイイイイ!!!だからね。

「ご苦労だった。若い女が来たからてつきり質の悪いものでもつかまされるかと思えば、むしろ全部上質なものばかりと来た！良い買い物を見せて貰った！」

ニコニコしている彼は礼服を着ていなければ気さくなただのおじ様（イケメン）にか見えな。

「それはどうも。布地や装飾品の類は父よりも私の方が詳しいですから。これからもぜひご鼻屑に。」

「はっはっは！それなら彼もすぐに楽隠居出来そうだな！」

隠居：？あの仕事中毒者ワーカーホリックが？

「…どうでしょう…あの人が隠居する姿が想像出来ません。」

「まあ優秀な後継者がいることはいいことだ！息子が大きくなつてからも頼むぞ！」
「喜んで。」

談笑して、奥さんと息子さんも交えてお茶もした。

ルイーズ皇女めっちゃ美人だった。

まあメリーの方が美人だけど！

「つつかれたー！」

帰りの馬車の中で伸びる。

ちなみに数日かけて宮殿まで行つた。

まあそれでも次回を取り付けてきたから安いものだ。

” おつかれ様、メル。ありがとうね。 ”

〈別に、メリーの為ならこのくらいへっちらさー！〉

今回、メリーの代わりに俺が行つた理由はメリーだと表情筋が動かなすぎてアウトだから。作り笑いも張り付かないような鉄仮面を装備してるメリーに相手をさせない方が良いという2人の判断だった。

とりあえず、

これ、数年後にボナパルト党として豚箱に放り込まれない？
大丈夫？ 死なない？

心の底から告白した日

そよそよと優しい風が吹く草原

森に向かう2つの影

傾きかけた太陽は空を紅く染める

黒髪の青年と金髪の乙女

古いシャツにボロボロのコートを羽織る青年と見るからに上質なドレスを着る乙女

一目見ればどれ程身分が違うかが分かる

やがて2人は森の奥の小さな宿り木の下へ

意を決したように口を開くエドモン

「メリー……いや、メルセデス。俺は……君が……きみが……」

それ以上の言葉は詰まって出てこないの？

私はこんなにも待っているのに……

「きみが…」

不意にちらりと白い物が目に映る

「あ…」

今日はキリストの生誕祭。

恋人たちはみんな宿り木の下でキスをする。

〈キスしちやえば？このままだと2人も風邪引くよ〉
baiser

” 本当にね。でも、そんな可愛いところが好きなの”

〈彼、揶揄うと面白いよね〉

心の中で2人で笑い合う。

ふ、と笑みがこぼれると彼の顔は真っ赤になってしまった。

ああ、もう、そんなところに私は恋をしてしまったのでしょね。

私よりも少しだけ高い位置にある彼の頭を引き寄せ頬にキスをする。
baiser

赤い顔がさらに赤く、リンゴのようになってしまった。

食べてしまいたいくらいだわ。

「その先の言葉はいつまで待てば出てくるのかしら？」

ぐっ、と言葉に詰まった彼はゆっくりと冷たい空気を吸い込み、白い息を吐き出す。

「俺は…君のことを…愛してる！」

「ええ、それで？」

意地が悪いと分かっているけれども、それでもその先の言葉も聞きたい。彼の首筋を撫ぜるように手を引いて行けばその手をそつと掴まれる。

「俺は君のことを愛している。だから……だから、恋人に……俺の恋人になつて欲しい！」

掴まれている手は痛いほどに握られ、告白した彼の顔は赤く不安と希望の混じつた表情かおをしている。

可愛い可愛い私の愛しい人……やつと愛し合えるのね……

「ええ、勿論喜んで！」

その一言で彼の涙腺が決壊したようだった。

ポロポロとこぼれ落ちる涙を見て、

「涙が止まらないよ。それに嬉しくつて、俺はもう死んでしまうかもしれない……」

「貴方が死んでしまったなら私はマルセイユの美しい海に身を投げてしまうわ」

クスクスと笑う2人はどちらからともなく顔を近づけてゆく。

そつと、触れるだけのキスをすれば彼の少し力サついた唇の感覚がしつかりと残る。

「私は貴方のことが世界で1番大好きよ」

「でも、俺は君のことを世界で1番愛してる！」

ふふん、と自慢げに笑う彼が愛おしい。

ずっとこのままで居られれば良いのに…

暗くなり始めた道を手を繋いで歩く2人

彼の家に向かう途中だった

「メリー、気付いてる？後ろから誰かが尾けてるよ」

”…そう”

この道を曲がれば彼の家に着くことは知っている。

曲がろうとする彼の手を引いてまっすぐ進む。

「メルセデス？そちらは俺の家の場所じゃないよ」

「知っているわ。」

「じゃあなんで…」

ピタリと足を止めて振り返る。

「やあ、Bonsoirこんばんわメルセデス。」

「お久しぶりね、フェルナン。元気そうでよかったわ」

長い亜麻色の髪を結った彼は精悍な顔立ちになっていた。が、それでも瞳に映るのはドロドロとした愛欲ばかり。

「綺麗になつたね」

「そう？彼に恋をしたからかもしれないわ。でも、貴方は全然変わらないわね」

エドモンに殺意が降り注ぐ。

「其奴が君を誑かしたんだね」

「そうだったとしても貴方に恋心を抱く事は億が一にもないわ」

さらに強く睨みつける彼はなぜ自分が愛されないのかをまったく分かっていないの
でしょうね。

「そんなことはないさ……」

彼は私を守るように立つエドモンに狙いを定めた。

「其奴を殺せば君は僕のところに戻ってきてくれるんだらう？」

ナイフを持って走り出した彼。軍人になつた彼は素早い。

「彼を殺せば私は貴方を恨みながら死ぬ！」

ドリー・バーデン・スタイルにしたバツスルドレスはあまり動きやすいものではない。
そもそもドレス自体が動きやすくない。

しかし、隠し武器を仕込むことは容易い。

たくし上げたオーバードレスの中に仕込んだそれを投げる。

キンツと硬質な音が響く。

私の手から放たれたナイフは彼の手のナイフをはじき飛ばす。

「どうして……？ どうして？ なんでなんでなんでなんで！
メリーはずっと僕を愛しているんだ、そうだろう？ 僕を嫉妬させるためなんだろう？ あ
んまりにも長い間会えなかったから拗ねているだけなんだろう？ そんな奴よりも僕の方
が良いだろう？ どうしてそんなにそんな汚らしい奴のことを助けるんだい？ ねえ、ぼ
くのメリー、僕だけのメリー」

「いい加減にして！ 私は最初から貴方のことを愛してなんかいない！ 気持ち悪いのよ
！」

ポロポロと涙を流すフェルナン。だとしても私の心には全く響かない。

「そっか…君はニセモノなんだね。昔も居たんだよ。君に似たニセモノが。」

そう言って再びナイフを握ったフェルナンは私の方へと走ってくる。

もう一度、今度はオーバードレスの前部分に手を入れる。

それを広げてナイフを受け止める。

それは以前、胡散臭いチャイニーズが教えてくれたものだった。よくわからないが、ヌンチャクだとか、サンセツコンだとか言う武器らしい。

3つの棒が短い鎖で繋いである。繋いでも40cm程しかない。それでも十分な武器にできる。

なるべく怪我をさせないようにしたいと思うけれど、彼はそうではないらしい。「すばしっこいな。早く死んでくれないとメリーに会えないよ。」

ふつりと頬が切れ、赤い血が流れる。

「あ……」

エドモンが横から飛び出してフェルナンに掴みかかった。

「よくもメルセデスに……俺の恋人に怪我をさせたな！」

怒り狂った彼はフェルナンの頬を殴る。

金の瞳には憎悪が映っている。

ああ、嫌だ。彼があんな顔をするのは……それでも私のためにあの顔をするのならば、と愛しさも湧いてくる。

けれど彼が責められるのは私の本望ではない。

胸元から針を出し、フェルナンの背後にまわりこんで刺す。

ガクリと倒れ、動かなくなる。放っておけばまた襲ってくるだろう。古びた教会に運び、捨てておく。

「さあ、帰りましょう。愛しい人！」

この幸せを邪魔するのならば

私は

殺してでも障害を消し去ってみせる。

結婚式より少し前の日

「メリーちゃん!!」

大きな音を立てて扉を開けたのは、ガブリエル先生だった。

「静かにしてください。扉を壊すつもりですか。」

真つ青な顔で息を切らしている先生は久し振りに見た。

前はお母様との鬼ごっこの時だった気がする

「そんなことはどうでもいいんだよう!メリーちゃんてば彼氏出来たの!?!聞いてないよ!?!」

「逆になんて知ったんですかあなた」

お父様にも言っていないのに。

「マダム達が教えてくれたよ?領主様のとこのメリーちゃん、彼氏さん出来たみたいねーって」

マダムー!何故かなんでも知ってるマダムそんなのも知ってたのか…

マダムを諜報部にしたら国は安泰かな

「彼氏出来たのって本当なのメリーちゃん!僕を差し置いて彼氏になったのはどこの馬

のほn「は？」ヒエツ」

「ええ、ええ。あの人はたしかに身分が低くて貧乏よ。いつつもお世辞でも綺麗だなんて言えないような服を着ているわ。それでもね、私はあの人を愛しているんです。あの人瞳に、心に、全てに。貴方からしたら馬の骨としか言えないかもしれないけれど、私はあの人のためならなんでも出来る。あの人死んだのなら私だって死ぬわ。そのくらの覚悟は出来てるの。だから先生、貴方だろうとお父様だろうとお母様だろうと。あの人の事を悪く言うなら許しません。許せません。良いですね？」

「はいー」

「あら先生？別に敬礼なんてしなくて良いのよ？私は別に、貴方の上官じゃないのですからね。」

「ねえお父様。そう言うわけだからあの人と結婚しても良いかしら？」

「先生が私に彼氏が出来たと叫んだ時からずっと居たのは知っていますよ？」

「却下したらお前は どうするんだ…」

「却下したらもちろん、」

「私、皇女様に教えていただいたのですよ？オーストリアはとってもステキな国だと思いますね。」

諦めてくださいいね、お父様。私は強情ですから。

「…最近は本当にシルヴィに似てきたな…」

「あら、ありがとうございます。とつても嬉しいですわ」

カランコロン

「いらっしやい…おや？リアム坊ちゃんにガブリエルの坊主じやないですか。珍しいです。すねえ2人でここに来るなんて。」

ここは小さな居酒屋

酒も美味いし飯も美味い。だが一番好かれるのは何よりマスターの人柄だ。

「ママズダー！メリーちゃんがあ！」

店に入った途端に大泣きしだすガブリエル。

顔から出せる粘液全てを撒き散らしてる状態だ。

「うっわひでえ顔。ほらタオル貸してやるから…まあ座って酒頼め！話はそつからだ

ぞ」

ボトルでガブリエルはウイスキー、リアムはウオツカを頼んだ

「飲み過ぎて潰れるなよ？今からでもオーダーの変更は受け付けるぜ？ワインにしとけ？これならまだアルコール低いから、な？ストレートで飲もうとするのやめろ！坊ちゃん！ラツパ飲みはいけない！話ちゃんと聞くから落ち着け！」

「ほー？メリー嬢がとうとう結婚かあ……良いんじゃねえの？」

「良くない！俺の可愛い娘を簡単にやれるもんか！」

ボロボロと大泣きしていたのにまた泣き出すリアム。

「……僕……メリーちゃんと結婚したい……」

泣きまくってガブリエルのタオルは今2枚目に突入している。脱水にならないように水出しとこう……

「坊主の戯言は置いといて、別にメリー嬢が結婚したいって言うてるんだし。それに話聞く限り優しくて貧乏だけど頑張り屋で、周りから愛されてる奴なんだろ？ああ、なんて名前の坊主だったか教えてくれりゃわかるかもしれないねえぞ？」

真つ赤になった4つの目がじつとこちらを見る。

「エドモンとか言う奴。」

「確かモレルさんのところで働いてる筈だ。」

エドモン……？

「おお、ダンテスさんところの倅か！あいつは良い男だよ！優しくして自分から働き始める。父子家庭に関わらず良い男に育ったよな！」

「エドモン・ダンテス……許さない……」

酒瓶を抱えながら言ってもあまり迫力がない。

今にも呪い始めようとしている2人を見て、一言。

「フェルナン坊やより万倍マシだと思うんだな……」

「それな」

息をぴったり合わせた2人はそのまま残っていた酒を煽り、カウンターに沈んだ。だから言ったのに……

そう言えば最近、ナポレオンが引き摺り下ろされたが…商業的な面でナポレオンと関係があつたモンテゴ商会は大丈夫だろうか。

幸せだった日

波を割く様に進む大きな帆船

数ヶ月の旅を終えてもうすぐ港へ着く

船員の指揮をしているのは一等若い男

黒い髪に金色の目、小麦色の肌

この船の船長は彼になった

前任は病に倒れ、海の中で長い眠りについた

「さあ、帆を畳め！ 錨を降ろせ！ 小舟を降ろす準備は出来たな！」

「あいあい船長！」

「エドモン！ もうおろせるぜ！」

「じゃあ降ろしてくれ！ さあどんどん積荷を運べよ！」

「了解！」

積荷を降ろし終わり、皆でちよつぱり悪いことをしてから家族の元へ帰ってゆく。

「やあ、エドモンくん！お疲れ様だ。この後時間はあるかい？何人かで一緒に酒を煽りにいこうと思つてね」

少しふくよかな男性が話しかけてくる。

「モレルさん！ありがとうございます。けれど俺は一番に父さんに会いに行かなければいけないのです。」

モレルはニコニコして、

「そうだった、君は親孝行者だからね！その後はどうだい？」

エドモンは申し訳なきような顔をして、

「すみません。俺には父さんと同じくらい会いたい女ひとがいるのです。」

モレルは大笑いする。

「はっはっは！君はそうだった！とても美しい彼女がいるんだね！酒はまた今度一緒に飲もうじゃないか！」

「ええ、ありがとうございます。」

そう言つて立ち去ろうとするエドモン。

「ああ！エドモンくん、船長就任おめでとう！」

「ありがとうございます。」

「引き止めてすまないね。お父さんのところへ行つておいで」

「はい」

家に向かつて走るエドモンの表情はとても晴れやかだった。

「おや、メルセデスお嬢様！一体如何なされ…ああ、エドモンでしたらまず父親のところへ走つて行きましたよ。いや、お礼をされるほどでは…ほお！結婚！よく旦那様からもぎ取れましたね。さすが奥様の娘、と言つたところででしょうか。」

「お幸せに！」

走る、走る、走る。

淑女だと言う事などかなぐり捨てて。

駆ける、駆ける、駆ける。

それでも、喜びで頬を上気させながら。
さあ、彼の家はもう目の前。

家の外から呼ぶ。

「エドモン！」

扉が勢いよく開き、待ち人が出てくる。

「メルセデス！会いたかったよ！」

熱い抱擁を交わし、互いの無事を喜ぶ。

「ねえ、エドモン。結婚しましょう！」

「えっ！けっ、結婚?!」

「そうよ！だって、貴方からそんな話が出てくるのに後何年かかるかわからないんですもの。エドモンのお義父様にも私のお父様にもお母様にもお母様にも許可は頂いたわ！」

「うう…何も言い返せないのが悲しいね…でも、俺は一度も君の両親に会ったことないよ。」

私はにつこりと満面の笑みを浮かべる

「ええ、知ってるわ。だから今から会いに行きましょう。」

「……今から？」

そのまま問答無用で手を引いていく。

「もちろんよ。」

「君の家は隣町だよ、今からじゃもう日が沈んでしまうよ。」

安心して、と言って振り向く。

「私の家に泊まって構わないから。」

それでも…と渋るエドモンに、仕方がないわ、とそつと脇の下を通すように抱きつく。困惑しながらも抱き返してくる彼を可愛く思いながらも首に回された彼の腕が離れないうちに片腕を彼の膝の裏に通して持ち上げる。

「メルセデス!？」

そう、所謂姫抱きというものだ。

そのまま問答無用で走り出す。

「降ろしてくれ!手を離してくれ!」

そう叫ぶ彼を見て、やっぱり嗜虐心が湧く。

「そんなに言うならそうね。」

パツと抱き上げていた手を離してすぐに戻す。

「うわっ!危ないだろ、そつと降ろしてくれないか。」

離れた瞬間にギュッと強く抱きしめて来るのがこの上なく可愛い。

「だって、私の愛しい人がすつごく可愛らしいんですもの。少しくらい揶揄ってもいいじゃないですか。」

そつと降ろしながら言う。

「俺としては愛しい人が意外とパワフルだった事に驚いているよ。それでも君のことが好きなのは変わらないけれどね！」

笑いあいながら2人で手を繋いで道を歩いていく。

「さあ、俺も腹をくくらないといけないね。頑張るよ」

「頑張ってくださいな。港に馬車を停めているのでそれで帰りますよ。」

海に沈む夕陽が街を赤く染めていく。空にはもう月が出ていた。

ゆつくりと歩く2人月と太陽は見守っていた。

「娘さんを、俺にくださいい！」

「……………」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

ということではなく、ただ単にメリーが貰われていく事を再認識して、精神がボロボロになつてただだからモーマンタイ!

「……」

なんでおるん? って言いたくなるけど、ガブリエル先生が壁に寄りかかってムスツとしてる。

やっぱり黙つてればイケメンだね、先生つて。

「メリー。少しお母さんと外でお話ししましょう?」

「…ええ、分かりました。」

ちらりと視線を3人に向ける。エドモンはお父さんの方を向いてるからこちらが見えていない。メリーは「エドモンに何かあれば許さない」とアイコンタクトしている。

お父さんも先生もゆっくりと息を吐いて、

「少し、3人だけにしてほしい。」

と言った。

「失礼します」

とそつと扉を閉める。

中庭でお母様と話す。

「ねえメリー。どうしてあの殿方を気に入ったの？」

メリーは暫く沈黙してから、

「数年前に会ったの。その時に一目惚れして……」

ぱちりと目が合う。

「本当に？ そんなに最近じゃなさそうな気がするのだけれど……話してはくれないの？」

この人はやっぱり怖い。

でも言葉の端々から優しさが感じられる。

「本当は、もっと前から。」

「いつ？」

「13、4年前くらいの時……」

ふふ、とお母様は笑って、

「それじゃあ仕方ないわね。貴方がそれだけ大事にするのもわかるわ」

くるりと振り返って、

「さあ、戻りましょう」

彼方も話が終わる事でしょうし、とご機嫌そうに歩いてゆく。

「君は本当にメリーを愛しているのかい？」

「もちろんです。俺は彼女を一目見た時から愛しています。4年などという短い間だったとしても彼女のことは一度も思い出さなかつた事はありませんでした。」

「そんなの僕らだつてそうさ。彼女がとても小さな時からずっと。君の何倍も思い続けている。」

空気の動く音が聞こえそうなほど静かになる。

ピリピリとしたこの場所はすわ戦場か、と思うほどに張り詰めていた。

「あの子を泣かせたらすぐにでも別れてもらう。」

「絶対に泣かせませんとも。」

その後、すぐにコンコンと戸を叩く音が聞こえた。

ああ、

もうすぐ

始まる劇は

T
r
a
g
·
d
i
e
悲劇か

舞台の幕が今、開いた。

喜劇か
Com·die

不幸の始まった日

幸せとは山のようなものである

険しい山の苦しく長い道のり

道無き道を進み

頂上幸せになるに立つ

そして少し足を滑らせれば

下に転がり落ちるばかり

登るよりも早く

下へ下へと堕ちてゆく

真つ白なドレスを身に纏い、赤いカーペットの上をゆつくり歩く

一段ずつ階段を上る

牧師様の前で止まり、彼の方を向く

彼と目が合い、ふわりと微笑む

彼は白い礼服を身に付けている

腕を組み、牧師様に向き直る

「新郎エドモン・ダンテス、あなたはここにいるメルセデス・モンテゴを、

病める時も、健やかなる時も、

富める時も、貧しき時も、

妻として愛し、敬い、

慈しむ事を誓いますか？」

「はい、誓います。」

「新婦メルセデス・モンテゴ、あなたはここにいるエドモン・ダンテスを、

病める時も、健やかなる時も……」

その時、幸せが壊れる音がした

荒々しく開かれる扉

神聖な結婚式を踏み荒す軍人達

「エドモン・ダンテスさん、貴方には逮捕状が出ています。我々にご同行願います」

そう言つて軍人達は彼の腕を掴み、無理やり連れて行く。

「離してくれ、どうして俺が…」

「彼が逮捕されるなんて有り得ない！」

「何かの間違いだ！」

どうして…？

どうして私のしあわせを邪魔するの？

邪魔するなら

壊^殺してしまおう

「何か間違いよ…」

有り得ない…

離して…」

最後に見えたのは悲しそうな顔をした彼だった

今日は彼女との結婚式の当日だ。

窓を開けると清々しい空が見える。

お義父さんからプレゼントされた白いタキシードを着て、髪を整える。

古めかしい小箱の蓋を開けると

日の光を浴びて深い蒼がきらめく。

「今日まで来れたのは君のお陰だよメル。」

ありがとう。俺の大親友、ここで見守っておくれ」

そつと小箱の蓋を閉めると、ちようど父の声が聞こえてきた。

さあ、俺の人生の晴れ舞台だ！

ああ、こんなにも幸せで良いのだろうか

幸せとは己で勝ち取るもの

何と戦えば良いのだろうか

パタリと扉を閉めた後。
ぴきり、と小箱から音がした

人生とは

誰も

幸せになれるという

保証などない。

狂ってしまったのはここからなのか

それとも

最初からなのだろうか

全ては神の思うままに動いているのだ。

目を覚ませば見慣れた天井で
自分の部屋の中にいることに気がついた。

白いドレスを着ていたはずなのに。

今は私のお気に入りのドレスを着ている。

……夢だった？

ならばこれから彼との結婚式で、私は彼と夫婦になれるの？
ずっと一緒に添い遂げて、彼の帰りを待つことができるの？

子供を産んで、育てて、独り立ちさせて。

……本当に？

私の手にはまだ首を絞めた感覚が残っている。

彼と腕を組んだ感覚がある。

白いドレスを着た感覚がある。

……じゃあ、彼は？

連れていかれたまま？

どうして？

お父様なら知っているかしら。

嫌に冷めた頭で考える。

「ねえお父様。彼はどうなったの？」

何も答えない

「答えて？」

「…連れていかれた。」

「罪状は？」

「ボナパルト党の人間である可能性が高いため」

何を言っているのかわからない。

「…は？彼が？何を言っているのです？彼はナポレオンになどあったことなければそんなものに参加するわけないでしょう。むしろ私の方があの人に関係があるではないですか！」

ふ、と窓の外を見る。

青く晴れ渡った空は太陽の位置が前に戻っているように感じる。

「お父様…今はあれからどれだけ経ちましたか？」

「丸2日経っている。少し目を覚ましたと思えば暴れだしていた。」

彼は監獄党に押し込まれることが確定しているらしい。

メリー・エドモン
彼女と彼はこの後、もう二度と会うことはなかった。

お別れの日

やっと、やっとだ！

あの忌々しい男を彼女から引き離せた！

ああ、もう嬉しくて仕方がない。

これならやっと彼女が僕のものになってくれるのだから！

さあ早くお姫様を抱きしめてキスをしなければいけない。そうだろう？

コンコン

「どなたですか？」

「僕だよ、愛しいメリー。」

「…お引き取りください」

「どうしてだい？どうして顔をあわせてさえくれないんだ？」

舌打ちが微かに聞こえた。

あの男のせいだ。あの男のせいで天使のようだった彼女が穢されてしまった。

「…お引き取りください。貴方と会う気はありません」

扉を押せばぎしり、と音を立てるものの鍵がかかっているらしい。

小さく縮こまり、ずっと泣き続けている彼女をこの腕で抱きしめたい。そうすれば彼女はきつと素直になつてくれるだろう。

「僕は帰らないよ。君と会うまでは。」

思いつきり体当たりをする。2回、3回と繰り返すと段々と感覚がわかつてくる。

7度目で鍵が壊れ、8度目で扉が開いた。

革張りのソファーには目を腫らしたメリーがこちらを見つめていた。

「出て行って下さい。」

「嫌だ。メリー、君が泣いているのが耐えられない。だからメリー、僕と結婚しよう。僕は君を泣かせることなんてしないよ。」

大きな溜息をついた。

「当たり前でしょう。私にとって貴方はどうでもいいので、貴方が何をしても心に響く筈がないです。」

強がらなくていいんだよ。悲しいでしょう？結婚式を滅茶苦茶にされただけじゃなくて彼は連れていかれてしまった。

そんなすぐに約束を破る人間となんで結婚しようとするんだい？

そのままソファーにメリーを押し倒す。

「僕の奥さんになっておくれ。ずっとずっと愛しているよメリー。帰ってこれない男なんて放つて置こう。」

「…何ですって？帰ってこれない？」

「おや？知らなかったのかい、メリー。あの憎つくきエドモン・ダンテスは監獄島シャトール・ド・イフにぶち込まれたよ。もう死ぬまで出てこれないさ。」

「……………う　　そ……………」

「嘘じゃないさ。こんなところで嘘をつく意味が無いよ。」

蒼い宝石のような瞳から大粒の涙が溢れ出す。

とても美しい。

「……………ね……………も……………」

「え？」

「死ぬ死ぬ死ぬ！もう絶対に許さない！殺してやる！」

押さえつけていた筈の手首が外れている。もう一度捕まえないければ。

そう思い手を伸ばすものの、掴むことができない。手首から先が動かない。

それに気がついた瞬間に激痛がはしる。

「うああああー！」

手首は外れ、ゆびは数本他の方向に向いている。

カタリ、と音がする方を向けば、レイピアを手にする彼女が。

飛びのいてみるが、避けきれずにレイピアが足を刺す。

グリグリと捻じ込まれ、鋭い痛みが襲い続ける。

何度も足や腹を刺される。それでも急所を外しているのは彼女の優しさだろうか。それとも鬨る為だろうか。

「貴方を殺せば私も監獄島に行けるかしら？ねえ。」

レイピアを振りかぶる彼女は酷く冷たく美しかった。

そこに不躰に声がかかる。

「ダメですよおく？お嬢様。そんなの殺したって監獄島には行かずに裁かれて死ぬだけですから。」

レイピアはピタリと途中で止まり、おろされた。

「メイド達に片付けて貰います。」

ドアのそばに待機していたのか、すぐに駆けつけて彼を連れて行った。

「ナイ先生、ごめんなさい。ありがとう。」

「お礼を言われるようなことはしていませんよお？」

くすくすと笑いながら部屋から出て行く先生を見送る。部屋の奥の扉を開き、寝室へと移動する。

ベッドに座りそのまま倒れる。

今はもうドレスがシワになったって、髪がグシャグシャになったって構わない。

もう…もう…

「疲れちゃったよ、メル。」

「大丈夫？交代する？…俺はメリーのことが心配だよ…」

「優しいなあ…でもね、もう疲れたの。私はもう目覚めたく無いわ。」

「待って！待ってよ！」

「おやすみ、メル」

「待ってよ！」

ガバリと起き上がればもう体の支配権は俺になっていて、何度呼びかけても彼女は何も答えてくれない。

どれだけ彼女を感じようとしても、今まであった暖かさがどこにも無い。

「どうしたらメリーは帰ってくるのだろう。目を覚ますのだろう。」

まるで眠り姫のようだ。

悪い魔女の呪いでずっと眠り続ける。

呪いを解くには、王子様のキス。

ああ、なんだとつてもかんたんなことだった。

エドモンをたすければいいんだ。

じゃあまずは何をしようか。

軍人になるのが一番早いが、父さんが反対するだろう。先生も反対する。

色々なことを考えて俺はとある人物に手紙を送った。

親愛なる友へ

お久しぶりですね。

お身体の方は大丈夫でしょうか。

他にも色々聞きたいことがございますが、あまり長く手紙を書くのは趣味ではないので単刀直入に聞きます。

貴方に直接会って話をする事は出来ませんか？

軍人になった貴方はやはり忙しいでしょうか？

会える日があれば是非折り返しお手紙を届けて頂けると嬉しく思います。

貴方の友人

メルセデス・モンテゴ

宛先は私の兄弟子であるトマロロベール・ブジョーだ。
彼なら合理的で口が堅い。

人手が足りないといつも先生は嘆いているから多分大丈夫だと思う。

さようなら半身。

俺は君のことが大嫌いだ。
大嫌い

いっつも自分勝手に

いっつも努力して

いっつも人を傷つけて

いっつも人を助けてる。

そんな君がいなくて俺は清々寂しいするよ

B
・
n
・
d
i
c
t
i
o
n

もしも

もしもあの時

少しでも変わっていたら？

真つ白なドレスを身に纏い、赤いカーペットの上をゆつくり歩く

一段ずつ階段を上る

牧師様の前で止まり、彼の方を向く

彼と目が合い、ふわりと微笑む

彼は白い礼服を身に付けている

腕を組み、牧師様に向き直る

「新郎エドモン・ダンテス、あなたはここにいるメルセデス・モンテゴを、

病める時も、健やかなる時も、

富める時も、貧しき時も、

妻として愛し、敬い、

慈しむ事を誓いますか？」

「はい、誓います。」

「新婦メルセデス・モンテゴ、あなたはここにいるエドモン・ダンテスを、

病める時も、健やかなる時も……」

その時、幸せが壊れる音がした

荒々しく開かれる扉

神聖な結婚式を踏み荒す軍人達

「エドモン・ダンテスさん、貴方には逮捕状が出ています。

我々にご同行願います」

そう言つて軍人達は彼の腕を掴み、無理やり連れて行く。

「離してくれ、どうして俺が……」

「彼が逮捕されるなんて有り得ない！」

「何かの間違いだ！」

ええ、そうよ間違いだわ

へメリー、落ち着いて

”大丈夫よ、とつても落ち着いてるもの。”

「待つてください。どうして彼が連れていかれるのですか？罪状は？」

1人の軍人が、一枚の紙を見せて来た。

「こちらの密告書が検事殿のところに送られて来ました。」

それを受け取り、目を通す

そこには、彼が航海中にセントヘレナ島に行き、ナポレオンに会つていたと書かれて
いる。

「そうですか。だからと言ってこんなに手荒に連れて行く事は無いのでは？ 事実確認を
していいのですし。ですからまず、ここで聞けば良いではないですか。」

「それは出来ません。」

「どうして？」

「規則ですから。」

「…分かりました」

〈落ち着いて、絶対にエドモンは大丈夫だから。〉

” 分かってる。ここで暴れてはいけないことくらいはね。”

「ああ軍人さん！ 私達のエドモンを早く返してくださいな！」

モレルさんがそう叫ぶと、

「なんだ、やっぱり犯人なのか。少しでも同情した俺が馬鹿だった。」

と一人の若い軍人が呟いた。

聞こえたのは私だけ。

彼は絶対に帰ってくる。

耐えなければいけない。

「本当に？」

「本当に耐えれば良いだけですか？」

「あんなことを言っているのです。保身に走って彼を牢獄に閉じ込めるかもしれない」

「そんなことない？…言い切れますか？人間というのは昔からそうなのに。」

グルグルと誰かの言葉が頭の中で巡っている。

帰ってくる確証なんて無い

耐えていたって意味が無い

私だって知っている人間の醜さ。

「私が狂気チカラを与えましょう」

真つ赤に染まる視界

巻き起こる悲鳴

温かな液体

響く怒声

気がつけば私は若い軍人を殺していた。

へし折れた首は骨が突き出している

何故かとても冷めた頭は客観的にものを考えていた。

軍人を殺した女。

彼は監獄島へ連れていかれる。

ならば連れていかれる前に障害は

全て

壊^殺そう

死んだ軍人の佩くサーベルを手取る

自然と笑みが零れる

軍人だけじゃ物足りない。
結婚式に来てくれた人。

取引先の人

村に住む人

エドモンの知り合い

船乗りさん

モレルさん

ガブリエル先生

お母様

お父さん

みんなみんな

壊^殺しちやえ

白いドレスが真っ赤に染まる。

血が床や壁に模様を描く。

「うふふふ、最後の一人は貴方ですよ。フェルナン。」

切り捨てられて尚、笑顔でいる彼はきつと私以上に狂ってる。

「ああ、僕のメリー。やっぱり世界で一番美しい……」

パチ、パチ、パチ

「いやあ、素晴らしいですねえ。さすがお嬢様です。」

「あら、ナイ先生。私、気づいたのだけれど……頭の中で聞こえた声は貴方でしょう？」

「よく気が付きましたねえ。教師としてとても誇らしいですよ。」

「ねえ、先生。この前ね、私の本棚に見知らぬ本が入っていたの。その本にはね、色んな神様が書いてあったの。」

「……」

「Ia. Ia. Nyarlathotep.」

「おや、」

「先生でしょ？この神様は。」

「ええ、そうですよ。それで？何か望みますか？」

「私は…私を生贄に捧げます。だから、彼に害を為す人間全てを殺して！」「分かりました。どうするべきかは分かっているのでしょう？」

「にやる・しゆたん にやる・がしやんな にやる・しゆたん にやる・がしやんな
」

その呪文を唱えると目の前の先生の姿がボコボコと音を立てて変わってゆく。

整った顔は靄になり

「浅黒い肌は薄汚れた灰色に

身体はどンドンと肥大化して

足は蛸のような触手に変化した

それはとても悍ましく、名状し難き存在である。

それは貌の無いが故に、千の貌を持つ神である。

それは冒流的な言葉を発しながら私の事を掴み上げる。
ミシリ

バキリ

身体中から嫌な音が聞こえる。
意識が飛ぶ程の痛みが襲う。

けれど

「うふふふ…あははは！」

笑いが止まらない。

「暗黒のファラオ万歳！…ガフツ…ニヤルラトテツプ…万…ぎ…い！…ふふふ…先生…私、先生のこと…家族の次に大好きよ…」

霧の前まで持って来られ、もう食べられるのみかと思った。

「気に入りました。貴方のことを私の化身にしましょう」

それが聞こえた時には霧の中に放り込まれていた。

「ふふふ、これはこれで面白そうですねえ」

「ああ、喋り方を変えなければ！声もですねえ」

「そうだわ、私はエドモンを助けにいかないと！なんて、どれだけ健気な子なのでしょうね。
うね。私この子は」

「まあ約束は約束ですし。とりあえずフランスの人間を全て殺せばいいでしょう。」

「さあ、大仕事

パ
チ
ツ

ただ眠るだけの神

慰めの唄を聴きながら

数多の夢^{世界}を見る

そして今、一つの夢が覚めた

こうして無駄な夢は覚めてゆく

「残念ですね。中々に面白い世界だと思ったのですが」

貌の無い神が一人呟いた

「まあ、まだ世界は有りますし。次はどんな面白い事が起きるのか…楽しみですねえ」
無い貌が酷く歪な笑みを浮かべたように見えた。

「それでは良い夢を…お父様」
悪夢

俺の覚悟をした日

親愛なる友へ

体の方は健康そのものです。

しかし、最近強制的に退役されましたのでそこで少し参っています。

さて、私も長く文を書くことは得意では無いので用件を書かせていただきます。

前述した通り、現在は従軍しておりませんので時間は余っています。

貴方も健康には気をつけて

貴方の友

トマ||ローベル・ブジョー

次の日には返ってきた手紙

律儀な彼は本当に付き合いやすい

「俺は、もう決めたから……迷っちゃいけない。」

そんな彼にこんな事の片棒を担がせるのは気が引ける

それでももう此処には居られない

居たらいけない

俺はあの人達の娘じゃない

麻の袋にありつたけの金貨を詰め込む

貴金属の類は別の袋に入れた

持っけていても怪しまれないサイズのカバンの中にそれを入れる。

ナイフも入れる

以前俺の時に着ていた服も入れる

日記とインクとペンも入れる

これでひと通りは大丈夫だ

最悪金があればどうにでもなる

「おやおやあ？家出ですかあ、お嬢様？」

バツと後ろを振り返るとニヤニヤしたナイ先生が

いっつもそうだ

何か行動を起こすとすぐに嗅ぎつける

隠し事なんて出来やしない

「ええ、帰るつもりが一切無い家出です。」

ふふふと気色わる（げふんげふん

色っぽい笑みを浮かべる先生

はークツソエドモン以外のイケメン爆ぜろ

（お父さんとかガブリエル先生はイケメンじゃなくて残メンだからね）

「面白そうですね。やっぱり人は自由になるといろんなことをしでかすものです。」

人は？

それじゃあまるで

「人じゃ無いみたいないいかたですね」

スツとめを細める先生は異様な雰囲気醸し出す

これは危ないものだど本能が警報を鳴らしている

「んふふ…そうですね…私は人でなしですから」

そう言った先生の影が蠢いた気がした

ダメだ、飲まれちゃいけない

どうしたらいい

殺されそうだ

.....

…いや、別にいいじゃ無いか

この身体なのだからきつと俺は1度死んでいるのだからから
もつと太々しくならなくちや

「そうですか。だからといって何も変わらないですし。いいのでは？」

「は？」

先生がキョトンとする

そりやあれだけオーラ出して脅してたのにこの反応は驚くか

「だって先生は先生でしょう？人だろうが悪魔だろうが天使だろうが神だろうが何も変わりませんよ」

ポカンとしていた顔が下を向き、そのまましゃがみ込んだ

だんだんと肩が震えて

「ぷっ…あははははははは!!」

大笑いした

「ああ、やっぱりこっちの方が面白い！」

何と比べているのかわからないが機嫌が良いことは分かった

「そうだわ、先生。先生が神様か何かならお呪いでもしてください。魔除けとか。」
頼んでから物凄く後悔した

めちやくちやイイ笑顔で

「いいですよお！じゃあ…貴方の旅路に幸あれ！」
苦難

副音声で変なのが聞こえた気がする…

「では、私はこれで！」

そう言って出て行く先生を呼び止めようと廊下に顔を出すと…

既に誰もいない

はあ…

トマトのそこ早く行く…

カバンを持って馬車に乗り込み早2日

マルセイユからリモージュまで最短距離を走ってきた

「あと1日はこのままかあ」

誰もいない馬車の中でグデツとする

誰もいないなら淑女の仮面なんてつけてられない

〈メリー……起きてよ……〉

時間があればずっとこうやってメリーに話しかけている

でも、やっぱりと言うべきか反応がない

「メリー……エドモン……」

ポロポロと溢れる涙を止めるすべなんてなく

ハンカチを目にあてることしかできない

「……………フェルナンはいつか殺す……………」

ガタン

一際大きな振動で目を覚ました

泣き疲れて寝ていたらしい

コンコン

「お嬢様、着きましたよ」

「随分と早いのね。驚いた」

あともう一日かかるはずが半日で着いたのだ

物凄く早い

「馬を褒めてやってください。頑張ったのは馬ですから。」

「そうね、じゃあこれであの子達に美味しい野菜を食べさせてあげて」

そう言つて5枚の金貨を握らせる

「そんな！頂けませんよ！お代は頂いているのに……」

「これは半日早く着いたお礼よ。それに貰えるものは貰っておきなさい。断るのは失礼

よ。」

渋々というように金貨を受け取った彼は、

「この恩は絶対返しますからね！」

そう言つて宿屋の方に歩いて行つた。

「トマー！夜遅いけど起きてるかしら！」

ドアを叩くとすぐに

「起きてるよ」

と言つてドアが開く。

ドアを開けたのは金髪の美丈夫：トマだった

数年ぶりに会うけど男前になりやがつて！

180後半くらいの身長で灰色ががった青い瞳、天然パーマのふわふわした金髪は耳にかかるとくらいの長さだ

最後に会つた時はぴっちりオールバックにしてあつたのに……

「とりあえず、夜も遅いし泊めてくださらない？」

そう言つた途端に顔が真っ赤になるトマ

やつぱお前トマトだわ

「なつ、ななな何を言うんだ、破廉恥な！第一年頃の娘が男の家に泊まるなどと！」

あー忘れてた。こいつエドモン以上のピュアピュア人間だった。

てかお前もう30になるだろ……それでこれつて……

「あら、そんな風に考える貴方の方が破廉恥なのは？」
「くくくッ！」

さらに顔が赤くなって、もう涙目になっている
やりすぎたかな…？

「取り敢えず貴方はきつと優しいのでか弱い乙女を寒空の下に放り出したりしませんよ
ね？」

「…か弱い…？」

そこだけ真顔になるのやめろよ

取り敢えず野宿嫌なんだよ

「まあ…妹弟子を放り出すほど薄情じゃありませんよ…」

「それじゃあ遠慮なく♡」

擲掬いついでに腕に絡みついてみる

「……………」

反応がないと思ったらこいつショートしてる

どうしようもないのでそのまま中に引きずって行った

俺になった日

朝食を済ませ、ゆつたりとしたソファに腰掛ける

「それで、要件とはなんですか？」

目の前の男……トマが問いかける

「もう少しゆっくりしたって良いじゃないですか。せつかちですね」

「それが家主に言う事か？」

「さあ、どうでしょう。でも、短気は損気ですよ」

湯気の上がるコーヒーを啜る

コーヒーは結構好きだ

香りも落ち着くし飲めば目が冴える

どちらかといえば浅煎りコーヒーの方がフルーティで好みだ

前世にはどちらにしる泥みたいだと言うやつもいたが……

ふう、と溜息をついてみる

「こっちが溜息をつきたいです」

本当にもう怒りっぽいなあ

「だから女の子にモテないのでしょね」

「聞こえてますよ、余計なお世話です。というか早く本題に入ってください」

あなた、いつもはこんなに押揃うことなんてないでしょう。

「…仕方ないわね。ストレートに言う事にするわ。私は軍人になりたい。その為には何だつてする。」

トマの手から滑り落ちたマグが床に落ちた

ガシャンと耳障りな音が響く

「……………貴女、婚約者が捕まったからつて気でも可笑しくしたのでは？」

「私が狂つてるように見える？」

「…いえ、そういえば貴女が突拍子も無いことを言い出して無理矢理押し通すのはいつものことでしたね。」

「失礼なひと！まあ自覚はあるけれど」

クスリと笑つてからすぐに真面目な顔になる

「本気ですか？」

「勿論よ」

そう言つてから俺はナイフを取り出して髪を切つた

「このくらい本気よ」

残った髪は頸が見えるほど短くなった。

こんな事をするとは思わなかったのかトマは目を見開いた

「分かりましたがどうするんですか？私が出来るのは軍に入るための手引きくらいですよ？」

「大丈夫ですよ、私…いや、俺は一応魔術もかじってるから見た目どうこうは問題ない。」

持っていた髪を魔術で全部燃やす

ごめんねメリー

君の髪は俺には邪魔だったんだ

伸ばせたら伸ばしてみろね

「分かりました。では着替えてきて下さい。それを見て私が判断しましょう…貴女、元々実力は申し分無いですから」

「ありがとう。俺、トマのそういうところが好きだよ」

「…はああ…私は貴女のそういうところが嫌いですね」

あはは、いけずだなあ

そう言ってドアの向こうに消えた彼女は本当に人が変わったようだった。

初めて会ったのはいつだったか：

もう十数年も経つと考えると感慨深いものがある

それこそ人形のようにだと思っていた

私は女性が苦手、確かにそうだ

けれど最初の彼女は少女というよりは人形だと思っていたので何ともなかった

しかし、だんだんと成長して女性らしくなってきたからだ

見た目だけは一級品で、顔を見て話しづらくなった

ただ、そんな物はすぐに無くなった

亡くなったと言つてもいいかもしれない

見た目がアレでも中身がバトルジャンキー一歩手前な女に湧く羞恥心は即座に死んだ

下手をすればそこらの男よりも男らしい精神をしている彼女に女性だからと剣を向けない事も出来た

それをすればおそらく死なない程度に黻られるだろうが

しかし4、5年前から様子が変わった

婚約者が出来てしおらしくなった

見た目どうりの深窓のお嬢様になった

それでも欠かさず鍛錬はしていたようだ

そしてまた、今度は女を捨てた

彼女が髪を切った時

ずきり、と痛んだ胸の事はきつと無視しなければいけない

そうしなければ、彼女を裏切る事になる

床の茶色い水たまりを見ればひどい顔をしている自分がうつる

染みて取れなくなる前に片付けなければ

割れた破片とともにこの感情も捨てられれば

どれだけ楽になるだろうか

ドレスを脱いでコルセットを外す

綺麗な靴もずつと使っていた黒いシルクのチャーカーも外す

ドレスは処分しよう。どうせなら質に入れる方が良い

靴ももう履くことは無い

それでもチャーカーは手放したく無かった

これはメリーが初めてエドモンから貰ったプレゼントだから

「これはメリーだけの物だから…」

昔着ていたシャツに袖を通し、丈の長いズボンを履いた

少しヒールのあるブーツを履いてジャケットを着る

トマの整髪料を少し拝借して髪を整える

まだ魔術は使っていないけれど取り敢えずはこれで良いだろう

「着替え終わったけど、どうかかな？」

俺の事を見たトマは一瞬だけ悲しそうな顔をした

「ええ、男に見えるので良いのでは？それにしても魔術とは便利ですね」

このままで男に見えるなら重畳だな

「まだ俺は魔術使つてないよ」

魔術を使えば俺の見た目が変わったのか驚いた顔をした

「違和感は全くなくなりましたね。取り敢えず交渉してあげますが、貴方家はどのようなのです？」

「このままここに住んじやダメ？」

「ダメです」

ケチー！ちよつとくらい良いじゃん！

まあお金はそのために持ってきたんだけど

「安心してよ。あてはあるからさ」

ドレスや靴、少しの宝石を持って来る

「取り敢えずこれを質に入れ来ようと思うんだけど良いかな？」

「どうして私に意見を求めるんです」

「…なんとなく！」

だつて君、俺が正直に寂しいからなんて言ったら笑うだろう？

《貴女にもそんな可愛らしいところなんてあったんですね》

とかさ

でもね、

君は知らないかもしれないけどね

独りぼっちはとっても寒いんだ

だから今だけは一緒にいてね

初仕事した日

船に揺られて早数日

着慣れない軍服に袖を通してブーツを鳴らして歩く

「目的地に着くのは後どれくらいでしょうか？」

少し大きめの声で聞く

この船には数人の軍人と数週間分の食料、船を操るのに十分な船員が乗っている

「ええ、後半刻ほどで着きますよ！あそこにくつつすら影が見えまさあ！」

見張り台の上にいるガタイのいい船員が教えてくれた

「ありがとう！」

満面の笑み、所謂営業スマイルでお礼を言う

赤面している男などいなかった。いいね？

海の男は周りに男しかいないからな、そういうのに走る人も多いかもしれない

いくらメリーの面影があるとしても男なんだよ

こっちははっきり女の子が好きだし

取り敢えず船室に戻ろう

ちなみに1人部屋だ

本当はもう1人いたけど…

思い出したく無いほど悍ましい事件だったね…うん

気をとりなおして荷物を纏める

これから受ける任務というのが目的地に1月留まるようなものだから荷物は多い
着替えに、ナイフ、一応の救急キット（手作り）、薬（手作り）、日記、筆記用具、お
金、保存食

特に保存食とお金、日記は見つからないようにしなければ…!

準備が終わればちょうど上官が来た

「新入り！降りる準備は整ってるよなあ!？」

「勿論です」

敬礼しないと煩い上官は本当に面倒くさい

「声が小さい！」

「失礼しました！次からは大きくします！」

こいつ難聴かよとか思いながらも表面には出さずに敬礼する

「いいだろう！後数分で目的地に着く！荷物を持って甲板に1集合しろ！」

「はっ！」

詰め終わった荷物を掴み、上官が出て行つてから甲板に行く

後ろからあの上官の怒鳴り声が聞こえるが、隣は部屋が汚かった筈だ。そのせいだろう

甲板に並び、説明を受けて船を降りる

この島での仕事はたったひとつ

【ナポレオン・ボナパルトの監視】

それだけだ

ただ監視するだけだが、周りにはみんなナポレオン達に対してひたすら陰湿な嫌がらせ

をしている

俺がするかつて？

…あの人つてうちの上客だったんだよなあ、話すのも楽しかったんだよなあ、つまりそういう事だ

俺の仕事はナポレオン達にくつついている事だった

他の仕事は上官の世話が3人、馬の世話が4人だけだった。と言つても上官が起きている間はほぼずっとナポレオン達を虐めるので一緒にいるのだが

まあちゃんと他にも軍人じゃない人もたくさんいて、お世話してくれる。

何はともあれ、お仕事のスタートだ！

「さあどうぞ、ナポレオン將軍？美味しい葡萄酒ですよ？」

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべてナポレオンに酒を勧めているのはハドソン・ローだ。一応上官だが、心の中ではこのクズは呼び捨てで構わないだろう。

「…頂こう」

明らかにドロリとしてすえた臭いがするそれを一気に飲むナポレオン
明らかに顔色が悪くなっているが、俺はここでは助けに入れない。

「ボナパルト殿…顔色が悪いです！お暇させていただきましょう！」

「おやあ？まだ食事をしていませんよお？良いんですかあ？」

話しているのは俺じゃないけどすごくイラつく。ハゲのデブ野郎と苦しんでるイケオジだったらどっちの方を持つかは明白だろう

「構わない、食事は結構だ。」

そう言つて席を立つナポレオンの後ろについて行く

廊下に出ると壁につき、足取りがおぼつかなくなる。

「何故ついてくる」

「仕事ですから」

フラフラとしながらトイレに入りひたすら吐くナポレオン

廊下を歩く使用人に声をかけて水差しいっぱいの水とグラス、漏斗を要求する

すぐに持つてきてくれた使用人に老若男女問わず惚れられた実績のあるスマイルで「ありがとう子猫ちゃん??（意訳）」と言つておく。ちなみに仕事はずっと無表情貫いてるので一瞬で墮ちる。ラクですなあ！（ヤケクソ）

「水です。飲めますか？」

ナポレオンはこちらを睨みつけ、

「…結構だ」

と胃酸で掠れた声で言う

一応今の俺は軍帽をかぶっているので目元に影がかって顔が分かりにくくなっているとだけ言っておこう。

「そのままですともつと辛くなりますよ」

「構わない」

掠れた声のまま即答する。よし、ならば強行してやろう！

ナポレオンの顔を掴んで無理やり口を開かせる。弱っているナポレオンの力では振りほどくことはできないくらいには強い力があるのでそのまま片手で口を開き、空いた手で口に漏斗を突っ込んだ。

「うあつ…！」

苦しくても我慢しましょうねーと思いつつ漏斗に水を注いでいく。グラス二杯分くらい飲ませてから吐かせるといふ事を数回繰り返す。

水しか出てこなくなったら完了。この時代にだことうするのが一番いい。ヤバイもんは吐かせるに限る！

「ゲホッ…ゲホッ…くそが」

めちやくちや睨んでくるけど俺より力弱いから怖くないんだよな…

「口の中がまだ気持ち悪いでしょう。これですすいでください」

グラスに入った水を差し出せばもっと睨んでくる。

「また私がやった方が良いですか？」

そういえば渋々受け取ってくれる。

口をすずげばすぐに立ち上がって、彼の部屋へと歩く。

彼の部屋は大きく豪華だが、先ほどの嫌がらせを見ると皮肉に感じる

俺はドアの前で監視をする。彼は机の引き出しから本を取り出して何かを書き始めた。

…腹が減った。十分我慢できる状態だが、それでも嫌なものは嫌だ。また、違う近くにいた使用人に声をかけて彼を見ていて貰う。

そのままキッチンに走って、その使用人に

「食事はまだ残っているでしょうか？」

と聞けば、ハドソン様が残っていたものを全て食べてしまわれましたとの返答。あのデブ殺してやろうか？

キッチンを少し使う許可と余った食材を分けてもらった。

貰えたのは一部が傷んだ玉ねぎと、乾燥したパン、トマトだった。

どうしよう…メニユー…パンはとりあえず乾燥してて食べづらいし…

…よし、パン粥を作るか。

まずは俺の手持ちの保存食より、干し肉を取り出して刻む。

そのまま鍋に水を張って浸しておく。次に玉ねぎの食べれる部分を薄切りにする。トマトは火で炙って皮を剥き、ペーストにする。鍋を火にかけて玉ねぎを入れる。玉ねぎが透け始めたらパンを千切って入れる。トマトのペーストを入れて煮込み塩、胡椒であじを整える。

これで完成。あとは皿を借りて盛り付けるだけだ。

お盆と皿、スプーンを借りて2人分を持って行こうとしたら先ほど、水を持ってきてくれた使用人が、ホットミルクのカップ2つをお盆に乗せてくれた。

「ブランドー入りです。よかったですらどうぞ」

なあ君さ、良かったら言うなら無理やりお盆に乗っけないと思うの。などと野暮なこととは言わずに

「ありがとう」

とあつまーい顔で微笑んでから素早く去る。

…変なもの入ってないよな？

心配になったからどちらでも少しずつ飲むけど、なんともなかった。安心、安心。

部屋に戻り、使用人にまた同じく老若男女問わ（ryで微笑んで耳元でありがとうと囁き、真つ赤になって後ずさりしたら目を細めて艶やかに見えるように笑う。そうすると首まで真つ赤にして走っていく使用人。

男であの反応なら女の子にしたらどうなるんだろ。

ナポレオンは机で未だに何かを書いている。その横の空いたスペースにお盆を置いて、ベットの横の椅子を持つてくる。

「何をしている」

「一緒に食事でもどうかと思いましたが。」

不服そうなナポレオンを無視して軍帽を外して側に置く。

「安心してください。変なものは入ってませんよ。」

湯気のアがるパン粥をナポレオンの近くに置き、自分の分をスプーンで掬って食べる。あつつい。そつと息を吹きかけて冷ましてからそれを口に突っ込んだ。…ナポレオンの。

ナポレオンは目を白黒させている。スプーンを引き抜いてから、

「美味しいですか?」

と聞くと、驚きつつも首を縦に振ってくれた。

皿をナポレオンのものと交換してから食べ始めれば、俺が毒味もしているからか、食べてくれた。ホットミルクも目の前で一口飲んでから渡せばすぐに飲んでくれた。

なんだろう…こう…餌付けしてるような…この感情…これが母性か…

食事が終わり、ナポレオンの警戒心も和らいだようなので、少し会話を試みた。

「自己紹介がまだでしたので、今させていただきますね。私の名前はメル。メーガス・グランツです」

これはトマと一緒に考えた偽名だ。

メルだけだとバレル可能性があるからね。

「分かった。ところでメル、君はどうして俺の利になる事をする? バレれば捕まるだろう?」

「何のことでしょう? 私はただ貴方に無理やり水を飲ませては吐かせていただけです。料理だってただ作りすぎただけですよ」

真っ直ぐに目を見て話せば、すぐに彼から笑みがこぼれる。

「そう言うことにしておこう。とりあえず助かった。礼を言おう。」

あれを飲んだあとは吐くだけじゃなく下痢までするんだと苦笑いをするナポレオン。
「礼には及びませんよ。ただ少し、恩を返そうかと。」

「恩？」

ええ、そうです。と答えて、にっこり笑いながら彼の椅子の背もたれに手をつけて、顔を近づける。あごを人差し指で撫で上げれば、彼の顔が引きつる。笑いそうになるが、ここで大笑いすると負けだ。耳元でそつと、

「私のことを忘れてしまいましたか？」

と声をメリーの方に戻して囁く。

笑いながら顔を離せば、驚きに満ちた顔をするナポレオン。クスクスと笑ってから、
「それではお休みなさい。また明日」

と言つて、食器を持って部屋を出て行く。

彼が覚えていたようで良かった。

1ヶ月間は独りぼっちにはならなくて済みそうだ。

気に入られた日

ふと、目を覚ました

ベッドから降り、カーテンを開く

まだ日が昇っておらず薄暗い

窓を開ければじつとりした風が吹き込む

勝手に目が覚めたのは久しぶりだ。最近では彼が日が昇ると同時に起こしに来ていたからな。

着替えを済ませてもまだ日が昇らない。暇を持て余す事が最近は無かったから何をすべきか迷う。書き物は昨夜に書けることは書いてしまった。

ならば逆に彼を起こしに行くというのも一興だろう。

一度思いつけばそればかりを考えてしまう。

「……よし」

決めたらば即座に行動するのが俺の信条だ。

廊下は明かりが無く、何も見えない。

燭台を片手に彼の部屋へと歩を進める。

♪……………♪

微かになにかが聞こえる。歌だろうか？

近づいていくにつれて音がはつきりと聞こえる。鼻歌のようだ。

♪……………♪

…違和感を感じる。良く通る綺麗な音だ。しかし、些か響きすぎているように思える。いや…響いているのか？複数の音の様な…

R u ……♪……………♪

~~~~~♪~~~~~♪  
 Ah~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪~~~~~♪

部屋の扉の前に立った。明らかに1人の声ではない。3人の男女がハミングしている様だ。だが、彼にそこまで親しい者は居ただろうか？使用人か？ただ、もう起きてしまっているというのは確定の様だ。それでもこの扉を開けるだけでも驚かすことは出来るだろう。

ガチャリ

扉を開くと目を開けていられないほどの強い風が吹いた。燭台の灯りは消えてしまっただろう。目を開ければちっとも荒れていない部屋の真ん中で服を着る途中の彼がいた。白磁の肌の身体は鍛え上げられており、しなやかな筋肉のついた上半身が惜しげも無く晒されている。

目が合うと、口元を緩めて

「…貴方は覗きの趣味でもあるのですか？」  
 と、揶揄ってくる。

あまりにも整った彼の顔で言われるとどきりとした。それを自覚しているのか、いないのか、周りの人間をいつも弄んでいるのが彼らしいと言えるのかもしれない。

彼は

悪戯を好む少年の様であり  
人を誑かす毒婦の様であり  
荒々しい益荒男の様であり  
慈愛に満ちた聖母の様だ

初めに見た時は冷たい氷の様な奴だと思った。

しかし、俺の口に食事を突っ込んだ時は悪戯に成功した子供の様だった。その後こちらを見る目は優しい母親の様で、居心地が悪かったのを覚えている。暇になると使用人に（男女問わず）声をかけて誑かしているのも見かけた。夜になると外でひっそりと鍛錬しているのも幾度か見かける事が出来た。

彼の本質がどれなのかも分からない。ましてや本当に男かも怪しい。  
けれどそれでも俺は彼が彼女が気に入っている。

これだけ人気に入られやすく、意外にも人望が厚い彼が全盛期に居たのならば何か変わっていたかもしれない。

いや、そんな夢物語はあり得るはずがないか。  
俺と彼が共に戦場に立つなど…

不可能なのだ

だが…

そういえば

俺の辞書には『不可能』って奴は居なかつたな



軍のお上からの推薦だとかいうクソガキがこちらに来るといふ知らせを受けた時、

上に気に入られたクソガキという会ったことのない奴を想像しては苛ついていた。

只でさえイラつく原因のナポレオンが近くにいて、いびつてストレスを発散出来ても追加でストレスの種が増えるとか最悪だった。

戦場に出た事もないクソガキがこの島に来てひと月働かせる？その後には今度はずぐ出世？なんなんだよクソが！

軍に入つて俺の下につくなら殴つたつて構わないだろう。

そう思いながら会ったクソガキは、身長が高く、無表情で、軍に入るにしては細かった。やっぱリスカした奴だとか思い、イチャモンをつけた。だがそいつは全て無視しやがった。ムカついて掴みかかったら、全て避けられて、終いには

「どうかなさいましたか？」

とにこやかに笑つて言われた。その時はカツとなつてやつてしまった。

その後、会話をするうちに欲しいと思つた。

男に惚れるなんてありえないと思つていた。だが、冷たくも美しいあの男を自分のものにしたと思つた。だからあいつの前ではナポレオンのクソ野郎をたつぷり絞つた。

だからきつと強い俺を気に入ってくれるだろう。

ああ、楽しみだ。

あれ？なんかさぶいぼが：

最近、クソデブのクソ野郎に付きまとわれて女の子口説き辛いと迷惑してる

ずつとこつち見てるし、空き時間にはすぐ寄つてきて腰に手を回そうとしてくるのが

本当に不愉快だ

あのクソ野郎には声かけてないんだけど付きまどつてくる

俺としてはフェルナンの方がマシ……いや、マシも何も変態はまず第一にお断りだわ  
そういえば

今日は珍しくナポレオンが自力で起きてきた

いつも通りに日の出前に起きて、鼻歌を歌いながら着替えていた  
いつも、鼻歌を歌っているとナニカが部屋に入つて来る。

鏡にも映らず、触れられもしない。けれどそこにナニカが居る。

実害は無く、見えない彼らは一緒にハミングして、気がすむと帰っていく。

ナイ先生がアレだったから、その類の何かだろうと別に怖くはなかった。

ただ、今日はハミング中に邪魔をされて怒つたようで、彼に風をぶつけて帰って行つ  
た

先生から俺のことを聞いているのか、人に害になる事は一切しない様だ

邪魔をした本人は何が起きたか分からず、ポカンとしてから、

こつちを見て顔を赤くした。

魔術がかかっているから安心だが、今は着替え中で上裸だった

物凄くマジマジ見てくるナポレオンを揶揄しつつ、着替えて、いつもと同じように過ごした。

後数日で帰ることになっているので、少し寂しいがこれもエドモンとメリーの為なら我慢できる。

時間がかかるけど、待っててね

俺、頑張るからさ

## Une question①

ニヤル「どうも皆様、お久しぶりに御座います。私、お嬢様の家庭教師をさせていただいておりました、ナイと申します」

「メインのMCをさせて頂く事になりました」

ニヤル「実況、解説には御三方が来ております。自己紹介をお願いしますね」

リアム「リアム・モンテゴだ。メルセデスの父親で、モンテゴ商会の2代目社長をしている」

ギャグ野郎シルヴィ「ガブリ」「シルヴィと申します。メルセデスの母親で、社長補佐をしております。どうぞお見知り置きを」

ガブリエル「∴ガブリエル・グラントだよ。リアムの幼馴染で、フランス軍に入っているんだ。はつきり言ってる僕はシルヴィが苦手だ」

ニヤル「ありがとうございます。皆さま40過ぎなのに若々しいですねえ」  
「それではお次はゲストの紹介です。どうぞ」

竹「どうも。作者の竹俣兼光です。高校生です。ゴリラとか、眼鏡取ったら指名手配犯とか言われます。推しはアステリオス、苦手なのはドリカムおじさんです」

エミヤ「作者友人①のY田…の代役のエミヤだ。チャームポイント…?…:…眼鏡と前髪だそうだ。推しは…衛宮家で、苦手なのは同じくコロンブス」

ニキ「作者友人②のI場の代役のクー・フリーンだ。チャームポイントお?えーつと…サラサラな髪らしいぜ。推しは、小つ恥ずかしいなこれ…クー・フリーン、sつて書いてあるな。嫌いなのは…死因:チーズ?メイヴじゃねえか」

ニヤル「見た目は可愛らしいもちなのにこの声なのは違和感しかありませんね」

ガブリエル「ねーリアムー僕そんな事より甘い物食べたい!仕事しないで構つてよお  
!」

リアム「黙れ。一番の稼ぎ時に引つ張つて来たのはお前だろう。」

ニヤル「少し早いですがガレット・デ・ロワならありますよ?」

ガブリエル「ありがとー貰うね!…:…残念、ハズレだー」

エミヤ「では私も頂こう」

ニキ「俺はそれより酒が欲しいぜ」

シルヴィ「じゃあ私も失礼して…」

エミヤ「おっと、私が当たりか」

竹「どうでもいいから早く進めよう？」

Q 1, I場より

フェルナンの変態さが10歳にしてはやり過ぎでは？

A,

知ってる。

反省も後悔もしてない。

だってその方が面白いでしょ？

Q 2, Y田より

推しはまだか？

A, 待て、しかして希望せよ

Q 3, "

クトウルフ関係の解説寄越せ

A,

ニヤルラトテプ

貌が無い故に千の貌を持つ邪神

化身いっぱい。

悪戯っ子で気分屋。

土を司つてたはず。

今回は黒い男 The Black Man イメージしました。

名前はナイ神父から。

透明なナニカ

トルネンブラの事。

あんなに優しく無い。

生きた音で、クトウルフの主神のお守りをしてる。

ニヤルの配下。でも邪神。

気に入った音楽家を信者にする。

あとはggれ！

Q 4, //

他、type moon作品とコラボせんのか？

A, GOは確定だけど他は気分。



Q 5, 饅頭ともち様

16話について途中からメルメルの存在感消えてるのが気になるところ。

ニヤル「これは私が答えましょう！」

「彼女メリを誑かすのには彼メルが邪魔でした。なので私はまず、彼を出てこれないように押し込めました。」

「それでも無理やり表へ出ようとするので彼女と同化し始めてしまいました。」

「混ざって1つになった彼女彼は願彼い事を言いましたね？よくそれを思い出して下さい。」

「彼女だけの願彼いならば幸せになるのは2人です。彼は、願メルセテスえば自分が居なくなる事を理解していたのでたった1人の愛彼しい人のために願彼ったのです」

Q 6, スペアカバー様

何人墮とす気だ!?

A, いっぱい

男も女もモンペにしようとしてます。

作者がおっぱいも筋肉も好きだからね！

圧迫祭り！

でも腰が一番好き。

脚もお尻も良いよね。

## Q7、樹の根様

歌つてたのはニヤル関係？妖精伝説？

A、ニヤル関係つすね

妖精伝説してもいいけど神秘の薄れた世界では…ねえ？

ガブリエル「あれ？終わりなの？僕ら出番無し？」

シルヴィ「貴方は帰って良いですよ。私とリアムでこの場を繋いでいますから。」

リアム「…仕事…」

ニヤル「無いですか？質問」

竹「無いんだよねえこれがさ。だから取り敢えずは裏話なのでやろうかなと」

竹「まずはこれ。トマトについて。」

ガブリエル「トマがどうかしたの？」

竹「ただ単にお前らと違って実在する人物なだけ。」

シルヴィ「あら。すごい人なのかしら」

竹「後々元帥になる人。」

ガブリエル「へー」

竹「おまいら知らんだろうが一応c o o lな旦那と同じ階級だぞ」

エミ&ニキ「……………(嫌そうな顔)」

竹「代役働け」

エミヤ「…へー」

ニキ「そーなのかー」

竹「言いたい事があるなら言ってみろ」

ニキ「将来のキチガイか？」

エミヤ「どうせ発狂するんだろう？」

竹「……………」

エミヤ「おい。」

竹「よく理解しておいでですね！次！」

「メルの偽名について！」

ガブリエル「メーガス・グランツだっけ？」

リアム「グランツはどうせブランドだろう。俺の娘なのに…」

ガブリエル「トマトと一緒にだったからね。仕方ないね。僕の弟子が優秀で嬉し痛い！リ

アム！シルヴィが蹴った！」

リアム「よくやったシルヴィ」

シルヴィ「私から旦那と娘を取ろうとする輩は……?」

ニヤル「おや?でしたらあなたの方がいいのでは?」

シルヴィ「あら、良いわね」

竹「物騒な話は中断して。まあぶつちやけメーガスはその場の思いつきみたいなものです。良い名前浮かばないなーとか思いつつ隣の奴と話してて、ハリポタ話した時に動物擬きの話になった結果。アニがアニマル的なのだろうしじゃあメーガスはく擬きのなのかな?擬き……ええやん!メーガスにしたろ!ってノリです」

「じゃあもう一つ、メルの身体の魔術について。」

ニキ「なんかあんのかよ」

竹「いや、魔術はナイ先生直伝だし……無茶してもいいかなって……」

エミヤ「何が言いたい」

ガブリエル「待って、なんか僕予想ついたよ?やめてね?」

リアム「早く終わらせろ」

竹「あの……ね?邪神直伝だし?身体作り変えるとか出来そうだよね?」

ニヤル「端的にどうぞ」

竹「バベルの塔出来ても良いd……グフツ」

エミヤ「潰れ……」

シルヴィ「そこをどいてくださいな。その生モノの処分が出来ません」

ニヤル「落ち着きましよう。Y田様が潰れています。旦那様ですよ。書類ぐちゃぐちゃになってます」

ガブリエル「さすがに僕も怒るよ？」

ニキ「フアー——ww大変だなあww」

〜小一時間後〜

ニヤル「解散でいいです？」

ガブリエル「べつにいいよー」

リアム「構わん」

シルヴィ「構いませんよ」

エミヤ&ニキ「周回周回周回周回周回周回周回周回……」

竹「頑張れ、超頑張れ、特にニキ」

に「それではこれで第一回質問返答コーナーを終わりにしましょう。皆さまありがとうございました」

## 運命を信じた日

薄暗い路地裏

糞尿は垂れ流し

腐った死体が転がっている

生きた者は病を患い、精神を患う

けれど

あああ—————

おぎや—————

そんな所でも

新しい生命は生まれる

カツン…カツン…

足音が響く

誰かが来た

誰だろうと構わない

私はこの子を生かすためには何だっしてやる

死体を漁って見つけたナイフを握り、足音に向かって走る

闇に紛れる事なんてもう慣れてしまった

綺麗な服を着た若い男だ

身包み剥いで売ってやろう

どうせ死体が一つ二つ増えても何も変わらないのだから

無防備な背中にナイフを振りかぶる

「…丁度いい所に来ましたね。マドモワゼル」

距離を見誤ったらしい

ナイフはギリギリ男に当たらなかった

もう一度…

そう思ったけれど

振り向いた男の腕には赤ん坊が一人抱えられていた

「マドモワゼル、貴女は困っているように思える。私も同じです。ここはひとつ助け合  
いとはいきませんか？」

「テメエは何言ってるんだ」

「そのままですよ。今、私は乳母を探しているのです。貴女にお願い出来ませんか？」

悪い話ではない

だが、私に頼む理由がない

「何故？私にメリットはあってもお前には無いだろ」

「そうですね…ふむ…『運命』という奴を信じてみようと思ひまして」

「馬鹿か？」

第一、その赤ん坊だってお前の子じゃないだろう。何故そんな汚い赤ん坊を拾う」

「言つたでしょう？運命を信じてみたいと」

「お前は真性の馬鹿だな。いいだろう面白いから受けてやる」

心底面白い

改めて見た男は背が高く不思議な金髪だった。青い目はキラキラとしているがどこ



か暗さがある。

「私……いえ、俺はメーガス・グランツ。メルと呼んでくれると嬉しい」

「わかったぜメル。私はライリーだ。この子はミア、可愛いだろう？ その子はなんて名前にするんだ？」

ぴたりと動きが止まった

いや、空間ごと動かなくなったような気がした

人好きする笑顔を浮かべていたメルは表情が抜け落ちた様に思える

「……名前……そうだな……俺の子なんだ……でも……彼女の子だ……なあ、アルベール」  
虚ろな目で

弱々しい声で

それでも愛おしそうに

その子の名前を呼んだ

「この子はアルベール。俺の愛する息子だ」

もう一度その子の名前を呼んだメルはとても幸せそうだった

長い船旅を終えて、家に帰ることが出来る

仕事が終わって帰る時にはこつそりナポレオンに手紙を残して来た。

読み終わったらすぐ燃やす様に書いておいたが、心配だ。

まあどうにでもなるだろう！

町外れにある家（屋敷と言っても過言ではない）に帰ろうと町の中を歩いていると、赤ん坊の泣き声が聞こえた。

いつもの様に捨て子だろうとは思いますが、何故かふらふらとそちらに足が向かってしまった。

薄暗い路地裏に布に包まれた小さな赤ん坊がいた

捨てられた直後なのか、汚れたり虫が集っていたりしない

そつと抱き上げるとすぐ泣き止んだ

後ろからする微かな衣擦れの音がそこに誰かいる事を教えてくれた

半歩前に出ると背中すれすれを何かが通つたらしい

そのまま振り向けば長く、燃える様な赤毛の女性が片手に赤ん坊、逆の手にナイフを持って立っていた

「…丁度いい所に来ましたね。マドモワゼル」

ふと、彼女がいれば一人にはならないのではと思った

「マドモワゼル、貴女は困っているように思える。私も同じです。ここはひとつ助け合いたいと思いませんか？」

それに、軍にいる俺は殆ど家に帰ることが出来ない。ならば誰がこの子の世話をするのか？誰かに乳母をしてもらうしかない

「テメエは何言ってるんだ」

彼女の抱えた赤ん坊は元気そうだ。彼女自身、少し痩せているものの、ここにいる人間よりはよっぽど健康に見える

「そのままですよ。今、私は乳母を探しているのです。貴女にお願い出来ませんか？」

それだけじゃない。彼女の思い切りの良さと、ある程度の実力も選んだ理由だ

「何故？私にメリットはあってもお前には無いだろう」

確かにそうかもしれない

けれど、やっぱり

「そうですね……ふむ……『運命』という奴を信じてみようと思ひまして」

「少しだけ、『運命』や『神様』というものを信じたって面白そうだと、ただそう思った馬鹿か？」

第一、その赤ん坊だってお前の子じやないだろう。何故そんな汚い赤ん坊を拾う」

「言つたでしょう？運命を信じてみたいと」

「お前は真性の馬鹿だな。いいだろう面白いから受けてやる」

いくら罵られても構わない

それでも今の俺は貴女の子供母親に向ける愛愛を、彼女の代わりメリーに注いであげて欲しいと思つた

「私……いえ、俺はメーガス・グランツ。メルと呼んでくれると嬉しい」

「わかつたぜメル。私はライリーだ。この子はミア、可愛いだろう？」

勇敢な人 聖母  
ライリーとミアとは、本当に運命を信じるものだとしみじみ思う

「その子はなんて名前にするんだ？」

ごく、当たり前のことだ

子供に名前をつけるのは

ただ、思いつかなかつた。これ以外の名前は

やっぱりこの子の名前は決ま知つてている

「…名前…：…そうだな…俺の子なんだ…でも…彼女の子だ…なあ、アルベール  
きつとこれは変えられない

メルセデスの子はアルベールだという事

愛する我が子だという事

「この子はアルベール。俺の愛する息子だ」

この子が俺の息子運命だという事は

## 音楽の日

「メーガス・グランツ。貴方を陸軍中将に任命します」

厳粛な雰囲気の中、ゆっくりと前へ出る

膝をつき、こうべを垂れる

「慎んで拜命致します」

王宮を去ろうと歩を進める

何処からか悲しさを感じるメロデーが流れている。俺はそっちが気になり、目的地を変えた。

音の聞こえる扉を見つけ、そっと開く。そこではこちらに背を向けて誰かがピアノを弾いている様だ

これは…きらきら星、だろうか

ピアノの音が終わり、彼はひと息つく様だ。ほぼ盗み聞きだけれど、聞かせてもらったならば感想を言うべきだろうか。ほらそこ！うわあとか言わない！別に覗きじやないんだし！

拍手をしながら、

「とてもお上手なですね」

と、当たり前障りないコメントを伝える。俺がいるとは思っていなかった様で、とても驚いた様子だった。

「それはどうも、ありがとう。いつから君は居たんだ？」

「そうですね、俺がここに来たのは五分前位です」

ニコニコ悪びれなくしていれば、流されてくれるだろう、たぶん

「そうか…それで君は…確か…グラント少将だったか？」

おらつて有名だったんけくそげな事知らんかったばい…

嫌だなー！エセ方言になるくらい嫌だなー！なんか知らんけど街歩くたびにヒソヒソされてるんだよなー!!!

やだあ…なんでえ？ちよつと軍に入つて2、3年で少将…じゃねえや中将になつただけやん！きつと先生だつてやつてるよ！

「ええ、俺はメーガス・グランツ。正しくは先程中将の位を頂きました」

「おお、それはおめでとう。私はアントニオ・サリエリというしがない音楽家さ」

アントニオ・サリエリ？マジで？モノホン？

それを聞いた瞬間、彼の手を即座に握り締めた。うん、もう無意識だね

「本当にアントニオ・サリエリですか!?俺、貴方の事大好きなんです！オペラ全部見ましたー！」

グイグイいったにも関わらず、少し驚いた後にはにかむサリエリさんまじサリエリさん

「有り難いね。こんな私の事を気に入ってくれるなんて。しかも今話題になっている軍人さんが」

おろ？話題？

「話題つて…？」

ポロツと口に出てたらしい。サリエリさんが教えてくれた

「知らなかったのかい？確か…物凄くイケメンで、物凄く強くて、何でもできて、凄く優しい…とか。最近君をモデルにした絵が人気になつてみたいだ。」



はへ？何その漫画のキャラクターみたいな奴？俺？

「嘘ですよそんなの。俺は強くないし、カツコよくないし、全然優しくないし、何にも出来ないですから。」

だって友達一人すら、自分の半身でさえも助けられない奴が強いはずないでしょ  
「そんな事ないさ、取り敢えず君が物凄くイケメンなのは私が保証しよう。」

ええー本当にござるかあ〜？

「きつとモーツアルトの方がイケメンですよ」

”モーツアルト”と聞こえると、サリエリさんの肩が震えた。だんだんと震えは大きくなり、やがてしやがみこんでしまった。

「……い……私は……ヴォルフイを……」

「サリエリさん!?!」

彼の瞳からポロポロと涙が溢れる

ただ、謔言の様に

「私はヴォルフイを殺していない」

と呟き続けている

「落ち着いて下さい、サリエリさん」

同じようにしやがみこみ、肩を抱く

「貴方がモーツアルトを殺していないというならば、俺は貴方を信じます」

子供をあやす様に背中や頭を撫でる

「たとえ貴方がモーツアルトを殺したと言つても、俺は絶対に貴方は殺していないと信じます」

「すまない。見苦しい所を見せて…」

目元が赤いサリエリさんは少し気まずく思っている様だ。まあそりやそうさな。自分の半分も生きていない様なガキの前で泣いたらそうなる

「いえ、気にしてませんよ。誰にも言う気は無いですし」

正直、泣いてるのを見て嗜虐心が（げふんげふん可愛かつ（ん”ん” つ何でも無いよ

「…その…さっきの事は本当かい？」

さっきの事？さっきつて？

「私の事を信じると…」

「どうして初対面で嘘つく必要があるんです？」

ギョツとサリエリさんが抱きついてくる。頬に髭が当たってチクチクするけど、でも

それが心地よく思えた

「…ありがとう…」

「ふふ…どういたしまして！」

ふふ…というかんふふ…っていう笑いだけど、気持ち悪いと言われなかったしいいよね？内心思ったりしてないよね？

少し、彼のことを思い出していた  
彼が死んでから二十数年経っている

私の可愛い教え子

”私が殺した”教え子

ヴオルフィの作った曲を弾く

鎮魂歌レクイエムから始まり、ピアノ交響曲、オペラ

最後にきらきら星を

弾き終わり、鍵盤から手を離すと後ろからパチパチと手を叩く音がした

「とてもお上手なのですわね」

柔らかな声が鼓膜を震わせる

気づかなかつた。あまりピアノに集中し過ぎるのはよく無いな

「それはどうも、ありがとうございます。いつから君は居たんだけ？」

振り返れば、ニコニコとした美しい青年がいた。ヴォルフィと同じくらいの背丈の青年は、子供の様だった。ただ、ヴォルフィの様な悪戯っ子ではなくてどちらかというと優等生の様だ

「そうですね、俺がここに来たのは五分前位です」

ああ、この笑い方はヴォルフィそっくりだ。悪戯をして、怒られる時にこんな顔をしていた。

どこかで彼を見たことがある様な気がする

「そうか…それで君は…確か…：グランツ少将だったか？」

思い出せば、最近貴族の間だけでなく庶民の間でも噂される様な有名人だと気づいた。軍に入つてすぐに少尉になり、無茶苦茶な事を仕出かし続けて3年程かからず少将になった化け物らしい。正直最初はゴリラを想像していたが、パレードで見た時にこんな

細いとは思わなかった。今でも自分の愛馬が怪我をしたからと担いで来た噂は信じていない。彼の愛馬は他の馬のふた回り以上大きかった。キメラだといわれても信じる

「ええ、俺はメーガス・グランツ。正しくは先程中将の位を頂きました」

「おお、それはおめでとう。私はアントニオ・サリエリというしがない音楽家さ」

まあそれなりに知られてはいるが、彼の様な有名人が知っている筈が無いだろう

そう思ったが、思い込みだった様だ。勢いよく手を握られ

「本当にアントニオ・サリエリですか!?俺、貴方の事大好きなんです!オペラ全部見ました!」

鼻が触れ合う程顔を近づけてきた。

近くで見た彼の瞳は澄んだ青色で、太陽の光を浴びた海の様に輝いていた

「有り難いね。こんな私の事を気に入ってくれるなんて。しかも今話題になっている軍人さんが」

自分の事に頓着しないのか、噂を知らないらしい。コテンと首を傾げている

「話題って…?」

思わずといった様に漏れ出た言葉に答えてあげる

「知らなかったのかい?確か…物凄くイケメンで、物凄く強くて、何でもできて、凄く優しい…とか。最近君をモデルにした絵が人気になってるみたいだ。」

「嘘ですよそんなの。俺は強くないし、カッコよくないし、全然優しくないし、何にも出来ませんから。」

即答だった。

「……だって友達1人……助けられてない……」

吐息の様に弱い声だ。こんなに近くでなければ聞き取れなかったかも知れない

「そんな事ないさ、取り敢えず君が物凄くイケメンなのは私が保証しよう。」

此方を疑っている様な目線で、

「きつとモーツアルトの方がイケメンですよ」

何の悪気も無い言葉だった。けれど、”モーツアルト”と聞いただけで震えるほど追

い詰められていたらしい。

「……て……い……私は……ヴォルフイを……」

「サリエリさん!?!」

溢れる涙を止めることが出来ない

周りからずつと「お前がアマデウスを殺した」と言われ続けた

あまりに長く言われて、自分でも自分を疑い始めた

「落ち着いて下さい、サリエリさん」

子をあやす母の様にそつと抱きしめて、ゆつくりと白い暖かな手が頭や背を撫せてゆ

く

「貴方がモーツァルトを殺していないというならば、俺は貴方を信じます」

「たとえ貴方がモーツァルトを殺したと言つても、俺は絶対に貴方は殺していないと信じます」

今は彼の優しさを信じて縋る事しか出来ない。

「すまない。見苦しい所を見せて…」

涙も止まり、顔を上げれば色の濃くなつた肩が目に入る。ああ、自分は六十も過ぎて何をしているのだろうか。自分の半分どころか下手すれば三分の一位の若者に縋つて泣くなど…

「いえ、気にしてませんよ。誰にも言う気は無いですし」

屈託のない笑みが逆に心に刺さる事を彼は知っているだろうか

話を少しでも変えようと、話かけてみた

「…その…さっきの事は本当かい？」

また、コテンと首を傾げた。どうして彼はこうも幼い行動が似合うのだろう。

「私の事を信じると…」

「どうして初対面で嘘つく必要あるんです？」

本当に一瞬で答えてくれた。ただ一人だけでも信じてくれている人がいる事を知れば、本当に楽になる

また潤み始めた瞳を隠すために彼の首筋に顔を埋める

「…ありがとう…」

「ふふ…どういたしまして！」

何かお礼をしたいと言えば、

「俺の友人先生になつて欲しい…じゃダメですか？ピアノを教えて欲しいんです」

こんな老人が教えられる事なんて無かつただろうが、彼と過ごす時間は素晴らしかつた

「私は…君の様な教え子友人がいて…幸せ者だ…」



最期の時でも、他の教え子たちが信じてはくれなかった

「私はヴォルフイを、殺してなどいない」

彼だけは…

「勿論、知っています。その時は俺は産まれていないけど、それでも分かります。だってサリエリ先生は嘘つけないもの。先生が俺のお菓子こっそり食った後なんて挙動不審になつてからすぐに謝りに来たじゃないですか。そんな人がこんな大きな嘘を死ぬまで吐き通すのは無理ですよ」

ただそれが嬉しかった

なんて無い事の様に言つてくれた

もう尽きる命だが、天国でもいい。地獄でも構わない

もう一度彼と過ごす事が出来ればとても嬉しい

幸せな時間をありがとう

# 奪い取る日

銃声が鳴り響く

兵士の雄叫びが響く

耳を劈く悲鳴が響く

汗の匂い

火薬の匂い

血の匂い

全部が混ざってむせ返る

さつきまで隣で話していた奴はもう冷たくなっている

さつきまで笑ってた奴らは血の海に沈んだ

さつきまで震えていた奴はおかしくなった

死臭と

狂気と

恐怖が

全てを飲み込んだ混沌とした場所

戦場とはこんな物だ

「いらつしやい兄さん！何を飲むんだい？」

ガヤガヤとした喧騒の中でもよく聞こえる声だ

「ふーむ…取り敢えずエールにしようか！」

古びたローブを羽織り、如何にも旅慣れしている様な青年だ。

「あらくおにーさんイケメンね♡私がお酌してあげよつか?」

「キヤー♡本当にイケメン!私がお酌するわー!」

「えー貴女達よりも私の方がいいわよ、ねーお兄さん!」

「本当?でも俺、こんな可愛い子達に囲まれたら緊張してお酒の味分かんなくなっちゃ  
う」

「「いやーん!!可愛い〜!!!」」

少し眉根を寄せて上目遣いをすれば女達は黄色い悲鳴をあげる  
クスクス笑ってカウンターに座れば周りの男が声をかけてきた

「よお、兄ちゃんモテモテだなあ!かあ〜っ!羨ましいぜ!」

「あんたどっからきたんだい?」

「俺はフラフラ色んな所旅してるね。この前はフランスだったよ」

ドンツと大きな音でジョッキが置かれる

「うへえ〜フランスなんてクソ喰らえだね!」

「そーだ!あんな気取った奴らの鼻っ柱叩き折ってやりたいぜ!」

注文したエールを受け取り、ちびちびと飲みながら

「そーいや俺聞いたけどさ、今度フランスと戦争なんだろ?」

「ああ！俺が指揮をする事になつてゐるんだ！俺たちがあんな弱小国に負けるはずがない！」

誇らしげにする男の顔をジツと見つめる

「そつか、じゃあ安心だね！」

「命令を下す。」

メーガス・グランツフランス陸軍中将

これより、1万の兵と共にアルジェリアへ赴き、侵略して参れ！」

何を馬鹿な事を言っているんだと怒鳴りたいが、シャルル10世に怒鳴る事など出来はしない

「O u i 了解 m o n s i e u r .

必ずや貴方様に吉報をお届けします」

淡々と

唯、淡々と

命を刈り取ってゆく

将が前に出るのは愚策だと笑う敵は、笑いが恐怖へと変わった

少し前に見た顔を探す

共に酒を飲み

共に笑い

共に語り合った

ひとりの男

だがそんな物は仮初めでしかない。ただ、一番情報を持った者である。ならば殺さず

に捉えねば

敵にかける情けなど存在していない

口元が歪に歪む

「J e l , a i t r o u v e .」

兵を切り裂いて、前に立つ

「ひいーく、来るな！化け物め！穢れた悪魔め！」

ニコニコと笑って、自慢げに話していたあの顔はもう痛みと死に対する恐怖で染まっている

「首を振るだけで答えろ」

それを言えばガクガクと壊れた玩具の様に首を縦に振り出した

「お前が指揮官だな？」

ピタリと止まってから、一度だけ縦に首を振った

「お前より情報を持った奴はこの戦場にいるか？」

次は横に振る

「そうか。じゃあ、殺しはしないでおこう」



あからさまにホツとした顔になった。こいつは分かっているのか？情報を持った奴が自分しかいないなら、拷問されるのだと分かるだろうに

「こいつを捉えて連れて行け」

「はっ！」

部下に任せて、自分は愛馬に乗って敵を踏み潰しに行く。彼女は厩で暴れまくって、手が付けられないと同僚からの愚痴を聞き、面白半分で会ったら意気投合した。大きな黒毛の雌馬だ。この驛馬の名前はカージユ男という。馬だろうが人間だろうが容赦なく踏み潰すヤベエ馬だ。

さて、悪魔らしいんでね。それらしく暴れて来ようか、なあ相棒？

一際大きな嘶アッピきが殺戮アッピの合図になった

「ひいいあああああ”あ”あ!!!”!!!痛い、痛いいいいい!!!」

頑丈な鉄格子の向こうから悲鳴が聞こえる

「お疲れ様!どお?情報吐いてくれた?」

「メーガス中将!…いえ、悲鳴をあげるだけで情報は全く…」

そう答える彼の手元を覗き込めば、何も書かれていない報告書が握られている。

「あ”あ”あ!!!”あ!!!やめてくれ!もう嫌だ!!!」

あれだけ叫ぶ割には情報を吐かないとは

「一旦拷問<sup>クワシ</sup>中断しようか。」

「しかし…」

「この後は俺がちよつとやってみるね。」

鉄の扉を開いて、声をかける

「一度休憩しないかい?俺が責任取るから」

「…了解しました」

ぞろぞろと部下を引き連れて休憩する為に、食堂へ来た。

「丁度昼時だし、小腹もすいてるだろ？」

各々、食べたい物を注文して食事を始める。

俺も昼飯を食べる。さっさと食べ終えて、料理長に話しかける。

「やあ、料理長。今日のご飯も美味しかったよ。」

「あらそお？なら良かったわあゝこんなカワイイ子に褒められたらアタシつてば調子に乗ってなんでもしちゃうかも♡」

体をクネクネとさせているのは少し長い金髪を後ろでキツく結った筋骨隆々な大男だ。それでも心が乙女なら、ちゃんと女性らしい扱いをするのが俺クオリティ。あとその方が色々融通利かせてもらえるし

「流石料理長！話が早いね。ちよつと譲って欲しい物があるんだけど…」

「いいわよおゝ何が欲しいの？」

「……なんだけど」

「あらそんなもの？ちよつと待っててねん、今持ってくるから。」

「やっぱり良い女は懐が広いね！」

「んもう！貴方が既婚者じゃ無かったらアタシが意地でも貰ってたのにー！」

そう。俺は既婚者になったのだ。まあ別にライリーと結婚した訳じゃない。メリーと結婚した事になっているのだ。そうでなければメリーの持ち物を俺が持っているの

はとても怪しい

「ほら、持ってきてあげたわ。古いからもう交換しようと思ってたし、あげる」

「ありがとう、料理長。」

「今度は別にアタシのこと貰いに来ても良いのよ?」

ケラケラと笑い

「俺には勿体ないから貰えないよ。それに、俺は彼女だけを愛するって決めてるから」  
「知ってた。だって、そこが気に入ったんだもの」

しばらくお喋りを楽しんでから別れた

この後はまたお仕事があるからね

「おはよう。指揮官さん。気分はどうだい?」

ズキズキと身体中が痛む。叫びすぎて喉が渴いた。手足の指先には爪が一枚もない

「身体中が痛くて最悪だ。」

さっきの陰気な奴らとは違い、キラキラと輝くような、大輪の向日葵のような青年だった。あの時に出会った、旅の青年だった

軍服を着て、髪の毛をぴっちりオールバックにした青年は、紛れもなく一緒に酒を飲んだ青年だった

「お前は……」

「覚えてるかな？俺と酒飲んだの。あの時に話してくれたでしょ？指揮官は俺だー！つて」

ニコニコ笑う男は場所もあいまってすこぶる不気味だ

「戦場でも俺以外に情報を持っている奴は居ないって教えてくれたでしょ？」

思い返せば、戦場で俺を捕まえたあの悪魔も同じ顔だった

「だからさ、情報吐いてくれない？」

「断る！」

いくら辛くても仲間を売る程腐っていない。死ななければまだマシだろうと思う

「……………そっか」

笑顔が消えて、無表情になる。

「お腹空いたでしょ？食べさせてあげるね」

そうやって取り出したのは何も乗っていない皿と銀のスプーン、そして：チーズスライサー？何をする気だ…？

「お肉は好き？」

「は？」

チーズスライサーを片手に持ち、俺の手を掴む。いや、嫌だ、まて、待て待て

「やめてくれ！」

「やだ」

スライサーが指先に食い込む。ミチリ、と音がして激痛が走る。

「やっぱり筋っぽくて削れにくいなあ」

ぐちゃり

スライサーに絡まった肉を皿に盛っていく

「流石に少なすぎるか。あ！止血しとかなきゃ死んじゃうね。」

俺の肘に紐をぎちぎちに巻いた。だんだんと感覚は無くなっていくが、肉が削れる音が、骨が削れる振動が、俺に痛みを与えている

「ほら、あーん。口開けて？」

「ん”————!!!」

スプーンに乗った、赤く血生臭い物体は、たった今俺から削り取られたモノだ

食べたくなって口を固く閉ざして首を振る

顔を掴まれて無理矢理口に入れられる。

ぐちやりとしていて生臭く、鉄の味がする。硬いものは削れた骨なのだろう

「美味しいですよ？自分なんだしき。」

吐き出したいが、口を押さええられ、無理矢理顎を動かされる

嫌悪感からポロポロと涙が溢れ出した。

「ねえ、情報教えてくれる？それともまた指食べたい？」

教えたのならば、もうこんな苦痛を味わうことは無いのか？

「教えてくれたら助けてあげる」

口から手が離れる。口に入ったままの肉を吐き出し

「全て話す！もう……こんな苦痛は味わいたく無い！」

恐怖と安堵から涙が止まらない。笑顔を浮かべた男は、





魔は…金の髪の毛の悪魔は！全て踏み砕いた！

元々人間だったことなど分らないほどに！

「皆の者！我々は悪魔になど屈しない！悪魔の国、フランスを討ち取るぞ！」

「そうしてもらわないと歴史が狂う」

柱の陰には血のように赤い服の青年が一人

老人の様な白い髪は目立ちそうなものだが、誰も気がつかない

「ああ、解っているとも。また殺せばいいのだろう」

しばらく様子を見ていた男は、ポツリと呟く。

「……これが正義なのか……？」

人を殺す事で人を守る

より大きな善の為に

小を切り捨てる

本当にそれが正義なのか…？

悩める者は双剣を手に

空気に溶けるように消えていった

## ”英雄” になった日

「我々が強き同胞よ！戦え！そして勝つんだ！これより始まるは戦争では無い！虐殺だ  
！」

「「オオオオー！！！！」」

戦場に益荒男供の雄叫びが響く

「俺に続け！」

飛び出したのは一際大きな黒馬に乗った男

名をメーガス・グランツ

その戦いはアルジェリア軍2万に対してフランス軍1万という、勝敗の分かりきった

戦いだと思われた。

「何故だ！銃が当たらない！」

「剣が届かない！」

「大砲が壊された！」

「「悪魔だ！あれは人では無い！」」

一人で5,000以上の兵を殺した

血に濡れた

赤い”悪魔”

「あの人は本当に人間か!？」

「恐ろしく強い!」

「殺す姿でさえ美しい!」

「天使だ! 神がフランスへと遣わしたのだ!」

一人で5,000以上の兵を裁いた

神が地に遣わした

黄金に輝く”天使”

相反する評価は、見方を変えればどちらも同じ

加護望みを叶えを与え

裁き対価を望みを行い

魂魂を奪って行くを連れて行く

ただ一点違うとすれば

強く美しい天使か

酷く恐ろしい悪魔か

逃した敵軍を追いかければ、いつのまにかもう1人になっていた

「お前で最後ね。」

残った1人を切り捨て、自軍の方向へ向かう

あー疲れた、身体中生臭いから早く風呂に入りたい。汗でベトベトもする…

「！」

まだ残りがいたのか？

こっちに敵意を向けている者が近くにいる。しかも、近くまで俺が気付かない程の手練れだ

カージュから飛び降り、

「カージュ、お前は先に帰っていて。俺も後から行くよ」

そう言っただけを叩き、走らせる

「お願いだ。彼女を撃たないでくれ。」

カージユが見えなくなつて、木陰から出てきたのは赤い服で褐色の肌の男だった。

「貴様がメーガス・グランツだな？」

「ああ、そうさ。俺がメーガス・グランツ中將だ」

「ひとつ、聞きたいことがある。」

「どうぞ」

「何故、お前は存在する？」

何故とは？

いや、分かっているとも。俺は、メルセデスであつて、メーガスでは無い。存在しな

いはずのものなのだ。

じゃあ何故存在するか？

「*Je pense, donc je suis*」  
「我思う、故に我あり」

それだけ言つて、俺はサーベルを抜いた

「デカルトか…すまない。愚問だったな」

赤い服の男は手に双剣を持ち、駆け出した。

速い。恐ろしく速い…が、追いつけないわけでは無い

俺も、サーベルで攻撃をいなすがどうしても向こうの方が手数が多いのだ

防ぎきれない刃が切り傷をつけていく

隙を作るには今はこれしか出来ない。うん、仕方ない！

相手のスカした顔に、思いつきり

唾を吐いた

「なっ！」

「おつとごめんごめん。ちよつと力んじやったんだ、許してねん」

キャピツとなるべくウザくなる様な事をする。するとあら不思議、切れて単純な動きに……なんねえな。

「…勝てば官軍、負ければ賊軍だ。私は別に気にしていなければ、それで怒りはしないさ」

「わー大人だねえ。可愛く無いなあ」

また斬撃のラッシュが来るけど、慣れてきた。ここは一発、返しとくか。

「そおれ!!」

剣の側面を殴って起動をずらす。そのまま無防備な腹にヤクザキックをかました

「大丈夫う？君って斬撃も軽いし、体重も軽いし……ちゃんとご飯食べて筋トレしてる？簡単に内臓にダメージ入っちゃったでしょ」

筋肉なさすぎいゝ

「生憎だがこの体は成長しないのでな！」

成長しないの？

「やつぱり君つてさ、人…生者じゃないよね。なんて言ったら…うーん…魔力の塊？」

「ほお、それに気づくか。では自己紹介をしよう。私はエミヤ。正義の味方になれなかった男だ」

正義の味方…

そりゃ誰でも一度は憧れる。けれど彼…エミヤが言うのはまた違う

彼は俺を殺しにきている。何故存在するのか？という質問から、俺は存在してはいけない人物なのだろう。じゃあ何故魔力で出来た彼が来るのか？…俺が世界にいてはいけないならば殺しに来るのは世界だ

「そして貴様を殺す男だ」

そう告げるエミヤは殺したくないのだろう。瞳に映る決意が揺らいでいる

「そんなに嫌なら」世界」の言う事なんて聞かなきゃいいじゃん」

「それが出来ているならば俺がここにいないはずがないだろう！」

瞳を見れば分かる。数え切れない程の人間を殺したのだ。守りたい人間を、その双剣

で



「よし、分かった！俺が君を殺せば君は俺を殺さずに済むよね！」

「！…フツ…面白い、やれるものならやってみる！」

そう言って、彼は双剣を投げた

なんか嫌な予感がした俺は全力で後ろに飛んだ

「どわあ!? ナニソレ!? 爆弾?！」

ニヒルに笑う彼はいつのまにかまた双剣を構えていた

「うげえ…君遠距離も近距離も出来るとか…やな奴だね」

「軽口叩きながらも私の攻撃がほぼ当たらないそちらの方が”やな奴”だと思うが？」

お喋りをしながらも避け続ける

あー怖い怖い。さっきから髪の毛がちまちま切れてくのがやだな…女にとって髪は命なんだぞ！俺は男<sup>メル</sup>だけど

「うわつと！酷いな君！俺の綺麗な顔に傷つけるとか！」

「否定はしないが、普通は自分で言わないだろう…」

「何言ってるのさ、あの子とおんなじ顔なんだから綺麗に決まってるでしょ！」

お返しはきっちりする派代表の俺としてはやっぱり顔にやりたいな…

一度離れると、また爆発する双剣が飛んで来た

ただし、今度はただ避けるだけじゃなく、こつそり小さく折れた木の枝を拾う。丁度よく爆発で砕けているのがそこらに散らばっているしね

また打ち合いをし、強めに剣を弾いて、木の枝を投げつける。

顔スレスレに投げると一瞬だけ視線がズレるのだ。投げた勢いのままに、目に指を突き立てる

ぶちゆりと何かが潰れた感覚と、暖かい液体が手を伝う感覚が分かる

指を引き抜いて直ぐに後にそこから離脱すれば、さつきまで居た場所に、幾多もの剣が刺さっていた

「こつわ！危な！てか君武器多すぎでしょ！ずるい！」

「私としては平気な顔をして人の目玉を潰す人間の方が恐ろしく思えるがな。…しかし…ふむ、私では君は殺せないようだ」

「そりゃね、6歳の時から鍛錬してる俺が負けたらダメでしょ」

彼に近づいて、袈裟懸けに斬り捨てる。すると膝をついた彼から光の粒が出始めた  
「すごい綺麗だね。幻想的だ」

「ふん、そういう人間には会ったことが無い」

「じゃあ俺が初めてだね」

「皮肉も理解出来ないのか」

「うーん、ほら、俺ってポジティブだから」

「だろうな…だが、油断大敵だ」

俺の背後に剣を召喚したんだろうが、流星に違和感は感じていた。さつとしゃがみ込めば、頭上を飛んでいく剣が見えた

「危ないでしょ！もう…でもその心意気は気に入った！今度は味方側として出てきてよ、面白そうだし」

「それも悪くなさそうだ」

「考えといてね。それじゃ、バイバイ。エミヤくん」

全身が光の粒になって消えてしまった。少し残念に思うけど、なんとなくまた何処かで会えそうだし、期待しておこう

空はもう真つ暗で、沢山の星がキラキラと輝いていた

「メーガス中将！ご無事でしたか!？」

駐屯地に戻れば、部下達がわんさか押し寄せてきた

「大丈夫、大丈夫。多少切り傷あるけど大きな怪我ない……し………」

彼らの後ろにいる、彼女と目があった。そして俺は思った

ああ、俺の死因って馬に蹴られた事による頭蓋骨陥没かな？それとも内臓破裂かな

国に帰った俺は、エドモンが監獄島シャトドレイフを脱獄した事を知った

## 休みの日

「メーガス・グランツ。此度の戦いではよくぞフランスの勝利を持ち帰ってくれたな。その活躍を鑑み、貴公をフランス陸軍の大元帥とする！」

「はっ！」

…はっ？

今何だったこの人？

大元帥？中将から？バカなの？アホなの？死ぬの？中将だったら次は大将でしょ？死んでも二階級特進で元帥だよ？バカなの？俺死んで無いよ？

俺が表面は取り繕いつつも頭の中で疑問符をぼこぼこ生産している間に話が進んでいた

「そして、貴公には土地を与える。その為に、2週間の休暇も与えよう」

あれー？いつのまにか領主にもなっちゃったよ!?まじで!?頑張るけど！

「お心遣い感謝致します」

「てな訳で、俺は暇してます。やる事無い？」

「休む事が仕事です。」

「え〜〜だつて暇なんかもん」

「貴方私より年上なのに何でそんなガキ…子供のよ様な振る舞いをするんです？というか何で似合うんだよ」

敬語が外れかかつてる彼女は俺の家でアルベールの乳母をしてもらい、現在は使用人をしてている、燃えるような赤髪が特徴のライリーだ

「ミア〜ライリーがいじめる〜」

「うーん…旦那様が悪い気が…」

「ミアが反抗期！アルベールも最近冷たくて俺寂しい…」

この可愛らしい女の子はライリーの娘のミア。ライリーよりも少し暗めの赤髪だ

「そういえばアルベールは？」

「坊ちゃんでしたらデートだそうですね」

「……………」

「ミア？ミア？ねえ、銀のお盆引きちぎる気!?!?伸びてるよ!?!」

「…すみません、旦那様。少し取り乱しました」

「あ、うん、少し…少しね」

ヤダ…怖い…

アルベールのことちよつと叱らなきや…

じゃないとアルベールの手足のどれかが千切れそう…

「あ、旦那様、そんなに暇でしたら買い出しに行つて来て下さい。これ、メモです。5時  
までには買つてきてくださいね。じゃ無いとメシ抜きです」

「主人遣いが荒いなあ」

「暇だつて言つたのそつちでしょう」

「買い物行つて来まーす。ミアとライリーは個人的に欲しいものはあつたりする？」

「私はありません」

「あ、私はクッキーが欲しいです。広場の所のお菓子屋さんが美味しいと聞いたので…」

「了解！今日のお茶受けにしようか」

「えーと、卵買った、小麦粉も、オレンジあるし、あとは…牛乳とチーズ、鶏肉だな。」  
街をのんびり歩きつつ、買い物を済ませていく

歩く度に、「メーガス様!」「領主様!」「大元帥!」とひたすらに声を掛けられる。一応笑顔で手を振りながら歩いてはいるけれど

「マダム、牛乳とチーズを貰えますか?」

「まあまあまあ!領主様!もちろんですとも!どれをご所望で?」

「そうだな…パンに合うチーズが欲しい」

「ではこちらはどうぞでしょう」

「ではそれにしよう」

「味見はなさらないのですか?」

「マダムのオススメならする必要なんてないでしょう?」

「あら!とつても嬉しいですわ!」

マダムからチーズを受け取り、お会計を済ませる

肉屋を目指して歩いていると前方から歩いてくる人が息子だと気づいた

「アルベール!」

「………父さん」

「えっ!メーガス大元帥!?!」



心底嫌そうな顔をする、かわいい息子

俺より4インチくらい下にある顔は凄くイケメンだ。俺よりも暗く、茶色味の強い髪は短く、俺とお揃いの青い目をしている

端的に言えば、可愛い

全俺が一番可愛い男だと認識しているのが息子のアルベルだ

エドモン？あれはカツコかわいいだから違う

「何でいるんです？」

「ライリーに暇だつて言つたら買い出し行けつて」

「あんだ主人でしように」

「別に俺からしたらみんな家族だし」

「召使いを家族扱いとかあんだほんと馬鹿ですよね」

「馬鹿でも変人でもいいよ。そういえばミアがすつごく怒つてたけど何したの？」

「別に何も？アソビに誘つただけですよ」

「ミアは純情なんだからそりや怒るよ…腕千切られる前に謝りなよ？」

「へえへえ分かつてますつて」

まあいいや、デート楽しんで

と手を振れば、服の裾を掴まれる

うん？

振り返れば、アルベールの彼女さんが裾を掴んでいた。あつ（察し

「私、アイリンって言うんですけど…」

ああー良くある奴ー

いやね、アルベールに嫌われる理由はさ、分かっているんだよ。アルベールの彼女が即座に俺に乗り換えようとするからなんだよね。父さん30後半つす。エドモンじやないから息子と同じ年の子なんかには出しません

「メーガス大元帥ってとってもステキな方ですよ。周りのみんなに優しくして…それに私って年上好きなんです！私は魅力、無いですか？」

腕を絡めて擦り寄ってくる。可愛いけどね…あのね、俺寝取り趣味もないんだよ。アルベールがヤバイ顔してるよ。怖いよ。

あれ、俺子供達の事怖がりすぎ…？

「おい、父さんから離れろ」

「触らないでよ！メーガス大元帥…この人気持ち悪いですう」

は？

世界一可愛い俺の息子が気持ち悪い？目が腐ってんじやねえの？

…K O O L、K O O Lになるんだ俺。

「こんな事で仮面は剥がしちやいけない

「ごめんね、俺としては離して欲しいかな。」

「え……？」

「たしかに君は魅力的なレディだけど、俺としては可愛い息子の方が大事なかな」

「何で……」

「俺の唯一の肉親だから。ね、ごめん。腕、離して？」

「父さん……」

「さ、アルベールも帰りな。俺は買い物終わらせてなきやいけないし」

「……俺も行きますよ」

「重いよ？」

「子供扱いしねえでくれます？」

「俺からしたらいつまでも子供だよ」

「だからあんたが嫌いです」

「ええ、昔はよく父さん大好き！って言ってたのに」

「いつの話です!?! 10数年前じゃないですか!」

「……あ、5年前だ」

「へ……？」

「戦争行く前に父さん嫌い！って言われたけど、帰ってきたら嘘だよ、大好きだよ！だから居なくならないで！って泣き付かれた」

「……………」

「あいた！記憶あるでし痛い！息子が暴力を振るってくる！」

「うるさい！」

「ライリー！買ったものどこ置いたらいい？」

「台所のテーブルの上にお願ひします」

「はーい、置いとくねー」

「紅茶を淹れるので少し待っててくださいね」

「うん」

「ミア」

「何でしょうか？こんな召使いのバカな女に用事だなんて」

「あゝ……これ。食べたいって……」

「あら、卑しい私に施しとは、優しい坊ちゃんがいて私は幸せ者ですね」

「すまん」

「……………」

「あんな事言つたのは謝りますよ。俺だってバカな事言つたって思ってますし」

「受け取りましょう。けれど、また女の子取っ替え引っ替えしている事について私は怒っています」

「は!?!それはオタクにや関係ないでしょう!?!」

「あります。旦那様にも迷惑かけているんですよ? 私が納得できるように説明して下さい」

「だって……」

「だって?」

「父さんがイケメンすぎるんですよ」

「察しました。」

「父さんを見た瞬間父さんを、口説こうとするんです」

「貴方って不憫なんですね」

「でも父さんなら仕方ないかと思うんです」

「ファザコン」

「父さんはイケメンでなのに調子に乗っているわけでもなく優しいし、いつつも俺のこ  
と氣遣つてくれるし、幸せそうに笑つてる顔が最高に可愛いし、強いし、あまりにもイ  
ケメンすぎて男にも声かけられてるし、悪戯っぽく笑う顔が最高にエロいし、俺が触つ  
ても全く警戒心持たない癖に他の人が触ると一瞬眉をひそめるのが本当に尊いし、無表  
情だったのが俺を視界に入れた途端に笑顔になるし、父さんは天使か何かだと思う」

「ファザコン乙」

## 秘密の日

「トマー！遊びに来たよ！」

「……やっぱり貴方ですよね。」

普通の馬にしては力強過ぎる音がしてましたし……

そう、今俺はトマーの所に遊びに来ている！

何故って？勿論トマーを揶揄うためさ！

カージユのご飯を桶を借りて準備してから家に入る。じやなきや不機嫌になった

カージユは周りのモノ全部踏みつける、プレス機になる

彼の尊い犠牲は無駄にはしない……！

死んで無いけどね

「で？今度はどんな厄介ごとですか？」

「ん〜信頼が欲しい！」

「信頼はしてますよ。だから聞くんです」

ひどいわ!と泣き真似していれば、トマが入れてくれた美味しいコーヒーが置かれる「わーい」

「さっさと要件済ませてさっさと帰ってください」

「最近息子が冷たい…」

「こんな父親は嫌でしょうし」

「最近ライリーの対応が塩なの…」

「私でしたらこんな主人は願ひ下げです」

「最近、陛下が変わったけど、扱いは便利屋のままなの…」

「それには同情します」

トマまで冷たい…

もうマジ無理。カージユに慰めてもらおう…

「茶番はいいですから早く本題には入ってください」

「え…あ、そういえばトマさ、国会選挙に出たけど落選したってね…おつおつ」

「殺したい、その笑顔」

「…別に、トマにだったら良いかもね…」



「急に静かにならないでください。気持ち悪い」

本心なんだけどなあ…

一人で死ぬのは嫌だから、何人か道連れにする気はマンマンだけでも

でもこの変な空気は嫌だなあ

何とかして話題変えなきゃ…

えつとくあつとくなんかあつたかなあ…?

「……………あ”　く…軍に復帰おめでと」

「……………」

「少将なんでしょ？俺のトコ来ない？」

「嫌ですよ。貴方のトコは、狂信者の集いなんですから」

「ひどい言われようだなあ〜でも否定できないんだよなあ〜」

天使天使言われるのは慣れたけど、今度は美の女神とか馬鹿なこといいはじめてるんだよ…

たしかに美の女神は戦いの女神も兼任してる所多いけども！

「ねえ、トマは口かたいよね」

「まあ、そこそこ」

「今から言うことを墓まで持ってって欲しい」

「…どうせロクでもない事でしょう」

「うん、でもね、誰にも言えない俺の秘密」

ちゃんと守ってね

「俺はね、メルセデスだけど別人なんだよ。…心配しないで、本物ではあるからさ。訳わかんないよね、うん、だから説明するね。…俺はメル、で、元々この体の持ち主がメリー。ほら、分かりやすく言ったらあれ、二重人格だよ。昔から居たんだよ？ 一つも無表情だったのがメリーだった時。わかった？ それで、たまに表情が表に出てた時は俺、メルの時なんだ。…メリーはね、今は居ないんだ。原因…？ ああ、うん、よくわかったね。正解だよ。エドモンが居なくなつて疲れちゃつたんだって。だから俺が軍人になって、エドモンを連れ返して、メリーが戻ってきたら良いなつて思つたんだ。…エドモンの方が行動がはやかつただけだよ。まあとりあえず、今君の前にいるのはメリーじゃなくてメル、メリーに作られた可哀想なハリボテだよ」

悲しそうに笑う彼は、俺が初めて恋をした笑顔を見せてはくれなかった。冗談だと、

悪戯だとは言ってくれはしない。

いつもはほんの数ミリ口角を上げるだけの笑顔ばかりだった。成長すればするほど表情は変わらなくなっていく。けれどあれは……チエスだった。勝負をして、唯一私が彼女に勝てるモノで、よくやる遊びだ。それでも、負ければ、へによりと眉をさげ、たまたま勝てれば向日葵のような笑顔を見せてくれた。その笑顔に、一目惚れをした

だのに、それは元々彼女ではなく、彼……作り物だったと？

「それがどうした」

「へっ!？」

「作り物だと何が悪いんだ？」

「だって俺は……」

「お前の部下はメリーではなくメルに惚れ込んでついている。俺だって、お前につ……」

「俺に……?」

「お前に……信頼を寄せている」

言える訳ないだろう!初恋だど?!恋心だど?!精神が男だと暴露された後で告白できるはずないだろう!

「……ありがと……優しいね」

俯いた頭を乱雑に撫でてやれば、手に擦り寄って来る。猫か貴様は

心のうちを知ってか知らずか最終的に泣き疲れて私の腕に収まった初恋相手（おとこのすがた）はどうしたらいいのだろう

泣き疲れて寝ちゃった俺だよ！

目を覚ましたら夕方だったので、カツコよくて優しい兄弟子様に頼み込んでお泊りさせて貰うことが出来ました！わーわーどんどんばふばふ

あ、目を覚ました時はトマにだいしゆきホールドしてたよ。やっばいね、絵面がトマがなんか悟り開いた顔してたのはなんかごめん

「トマ、お礼にさ、俺がご飯作ろうか？」

前にトマが作ったご飯は食べたことある。あれは漢の料理って感じだった。不味くはないけどやばかった

「…作れるんですか…?」

「俺のゴハン食べてくれないの…?」

必殺! 捨てられた仔犬の目!

「不味いものは流石に嫌ですし」

何?! 効かないだと…!?

「トマのよりは美味しいよ」

「そこまで言うならどうぞ」

「わーい! でもトマがすごく殺気ぶつけるー」

料理風景はカットしつつ、最終的にできたのはコレ!

牛肉のワイン煮

コンソメスープ

夏野菜のサラダ

魚のパイ

バゲット

「美味しい…」

「どやあ…」

「うざいです」

「ひどいですー!」

わーん!ひどいよお!やけ食いしてやるー!

牛肉のワイン煮を口に放り込めば、ほろほろと崩れてワインの香りと牛肉の旨味が口いっぱい広がる

コンソメスープは甘い玉ねぎとしょっぱいベーコンが丁度いい

サラダはチーズを使ったなんちゃってシーザードレッシングをかけて食べる。シャキシャキトウモロコシ甘い

魚のパイ。骨まで食べられるようにちゃんと骨切りした。粉々になるくらいした。ホワイトソースたっぷり、トロトロしてる。魚も生臭くなくてばっちり

バゲットサクサクホワイトソース絡めて食べるとおいしー!

「…美味しいように食べますね」

「美味しくなかった?」

「いえ、美味しいですが、よくもまあそんなに表情が変わるな、と。」

「だってそれがメルだから!」

## 復讐を遂げた日

「フェルナン・モンテゴ陸軍中将と申します！」  
恨めしい

「此度の作戦、共に出来る事、嬉しく思います！」

憎らしい

「そうですか。私も貴方はとても優秀な人だと聞いています。貴方の働きに期待しているよ。」

この視界に入る

瞳が

髪が

顔が

この耳に入る

声が

心音が

呼吸が

俺に感じられる

奴の存在が

全てが

俺の殺意を燃え上がらせる



どうやって殺してやろうか

俺が殺すか？

どうやって？

首を切る？

滅多刺しにする？

毒でも与えるか？

首を釣らせる…？

ああ、原作通りも悪くは無いか…

もつとあいつを惨めに殺すならばどうする？

「ねえ、フェルナンくん。君は優秀で、腕がたつ事を見込んで頼みがあるんだ」

「アントウエルペン城近くの町へ潜入して欲しいんだ」

「大丈夫、俺もすっかり変装して行くからさ！」

「シャツセ將軍！砲撃用意、完了致しました！」

「構わん、撃て」

將軍と呼ばれた男はパイプを啜え、腕を組み、キラキラと<sup>濁っ</sup>した蒼い目をしていた

ざわざわと騒がしい駐屯地

幾人かの兵は小さなテントで何かを話している

「おい、やっぱり大元帥がいらつしやらない」

「ほかに誰がいない？」

「フェルナン中将が」

「その二人だけだ」

「どこに……？」

「………まさか。」

「予想がつくのか!？」

「言え！」

「まさかだが、大元帥、また勝手に情報収集に行ったのでは？」

「……またか……」

1人は深いため息

1人は頭を抱え

1人は諦めた顔をしていた

〈数刻前〉

町に……といつてもオランダ軍が占領したせいで殆ど人がいないが……着いた

「ここからは別行動だ。」

「分かりました」

「情報が集まり次第、あの酒場に行つてくれ。もしかしたら俺は時間がかかる可能性がある  
あるんだ」

「はい。それではご武運を」

「君もな」

せいぜい苦しんでくれよ？

フラフラと町を歩き、酒場や路地裏を見ていく

数個目の路地裏で酒を飲みすぎたのか、蹲っている兵士がいた。蹲り、よく見えるよ

うになつたうなじ目掛けて足を振り下ろす。しっかりと首が折れるまで踏み続ける

ベキリと折れた感覚が足から伝わった

服を剥ぎ取り、少し離れたところに服を置き、先ずは顔をナイフで刻む

そのまま手近に転がっている木箱の中に押し込めればいい

あとは軍服に着替え、少しの血を服につけて、城に走る。

遠くから走ってくる男がいた

城の門番に息を切らしながら

「はっ、はっ……報告、です！ フランス軍、中将、フェルナン、が、すぐその町に！ あいつが、あいつに、一人、殺されちまった！ 他にもいるのかもしれない！ もう俺たちは包囲されているのかも！」

「何?! 将軍に伝えなければ！」

「貴殿のお陰で早く気付くことができた。門は開けておく。中に入ったらしめてくれ」

「分かりました。報告、お願いします」

ちやんと殺してやってくださいね？

走っていく門番2人を眺めながら呟き

くるりと踵を返した

コツコツと軍靴を鳴らし近づいてくる影がある

それは見慣れた軍服

ずっと殺していた敵国の軍服

いくら銃を撃てども当たらない

ひらりひらりと

風に舞う葉のように

するりと避けていく

「き、貴様何者だ！」

深く被った軍帽から見えるのは三日月のように歪んだ口のみ

「俺は——」

「ただいま！ちゃんと情報盗ってきたよ！」

「あ”あ”あああああ!!! やっぱいいいい!!!」

「またフラフラフラフラあっちこっち行きやがって！」

「盗ってくる情報は素晴らしくても貴方の行動は素晴らしくない！」

「何でトツプが行ったんだよ！」

「わーみんな怖ーい！体力無駄に消費しちゃうよ？」

「誰のせいだと!!!」

「んー、俺のせいかな！」

もう全てを諦めたような顔の面々は、一つ、心に決めた

(こいつはやべえ奴だが、これに対して心配するのはバカらしいからやめよう)と

それだとしても、鬱憤は晴れない

ならば、

「カージュの姉さーん！大元帥お願いしまーす!!!」

鋭い☒は、カージュにとって、了承の意である

「待つて流石に俺死んじやう死んじやうやばいまじ待つて落ち着こう潰れる碎ける内臓もう吐きたくない無理無理無理やめて怖いよそつと押し倒すのも怖い待つてやめてまじでやめて！」



曰く、彼は腹筋のみで1tの重さに耐えられるらしい

「ねえ、大元帥、一緒に行ったフェルナン中将はどちらへ？」

「うん？まだ帰ってないの？可笑しいね？情報掴んだらすぐに帰るように行ったのに…」

「…そのうち戻ってきますよね」

フェルナン・モンテゴ

享年43歳

職業

軍人

死因

オランダ軍からの砲撃

最後はゆっくり一人で死にな

お前なんか近づくとうとはしたくないが

それでも俺はお前が許せない

だからお前は俺<sup>メルセデス</sup>ではなく、敵国の砲撃で、誰にも看取られずに死ね

死んで地獄に堕ちろ

## 無茶振りされた日

「貴殿に次の命を与える。ベラクルスの戦いに参戦し、勝利を収めて来い！」

「はっ！」

「貴殿はシャルル少将と共にエルミニに乗って貰うぞ」

「はっ!?!」

拝啓エドモン

俺、陸軍の大元帥にまでなったよ。

でも、何故かこれから海軍を率いなきやいけないみたいなんだ。

もしかしたらもう会えなくなるのかもしれないね。

…本心を叫ばせてもらおうよ。

馬鹿じゃねーの!?

馬鹿なの!?! ルイ・フィリップさんよお!?

俺は！陸軍の！大元帥であって！海軍じゃない！



「流石大元帥！大砲の弾を切り捨てるだなんて！」

「そこに痺れる！」

「憧れるう！」

なんかイギリス人が混じってたかな？

俺はゲロ以下の匂いなわけ無いと信じてる

多分、きつと、おそらく、めいびー、しないと思う

「私も負けていられませんなあ！」

ムキムキ野郎シャルル少将が来た。立派な筋肉ですな…うん、兵士5人がかりで撃つ大砲一人で撃つのはおかしいと思うよ？

…俺もできるけど

「いやー、恐ろしく強いすな、メーガス殿は！」

「いえ、貴方も十分にお強いと思えますよ、シャルル少将」

戦いも終わり、帰る船の上で2人で酒盛りをしていた

俺自身結構酒好きで蟒蛇だからグイグイ飲んで、同じペースで飲んだ少将はこのとうり、絡み酒を始めた。とても面倒くさい

「そういえばあゝヒック

最近貴族の間で面白い噂を聞いたのですがあ！」

「どんなものですか？あまり社交の場に出る暇がなくて、知らないんですよね」

ガハハハと豪快に笑いながら教えてくれた

「えらい別嬪さん連れた白髪的美丈夫が来るようになったらしい…確か…クリスタ…？」

「……モンテ・クリスト伯……」

「おお！そうだそうだ！知っているじゃあないか！背が高く教養もあるような男だから女どもがみーんなそいつのところに引っつまうって愚痴をよく聞くな！」

「……………」

「……どうした？」

「いいえ、ただ、そんな美人さん2人組を見てみたいな、と」

「うははは！どおせメーガス殿に比べればどっちも霞んじまうだろうがなあ！」

「…てな事を聞いたので、一緒に夜会に行こう！」

「馬鹿ですか？あまりにエドモン・ダンテスに会いた過ぎて錯乱しました？」

「えー俺はただ、未だに女の影がひとつもない友達を出逢いの場に連れてってあげようと思っただけですー！」

「もう50を過ぎてるので結構です。余計なお世話ですー！」

えー…女の子に囲まれてあたふたしてるトマを見るのがおもしろげフンゲフン、愉え  
てゲホツゲホツ…

微笑ましく思えるよね！

「ねー…！いこーよー！俺はトマと一緒に行ききたいのー！  
ねー…！えー…！」

「駄々っ子ですか貴方は！」

ぶー…！

ふん！

そんなに言うなら俺にも考えはあるんだ！

「一緒に行ってくれなきゃ俺の権限でトマの給料減らす」

「職権濫用だ！」

トマは顔を覆って崩れ落ちました

「すごく緊張するわ…」

私にとって、はじめての夜会

綺麗に着飾った男女人々がグラスを片手におしやべりをしている

誰も私を見てなんか居ないのだ、緊張する必要はない！

ウェイトレスからジュースの入ったグラスを受け取り、先に行った姉たちを探す

「ほんと、人がいっぱい…」



少し耳を澄ませば沢山の会話が聞こえる

やれ宝石がなんだ

織物がどうだ

何処その息子はこうだ

あそこの夫人は男が途切れないだとか

下世話な話が耳に飛び込んでくる

「なんかやだ……」

早く姉さん達に合流しよう

しばらく歩けば、見覚えのある真っ赤なドレス

「姉様！ やつと見つけた！」

「あら、あんたやつと来たの？」

姉様の向かいには、また増えたとばかりに嫌な顔をする白髪の男がいた。

わあ……姉様よく話しかける勇氣があるなあ……

私無理だし彼も嫌そうだし……あとこんなイケメンなら奥さんいるでしょ……

「姉様…私気持ち悪くなっちゃった…」

「ええ…：しようがないわね、向こうの出入り口の所に椅子があるから少し休みなさい。心配だから私も行くわ」

「ありがとう、姉様」

私の手を掴んだ姉様はスルスル人混みを進んでいく

「ごめんなさい…」

男の人の横を通る時にそれだけ呟けば、

「ありがとう」

と小さな微笑みが帰ってきた

「ほら、ここの先に椅子があるから休んでなさい」

「姉様は？」

ふふんと笑って

「勿論、旦那探しするに決まってるじゃない！」

姉様は男に対して夢を見過ぎなのだ

高収入で、イケメン、優しく、家庭的なスーパーハイスペック男を探しているとか、

苦笑いしか出来ない

「う〜ん…頑張つて?」

「ええ!」

意気揚々と足を進める姉を見送つてから、扉を開けた…が、

「きやつ!」

「おつと」

人とぶつかつてしまった。

「ごつ、ごめんなさい!」

「こちらこそごめんね…怪我はしてない?大丈夫?」

背が高く、キラキラ輝く蒼い瞳と不思議な煌めきの金髪、美の女神が自ら作った最高傑作だと言われても信じるような男ひとだった

「えつ、あつ、はい、大丈夫です」

「メル、ちゃんと前を見なさいと言っているでしょう!」

「わかつてるよ、トマ。まあ、そうそうぶつかることはないと思うけどね」

後ろから、金髪に少し白髪の混じつたおじ様…ロマンスグレーとでも言うのか、こちらもイケメンだった

「大丈夫でしたね?貴女もちゃんと前を見なさい。怪我をしますよ」

すごく…：パパみを感じます…

「あつ、そうだ！ねえ君、会場で白髪の背の高い美丈夫を見なかったかい？」  
「最近噂になつているようなのですが」

白髪の…？

「あ…心当たりがありますよ姉が猛アタックしました」

「ほんと!?何処らへんだったか教えてくれない?」

「良いですよ。こつちです」

イケメンの過多は体に悪い。はつきりわかんだね。さつきから一言話すたびに心臓が口から飛び出そうだし、声も物凄い上擦つてる。

会場に入つてすぐに私は後悔する事になった

「キヤーーーーー!!!メーガス大元帥よー!!!」

「見て！トマ大将もいるわ！」

「あーん！いつ見ても素敵ー!!!」

「なにあの女」

「ブサイクのくせに」

「なんであんな女がすぐ近くにいますのよ…!」

パ  
パ、  
ママ、  
姉様、  
私の胃は今日で死にそうです

## 再会した日

やっど…

やっど見つけた…

「エド…モ…ン…」

周りの声に掻き消され、声は届かない

それだけではなく、目の前の衝撃で声がでない  
幸せそうに笑う彼と、腕を絡める知らない女

〈見つけた〉

〈みつけた〉

”ミツケタ”

”なのに”



”ワタシはいらなのね”

さつきまでであった暖かさは、その言葉を機になくなった。無くなってしまった

「ワタシはいらなのねって…消えちゃった…：もう何処にも居ないよ…：いないんだ…ねえ、俺はどうやって生きればいいのか…？もう…わかんない…」

「今まで通りに馬鹿みたいに笑ってればいいんです。死ぬのはせめて私が結婚してからにしてください」

トマが…結婚してから…？

「ふはっ…そんなの…もう永遠に死ねないじゃん」

トマは安心したように溜息をついた

「貴方ねえ…本当に…：ハア…貴方が笑ってられるならそれで良いですよ、もう…」

「よおーし！じゃあ俺が不死になる必要がないように、嫁さん候補を口説きにいこー!!」

「はっ!?!ちよつと!!!」

「みて！グラランツ大元帥よ！」

「あの子たちいーなあ…踊ってもらえるのかあ…」



「私をもっと美人だったらなあ……」

若い女達が黄色い声をあげている。少し前まで自分に対してだった事を考えると、本当にミーハーというか、なんというか……

自分としては美しい愛人がいるだけで充分……いや、本当は、ここに彼女がいなかったかを探しに来たのだ。愛しい俺の婚約者、メルセデス・モンテゴを

「やつぱり綺麗よねー!」

「パレードの時に見かけたけど、ほんと女の子の人より綺麗よねー!」

「特にあの髪!金なのに色々な色に見えるのが綺麗!」

「まさか!あのマルセイユの青い海を閉じ込めたような瞳でしょう!とつても神秘的  
!」

「それより私はあの肌ね!陶器のように白くて滑らかで……羨ましいわあ……」

「「やつぱり天使様は美しいわね!」」

少しだけ、興味が湧いてくる

そんなにも貴族に褒めそやされる大元帥というのがどんな人物か

一目だけでも見てみようと思った

時が、止まったように感じた

小さい頃から知ってる

☒メル☒というか名しか知らない

昔からの親友

何十年も会っていない

「メル……？」

まだ、こちらに気づいていない彼は、熱心に女を口説いている

「……………本当に君は綺麗だね。君には花が似合いそうだから贈りたいと思ったんだけど……君にあげたら花が可哀想だ。だって、どんなに綺麗な花も君を前にしたら恥ずかしくて閉じてしまうもの」

平気で齒の浮くようなセリフを言う所は変わらない

遅しくなった肩にそつと手をおいた

「…なんでしよう?」

口説いている途中に声をかけたからだろう。不機嫌そうで、それに加えて時間が経ち過ぎて姿形が変わってしまった。きつと俺には気づきはしないのだ

そう思えば、変に自信が湧いてきた

「いや?ただ少し大元帥と話をしてみたかっただけだ」

そう言うのと、冷めた目の中に少しの光が揺らめいたように見えた

「…そうですね。レディ、すみません。また今度逢えたならダンスを一曲お願いしますね」

「ええ!喜んで!」

「それでは…」

あちらに個室があります。そちらで話しましょう。俺はちよつと視線を引き過ぎますから」

スタスタと歩いていく彼は本当に気づいていないようで、悲しさと、少しの安堵感を  
覚えた

覚えていないなら、幻滅される事はない  
この醜い傷も、白くなってしまった髪も

胸に渦巻く醜い復讐心も

「それで？話はなんですか」

そう聞かれれば、言い淀んでしまう。本当に話したい事は話せない。話したくない  
「……とある女性を探している」

「愛人ですか？」

「いや……だが、なぜ愛人だと？」

「今は気難しそうな顔をしている貴方が、先程幸せそうに笑う姿を見かけたので」

「……そうか。」

「で？その女の特徴は？」

「…貴方によく似た女性だ」

「名前は？」

「メルセデス・モンテゴ…」

「分かりました。その人について教えて差し上げましょうか？」

「頼む」

「では、まずその女は俺の伴侶です。何年も前に亡くなりました」

「…は…？」

「子供は一人。」

「ま…さか…」

「【あの人しか愛せない】らしいですよ。そう言つて居なくなりました」

「なんで…」

唯、幸せに生きて欲しかった

俺のことは忘れて、優しい人と一緒になつて欲しかった

心の底から愛していたから

俺には幸せにする事が出来ない

ただ、幸せそうに笑う君が見たかっただけなのに

「ほんと、愛されてますね。エドモン」

「…なっ……………」

「髪も肌も随分と白くなったね。性格も荒んじやつてさあ」

「気づいてたのか！」

「親友を忘れるはずないだろ、俺そんな薄情に見える？」

「あの日……！」

「あれは……まあ……ごめんね？許してちょ??」

「…お前も変わったな。昔はもっと男らしくしようとしてた」

「それは君が揶揄うからだろ！女みたいだーってさ！」

「その度にお前は力で解決しようとしていたな」

「……………」

「まあ、久しぶり？」

「ああ、久しぶりだな」

## またまた再会した日

懐かしいね〜としばらく話してからいろんな話を聞いた

「ところであの別嬪さんは？奥さん？愛人？」

「エデは……愛人……？なの……か？」

「んんんwwwこれは笑うしかないwww

じゃあ出会いは？」

「出会いは……戻ってくる途中で……買った」

「oh……なかなか不思議な出会いのようで……」

そんな話をしてから俺たちは部屋を出た

「メル！貴方勝手に居なくならないでください！また何かやらかしてないでしょうね  
！」

「んー！本当にトマからの信頼が欲しい！」

『エドモン、貴方私を放つたらかしにし過ぎよ。』

『すまない。なにせ懐かしい顔にあったのでな』

お？さっきの別嬪だ〜

「やあ、可愛らしいレディ。良ければ私に君の名前を教えてくださいませんか？」

「 $\Delta \epsilon \nu$   $\gamma \nu \omega \rho$ ?  $\xi \epsilon \tau \epsilon$   $\tau \eta \nu$   $\epsilon \upsilon \gamma$ ?  $\nu \epsilon \iota \alpha$  ;」

おろろ? 何処のだこの言語?

うーんと…えーつと…

あつわかつたギリシヤ語だコレ

そーいやエデつてギリシヤ生まれだっけ?

「メル、彼女は…」

『失礼しました。私の名前はメーガス・グランツ。この国で陸軍の大元帥をさせて頂いています。レディ、貴方のお名前は?』

『あら、存外博識なのね。それとも言語に強いだけかしら。まあいいわ、』

「私はエデ。ギリシヤの貴族よ、元がつくけれど。ごめんさないね意地悪して。この人が私の事故つたらかしにするんですもの」

「ヒュー愛されてるう」

「揶揄うのはやめろ。あとそつちの奴は誰だ? いい加減睨まないで欲しいのだが」

睨んで…? トマは睨んだりしな…

めつちやしてー



わあい敵意MAXだー賊もびっくりなやばい顔してるう

「トマ?なんで怒ってるの…?」

「いえ、貴方は気にしなくて良いですよ。ただ私が気に入らないだけですから」

「睨むのはダメ」

そう言つてトマより高い身長を生かして目隠しをする

「離してください?」

「離れたら睨みつけるか毒を吐くでしょ?」

「勿論」

「じゃあ離さない」

すごいエドモンから視線が刺さる

何してんだこいつつて言う訴えが感じられるう

「ごめんねエドモン。この人はトマ。俺の昔馴染みで陸軍の大将してるよ」

「トマ・ローベル・ブジョーです。よろしくする気はありません」

「トマ!」

「……………」

なんでえ?

初見だろ？

そんな気に入くないことある？

誰に対してもお父さんな対応をするトマが…なじえ？

わからん！

「うーん…無理やり連れて来ちゃってご機嫌斜めだからかなあ…もう帰る？」

「是非とも」

「そっか…じゃあまたねエドモン。今度俺が治めてる領地に来てよ。そしたらまた会えるかも？よく街にいるからさ。エデちゃんもエドモンの事よろしくね」

ヒラヒラと手を振りつつ、空いている手でトマと手を繋いで歩いていく

「夜会、そんなに嫌だった？」

「…そうですね、そこそこ」

「…ごめんね、無理やり連れてっちゃって…」

「もう慣れました」

慣れるほど色々……やったわ…

え、正直ごめん。胃に穴が開いてたら俺のせいだわ…めんご♡

「どうしたら許してくれる…?」

「そんな怒ってませんよ。まあ、また貴方の料理を食べるのも悪くないですが」

「…!! いっぱい作る!」

「はいはい」

「とかなんとかやって別れたし、会うのはしばらく後かなーって思ってたんだけどなあ？」

「ふん…笑えるほど早い再会じゃないか」

「残念…今日はあの可愛らしい髪型じゃないの?」

「あれは無理やり連れて行った腹いせにトマがやった事だから…」

「オタクら知り合いだったんです?」

「いやあく知り合いだったんですよーコレが。」

しばらくエドモンとおしゃべりしてたら何故かアルベールがエドモンを威嚇し始め

た

「…なんで??? 恩人じゃないの…??」

「あらあらあら! へえ、そうなのねえ…分かるわ。私だって彼を取られるのは嫌だもの」

「何がそうなの??? 教えて??? 何? 若者言葉???」

若者2人が何か理解し合ったけどおじさんにも教えて? 若者のことわかんないよ…  
ジエネギヤが…しゅごいのお////…

「…ふっ……」

「どうしたのさ急に」

「テメエ……!」

なんかエドモンとアルベルがバチバチしてる

「わ”がんに”やい”」

とりあえず至近距離でバチバチしていいけど俺の事挟むのやめて?

「決闘だ!」

「なんで!」

「いいだろ?」

「なんで!!!」

!!!」

え????  
え?????  
え?????  
誰か説明きぶみー!!!  
睨み合ってた数秒で何があったの? 2人の間にいたけど分からんよ? え???

「え…? どうしたらいいの?」

「私のために争わないで! って言うのはどうかしら」

「無視しときゃいいだろ? 馬鹿なんですか?」

「殴って止めたらどうでしょう?」

え…じゃあ③の殴って止めるにする?

手袋投げ捨ててる2人の後頭部をミアから借りたお盆で殴った。とつてもいい音がしました。まだやろうとするので、2発目はもつと強くしようと心に誓いました。

「寝てろ馬鹿ども!!!」

## HENTAIに会いに行つた日

「探して欲しい人？」

「ああ。俺よりも変な奴との人脈があるお前なら知っているのでは、と思つてな。」

エドモンが急にやってきて、頼みごとがあると云つてきた

けど、俺そんな変わった人間しか知り合いないわけじゃ無いよ!?

ちよつぱり変わった、ほんつつつちよつぱり（強調）キャラの強い人がいるだけ

だもん!!!

「むむむ…そんな事言うなら俺手伝いたくなくなつちやうぞ！」

「そいつの見た目なんだが…」

「話聞けよ!!!」

「そいつの見た目なんだが！」

「ウイッス」

「曰く、金髪で眼鏡をかけた美丈夫らしい」

「ふんふん」

「……………」

「……………それだけ?」

「ああ。」

おーけー おーけー、落ち着け俺。相手はエドモンだ、元気いっぱい可愛くて、おつちよこちよいだった少年時代のエドモンだ(と思込込込込)

そう、優しく、諭すように伝えなければいけないんだ、**!!**落ち着け…

「それに該当する奴がどれだけいると思つてんだ**!!**テメエは**!!!!!!**」

「いいか?!美醜が一番わかりづらい特徴なんだぞ?!もしかしたら物凄い醜男かもしれないんだぞ?!」

「眼鏡なんぞ外してる時もあるんだぞ?!そしたら特徴なんて金髪しかないじゃ無いか**!!!!!!**それならトマだつて歳のせいで目が見え辛くてこの前眼鏡作つたわ**!!!!!!**」

「……………すまん。」

「ううん、こつちも怒鳴つてごめん。ほかに何か覚えてる事ある?」

「フアリア神父から聞いた。彼を嵌めてシャトー・デイフに入れたのはそいつだと。」

「よく思い出して。神父ばどんな人だと言つていたんだ?」

「確か……………名前はタランテラ…?だつたか」

「ええ?イタリア人の知り合いかかすつごい少ないんだけど…」

「イタリア人？」

「えっ……だって、タランテラでしょ？イタリア・ナポリの舞曲の名前だよ？偽名だと思  
うけど、イタリア人の可能性高いじゃん」

「ふむ……」

「ほかに何か関係する事言ってなかった？」

「……………」

あらら、エドモンは唸りながら考え込んだし凄く暇だ。

疲れたなあと思いつつ、背もたれに体を預けて休む

ふと、エデも来ていた事を思い出して頭を倒した

逆さまになった世界ではアルベルとエデ、ミアが仲良くお喋りをしていた

ニコニコと笑っていて、本当に幸せなんだろう

妬ましい

みんなひとりじゃないんだ

ひとりをしらないんだ





た。【吸血鬼】とも

「ええ…【セイドウキョウカイ】？んん？」【セイドウキョウカイ】「って【聖堂教会】？」  
「知っているのか？」

「うん。確かこの前俺の事殺しにきた奴らがそう名乗ってた。貴様の行使する魔術は異端でうんたらかんたら言ってたよ。確かにその中に眼鏡の金髪ならいたよ。その後にも夜の散歩中に会ったりしたし」

「本当か!？」

「うん。住居も知ってる。けど行きたくない」

「何故だ」

「え？逆にエドモンは《私のモノになりなさい!》とか言いながら襲って（意味深）くる奴に近づきたい？」

「……お前は昔から変なのになんか好かれるな」

「やめて？なんでただ会話してただけなのに《貴方の知識全てが欲しい!私のモノになりなさい!》とか言って襲い掛かってくんのか？ばか？しぬの？しぬの？」

ああ、何だろおなあ〜！ちよつと汗かいちやつたかなあ!?!しよっぱい水が流れてくるなあ!?!

ちくしょう!!!!なんで寄ってくるのは変態(♂)なんだよ!せめて変態(♀)が良かった

た！可愛い子が良かった！！！！

はくくく（クソデカため息）

やだなー！！！！

いろんな意味で死にたくなるんだよなあ！！！！

「あ”あ”あ”あ”……………うう…ちよつとまってて…」

「そんなに嫌か？」

「死ぬほど嫌だけどエドモンが言うから頑張る…」

自分の部屋の寝室、この部屋には少し特殊な仕掛けをしてある。実を言うと、昔質に入れたメリーのドレスを買い戻していた。そのドレスを隠すための仕掛けだ。クローゼットの奥の壁をスライドさせると、取っ手が現れる。そこを開くとドレスや、チョーカーなど、大事なものがしまつてある

「えーつと……………あつた、これだ。」

木箱にズラリと並んだ宝石の1つを手に取り、小さな巾着に入れた

「エドモン、これ。首にかけていて」

「これは？」

「昔あげたサファイアあるでしょ？それとおんなじように魔術をかけてある石。」

「……………ん？まて、あのサファイアにもかけてあったのか？」

「そうだよ。あのサファイアは水辺での危険を遠ざけるようなもの。ソレはファイブロ  
ライトって言う石。危ないモノが近くにいると警告してくれるよ」

「そうか……」

「うん……………じゃあ……………いくかあ……」

「すまない」

カージユを説得して二人乗りして早数時間

真つ暗な森の中を突き進んでいた

ぽつりと一軒だけ建っている家の前で止まった

「ここだよ」

「随分と……」

「ボロい？でも魔術師だしここも工房なんだって  
も？」

「他にも数箇所あるって」

「……よく知ってるな」

「連れてこうとするんだもん」

「……………」

「……………」

「入るか……………」

あーいやだなあ!!

今すぐ帰りたいなあ!

そんな気持ちを含めながら、

「どっせい!!!」

「うわっ!!」

ふむ、外に気配を感じてドアのすぐ近くに居たみたいだ。可哀想に、ドアに潰されてしまった！いやあー全くの偶然だ！カワイソウ！カワイソウ！

「誰だい!?!こんな野蛮な……！メーガス！やつと私のモノになる気に……！」

「エドモン、まだ日は沈んでないよね？うん、ないね！ミハイル！日光浴を楽しもうじゃあないか！」

「……………」

メルの寄越した宝石はコートの内ポケットに放り込んだ。だから何か変化があつても気がつかないかもしれない。そう思っていた。

石のある場所は火傷をしそうなほど熱く、耳元で金属の擦れ合う耳障りな音が響いている。

よくわかる

こいつが、俺では殺せないほどに強いのだということが

……ただ、見た目は、ただの痩せた科学者……というよりは親友の足に縋り付いている変態だろうか

「いい加減にしろ!!!」

「嫌だ!君が私のモノになるまで離さない!」

「ああもう!服にこびりついた血みたいなの奴だな本当に!しつこいつたらありやしない!」

「吸血鬼には褒め言葉だね!」

「その長い三つ編み引っこ抜くぞ!!」

「もう引つ張ってるじゃないか!」

「離せ!」

「嫌だ!」

さつきからザクザクとひたすら刺してるのに全く離れようともしない。

頭が痛くなるから本当は使いたくなかったけど、先生直伝のアブナイ魔術を使うしか

ないか?!

「クトゥゥゥアの驚嘆み」

「ギョッ!」

「さつきとくたばれドグサレが!!!」

ミハイルは魔術で強化されていたであろう家のかべに叩きつけられて、周囲を真っ赤にリフォームさせていた

「回復し切る前に帰ろ」

「あ、ああ…」

—————

「それで？夕飯に遅れた訳ですか？」

「ウツス…」

「私のこと置いて行って二人でランデブーですか？モンテ・クリスト伯爵さま？」

「そんな訳では…！」

「せつかく私とミアが作った美味しい料理を放つてよお？」

「ウイツス…」

「あなた、恋人より友人取るとかフられても文句言えないんすよ？しかも親子ほども離れてるのに」

「ぐっ…」

「しばらく私達は料理しません。旦那様デメエが作ってくださいね」



「何も言い返さないなんて酷いです！私、もう怒りました！メーガスさん！私と明日、デートしましょう!!」

「はあ!?何言ってるんですオタク!?!」

「えっ、うん、いいよ全然。好みの子だし」

「なっ…!メル!!」

デート編につ・づ・か・な・い♡

## 死んだ日

コツリ、コツリとヒールを鳴らして歩く妖艶な美女  
ワインレッドのドレスが目を惹く

表情はポークボンネットに隠れて見えない

ただ、血のように赤いルージュが微笑みを浮かべていた

「もし……その方」

伯爵の頼みで街に買い出しに行っていた俺は、伯爵の屋敷の前で呼び止められた  
「はい？………わぁ………」

振り向けば、そこにいたのは綺麗な女の人だった

マルセイユの海を切り取ったかのような瞳が印象的だった

「ここは、モンテ・クリスト伯の屋敷で間違いないかしら？」

「えっと、はい。なんでしたら伯爵のこと呼んできましようか？」

「いいえ、それには及ばないわ。これを彼に渡して欲しいの」

そう言つて彼女が渡してきたのは手紙だった

どこの家紋も押していない、ただ「M」という文字だけの封がされている

「あの！お名前は……」

「そうね……彼にはこう伝えて。貴方達の幸せを願つた女だと」

よろしくね、

そう言つて踵を返した女性に、俺は声をかけることが出来なかつた

「伯爵、さつき屋敷に戻る直前に手紙を渡されたんですが……」

「また下らんパーティへの誘いだらう。捨てておけ」

「はあ……そうなんですかね……？」

「違うとでも？」

「あつ、いいえ、そんな事無いと思います。ただ、渡してきた女性が気になつて……」

「使いのものでは無いのか？」

「綺麗なワインレッドのドレスを着た若い女性でした。それこそエデさんくらいの」  
「親の使いだろう」

「名前も聞いたんですが、貴方達の幸せを願った女だと名乗ってました。だからなのか封の部分も家紋でなくて【M】だけなんですよね」

「……さて、その女の特徴を言ってみろ」

「えっ!? あつと…ワインレッドのドレス、ポークボンネットつけてたから分かりずらかったけど、青い綺麗な目で…肌がすごく白くて人形かと思いました。あとは…うーん…あ! 髪がメーガスさんみたいな色でしたよ!」

「今すぐその手紙をこちらに寄越せ!!!」

「ひゃい!!!」

親愛なるエドモン様

お久しぶりですね、と言える身分では無いことは分かっています。貴方のことを裏切つて、逃げ出してしまいました。

今更何を、とお思いでしょうが1つ2つ、伝えたいことがあるので、伝えてしまいた

かったのです。

まず、私の失踪について。2つ目はアルベールについて。

失踪についてはメルが全てを知っています。ですが、彼に聞くことはできないでしょうから、同封した鍵をお使い下さい。恐らく全てがわかるでしょう。

アルベールについては、気づいているかもしれないませんが、私の子ではありません。メルの子でもありません。彼が町で拾った子供です。

こんな事を言つて、何がしたいのか。私にもよくわかりません。ただ、伝えたいのは心の底から貴方を愛している。それだけは何があつても変わらない、ということですよ。

乱文、失礼しました

ご結婚、おめでとうございます。同じ人を愛したエデさんにも、どうぞよろしく。

貴方を愛したメルセデス・モンテゴより

今、俺……私は、自分の身体にかけた魔術を解いた

体は華奢になり、背は低くなった

今、鏡に映る人物はメーガス・グランツではなく、メルセデス・モンテゴという女性だ

てつきり、魔術を解けば、それ相応の年になると思っていたけどかけた当時の見た目のままだった。

「このまま見つかったら、きつとエドモンなら気付くんだろうなあ」

髪型をメリーと同じに切つて、彼女が気に入っていたドレスを着る。手袋をつけて、ヒールを履く。髪をまとめてポークボンネットを被る。

最後に、黒いシルクのチョーカーをつければ完成だ。

手紙を持って、窓から飛び出した

誰にも見つかつてはいけない

誰にも気づかれてはいけない

誰にも心配させてはいけない

手紙を託した俺は、

波の押し寄せる崖の上で

胸にナイフを突き立てて

飛び降りた

「いつも」

「本当に人は面白<sup>つまらない</sup>い」

「貴方は特にです」

「だから」



「これはご褒美罰ですよ」